

授業科目名	生物学		担当者名	眞柳 みゆき			
			実務経験				
教科書	リハベーシック 生物学・生体防御学 【医歯薬出版】	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
	時間数	言語聴覚科	1	前期	必修	講義	
30							
授業概要	リハ専門職に求められる生物学・生体防御学をわかりやすく説明していく。						
学習到達目標	生物学・生体防御学についての基礎知識を習得する。						
評価方法	授業・課題への取り組み方・試験の結果を考慮して総合的に判断する。						
時数	授 業 内 容		到達目標・学習課題など				
1	なぜ生物学・生体防御学を学ぶのか？		生物学・生体防御学を学ぶ意義を知り、リハビリテーションへの活かし方を理解する				
2	リハビリテーションに活かす生物学・生体防御学						
3	細胞・染色体・遺伝子①		細胞の構造・機能・遺伝情報について理解する				
4	細胞・染色体・遺伝子②						
5	細胞の発生とネクロシス・アポトーシス①		ヒトの発生と分化について細胞レベルで理解する				
6	細胞の発生とネクロシス・アポトーシス②						
7	胚葉の発生組織と器官①		各胚葉からの組織・器官の発生について理解する				
8	胚葉の発生組織と器官②						
9	神経系・消化・代謝①		神経情報の伝達やエネルギー代謝について理解する				
10	神経系・消化・代謝②						
11	血液①		血液について理解する				
12	血液②						
13	内分泌①		内分泌器官・ホルモンについて理解する				
14	内分泌②						
15	復習		小テストを行い知識を整理する				
16	ウイルスと細菌①		ウイルスと細菌について学び、その違いと疾患について理解する				
17	ウイルスと細菌②						
18	生体防御と炎症①		生体防御機構と炎症について理解する				
19	生体防御と炎症②						
20	免疫①		免疫機構について理解する				
21	免疫②						
22	アレルギーと免疫異常①		アレルギーについて理解する				
23	アレルギーと免疫異常②						
24	個体の老化①		フレイル等、個体の老化について理解する				
25	個体の老化②						
26	感染症①		各種感染症について理解する				
27	感染症②						
28	院内感染対策①		予防接種等を含めた予防策及び感染症発生時対応法について学ぶ				
29	院内感染対策②						
30	復習		小テストを行い知識を整理する				

授業科目名	統計学		担当者名	福原浩之、小幡紘輝			
			実務経験				
教科書	すぐできる！ リハビリテーション統計 改訂第2版増補 南江堂	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	1	後期	必修	講義
30							
授業概要	記述統計を中心として統計の基礎知識を学ぶ。Excelを用いた演習も適宜行い、基礎的な分析の一連を体験する。						
学習到達目標	①統計の基礎的な用語を理解する。②データの特性に応じて利用可能な分析手法を理解する。③Excelなどを用い実際に基本的な分析結果を求めることができる。④実際のデータにおいて記述統計の観点から分析を行い、基本的なデータの特徴を説明できる。						
評価方法	出席・課題提出・試験						
時数	授 業 内 容		到達目標・学習課題など				
1	統計学とは		授業の説明を行う。統計の必要性を理解する。				
2	母集団と標本		母集団と標本の意味と方法を理解する。				
3	データの収集		データ収集における基本的なデータ構造、記録方法および尺度を理解する。				
4			変数の理解、分析における交絡と表現方法について理解する。				
5	クロス集計		クロス集計の意味と方法を理解する。				
6			クロス集計を用いた調査の目的と方法を理解する。				
7	度数分布とヒストグラム		度数分布の意味と方法を理解する。				
8			ヒストグラムの意味と方法を理解する。				
9							
10							
11	要約統計		数値要約の意味と方法を理解する。				
12			四分位数の意味と方法を理解する。				
13	箱ひげ図と幹葉図		五数要約の考え方と箱ひげ図の記述方法を理解する。				
14			幹葉図の意味と方法を理解する。				
15	分散		散布度および偏差の意味と方法を理解する。				
16			母平均と母分散の意味と方法を理解する。				
17	標準化		標準化の意味と方法を理解する。				
18			偏差値の意味と方法を理解する。				
19	相関		相関の意味および散布図による方法を理解する。				
20			相関係数と回帰係数の意味と方法を理解する。				
21	総合演習		調査目的に合わせ統計の実践を行う。 実際の課題に対して記述統計を活用した解決方法を学ぶ。 一連の分析を通じて、データの説明において記述統計で出来ること、出来ないことを明確にする。その上でさらなる統計手法を学ぶ意義を理解する。				
22							
23							
24							
25							
26							
27	まとめと振り返り		授業の内容を振り返り統計の目的と方法の理解を深める。				
28							
29							
30							

授業科目名	生活の化学		担当者名	眞柳みゆき、熊谷美緒			
			実務経験				
教科書	食と栄養を学ぶための化学 化学同人 適宜、配布資料(プリント)使用	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	1	後期	必修	講義
30							
授業概要	暮らしに最も身近で、最も欠かせない「化学」について、解説する。						
学習到達目標	生活を化学的現象から考えられる力・利用する力をつける。						
評価方法	試験及び課題提出等から、総合的に判断する。						
時数	授 業 内 容		到達目標・学習課題など				
1	私たちの毎日を支えている化学について		生活と化学の関わりや化学の概要について理解する				
2	化学を学ぶ意義						
3	物質とは		物質について学び理解する				
4	原子の構造と化学結合						
5	水の化学①		水の特異性について化学的側面から理解する				
6	水の化学②						
7	物質の三態について		物質の三態を知る				
8	酸と塩基①		酸と塩基について理解する				
9	酸と塩基②						
10	酸と塩基③						
11	生活の化学 応用編①		生活に应用されている化学現象を学ぶ				
12							
13	ミネラル①		ミネラルについてその役割も含めて理解する				
14	ミネラル②						
15	有機化学①		有機化学について学ぶ				
16	有機化学②						
17	有機化学③						
18	有機化学④						
19	生活の化学 応用編②		生活に应用されている化学現象を学ぶ				
20							
21	炭水化物①		炭水化物について理解する				
22	炭水化物②						
23	脂質①		脂質について理解する				
24	脂質②						
25	アミノ酸とタンパク質①		アミノ酸とタンパク質の関連性も含めて両物質を理解する				
26	アミノ酸とタンパク質②						
27	有機化合物①		有機化合物について、生活に应用されているものを知り理解する				
28	有機化合物②						
29	生活の化学 応用編③		生活に应用されている化学現象を学ぶ				
30							

授業科目名	情報処理		担当者名	熊谷美緒			
			実務経験				
教科書	教科書指定なし 配布資料(プリント)使用	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	1	前期	必修	講義
30							
授業概要	Microsoft Windows を使用し、ファイル管理・文書作成・発表資料の作成等、言語聴覚士に必要な基本的PC操作を学びます。						
学習到達目標	①Wordで基本的なビジネス文書が作成できる。②Excelで作成・関数・グラフ作成ができる。③Powerpointで見やすいプレゼン資料を作成できる。④基本的なPC操作・ファイル管理ができる。						
評価方法	試験及び課題提出等から、総合的に判断する。						
時数	授 業 内 容		到達目標・学習課題など				
1	オリエンテーション(PC室の使い方、PC基本操作等)		言語聴覚士として必要な情報(文献)の検索方法及び取り扱い方法を理解する。				
2	ファイルの作成と保存、情報の検索方法と取り扱い方法						
3	Word① 基本操作(画面構成、文字入力)		左記の内容を身につける。				
4	Word② 文字修飾(フォント、サイズ、色、太字等)		左記の内容を身につける。				
5	Word③ 段落設定(中央揃え、インデント、行間)		左記の内容を身につける。				
6	Word④ 箇条書き、番号付きリスト		左記の内容を身につける。				
7	Word⑤ 表の作成と編集		左記の内容を身につける。				
8	Word⑥ 画像の挿入、配置		左記の内容を身につける。				
9	Word⑦ ビジネス文書の基礎(案内文等)		左記の内容を身につける。				
10	Word⑧ Word総合練習(課題作成)		左記の内容を身につける。				
11	Excel① 基本操作(画面構成、入力)		左記の内容を身につける。				
12	Excel② セル操作、オートフィル		左記の内容を身につける。				
13	Excel③ 基本関数(SUM、AVERAGE)		左記の内容を身につける。				
14	Excel④ 基本関数(MAX、MIN、COUNT)		左記の内容を身につける。				
15	Excel⑤ 表作成(罫線、書式設定)		左記の内容を身につける。				
16	Excel⑥ 表の見やすいデザイン		左記の内容を身につける。				
17	Excel⑦ グラフ作成(棒グラフ)		左記の内容を身につける。				
18	Excel⑧ グラフ作成(折れ線グラフ)		左記の内容を身につける。				
19	Excel⑨ 簡単なデータ分析(並び替え、フィルタ)		左記の内容を身につける。				
20	Excel⑩ Excel総合演習(課題)		左記の内容を身につける。				
21	PowerPoint① 基本操作		左記の内容を身につける。				
22	PowerPoint② スライド作成(タイトル、本文、スライドマスター)		左記の内容を身につける。				
23	PowerPoint③ 図形、画像の活用		左記の内容を身につける。				
24	PowerPoint④ デザイン、テーマの活用		左記の内容を身につける。				
25	PowerPoint⑤ アニメーション、画面切り替え		左記の内容を身につける。				
26	PowerPoint⑥ 発表資料の構成、ノートの活用		左記の内容を身につける。				
27	PowerPoint⑦ プレゼン資料作成(実践)		左記の内容を身につける。				
28	PowerPoint⑧ 発表練習		左記の内容を実施する。				
29	最終課題発表		これまで身につけた内容を活用しながら発表資料を作成し、発表する。				
30	まとめ・振り返り・評価						

授業科目名	現代表現		担当者名	町田洋介			
			実務経験				
教科書	配付プリント	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	1	後期	必修	講義
30							
授業概要	日本語における表記の仕方や文章構成について学ぶ。文の基本構造について理解し、その構造を意識した文の作成を行う。さまざまな様式の文章を知り、その正しい表現の仕方・書き方について学ぶ。						
学習到達目標	文章作成における基礎を習得したうえで、状況毎に必要な文書作成力を身に付ける						
評価方法	授業内課題および筆記試験による						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	日本語表記の基礎(1) 文法			文章作成にあたり必要な国語文法の基礎を身に付ける			
2							
3	日本語表記の基礎(2) 原稿用紙の書き方・文体						
4							
5	日本語表記の基礎(3) 記号の使い方・句読点の打ち方						
6							
7	日本語表記の基礎(4) 漢字表記とひらがな表記・表記ゆれ						
8							
9	日本語表現の基礎(1) 段落構成			段落構成の基本と段落を分ける意味を知り、段落構成を意識した文章を書ける			
10							
11	日本語表現の基礎(2) 対比関係①			文章の構造を捉えながら、情報を整理して読み取ることができる 構造を意識した文章を書ける			
12							
13	日本語表現の基礎(3) 対比関係②						
14							
15	日本語表現の基礎(4) 言い換え表現			言い換え前後の表現を正しく把握できる 様々な事物、表現の具体化・抽象化ができる			
16							
17	日本語表現の基礎(5) 因果関係			根拠や原因を正しく読み取ることができる 因果関係の明確な文章を書ける			
18							
19	日本語表現の基礎(6) 敬語			場に応じた敬語表現を身に付ける			
20							
21	発想法(1) 拡散的思考と収束的思考			知識や情報を整理・統合する技法を知る			
22							
23	発想法(2) 創造的発想			創造的な発想の技法を使うことができる			
24							
25	手紙の作成			定型的な文書を作成する力を身に付ける			
26							
27	メールの作成						
28							
29	その他の文書の作成						
30							

授業科目名	保健体育		担当者名	沼田 尚			
			実務経験				
教科書	なし	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		1					
		時間数	言語聴覚科	1	後期	必修	演習
30							
授業概要	本授業では、様々な運動を体験することで、実践することの「楽しさ」を理解し、必要な基礎的運動技術を獲得することを目的とし、生涯、スポーツへと関わっていくための運動習慣やコミュニケーション能力の習得、養成、向上を図る。						
学習到達目標	① 怪我をしないようにみんなで楽しみながら、様々な運動を積極的に体験し、基礎的運動技術を獲得・向上させる。 ② 様々なスポーツのルールを理解する。③ 体づくり運動を行うなかで、自己の柔軟性や身体の動きを理解する。④ スポーツを通して、コミュニケーション能力を習得、養成、向上する。						
評価方法	<ul style="list-style-type: none"> ・ 受講態度(80%)…出席状況と授業への取り組む姿勢・態度など。 ・ 技術習得と理解度(20%)…各種目における、技術の習得とルールの理解度などをみる。 実技試験を行う場合もある。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 課題レポート…適宜レポートの提出を求めることもある。 						
時数	授 業 内 容		到達目標・学習課題など				
1	オリエンテーション		授業への取り組む姿勢・態度に気を付ける				
2	ストレッチ運動		体調を整えて、自身の現状を認知し、体力に合わせて実施する				
3	身体づくり運動1(自重トレーニング)		体調を整えて、自身の現状を認知し、体力に合わせて実施する				
4	身体づくり運動2(自重トレーニング)		体調を整えて、自身の現状を認知し、体力に合わせて実施する				
5	身体づくり運動3(持久カトレーニング)		体調を整えて、自身の現状を認知し、体力に合わせて実施する				
6	身体づくり運動4(持久カトレーニング)		体調を整えて、自身の現状を認知し、体力に合わせて実施する				
7	身体づくり運動5(ペアトレーニング)		体調を整えて、自身の現状を認知し、体力に合わせて実施する				
8	身体づくり運動6(ペアトレーニング)		体調を整えて、自身の現状を認知し、体力に合わせて実施する				
9	道具を使ったスポーツ1 (バドミントン・卓球・シャッフルボード・バグジー)		体調を整えてコミュニケーションを取りながら積極的に参加する				
10	道具を使ったスポーツ2 (バドミントン・卓球・シャッフルボード・バグジー)		体調を整えてコミュニケーションを取りながら積極的に参加する				
11	道具を使ったスポーツ3 (バドミントン・卓球・シャッフルボード・バグジー)		体調を整えてコミュニケーションを取りながら積極的に参加する				
12	道具を使ったスポーツ4 (バドミントン・卓球・シャッフルボード・バグジー)		体調を整えてコミュニケーションを取りながら積極的に参加する				
13	道具を使ったスポーツ5 (バドミントン・卓球・シャッフルボード・バグジー)		体調を整えてコミュニケーションを取りながら積極的に参加する				
14	道具を使ったスポーツ6 (バドミントン・卓球・シャッフルボード・バグジー)		体調を整えてコミュニケーションを取りながら積極的に参加する				
15	道具を使ったスポーツ7 (バドミントン・卓球・シャッフルボード・バグジー)		体調を整えてコミュニケーションを取りながら積極的に参加する				

16	道具を使ったスポーツ8 (バドミントン・卓球・シャッフルボード・バグダー)	体調を整えてコミュニケーションを取りながら積極的に参加する
17	道具を使ったスポーツ9 (バドミントン・卓球・シャッフルボード・バグダー)	体調を整えてコミュニケーションを取りながら積極的に参加する
18	道具を使ったスポーツ10 (バドミントン・卓球・シャッフルボード・バグダー)	体調を整えてコミュニケーションを取りながら積極的に参加する
19	道具を使ったスポーツ11 (バドミントン・卓球・シャッフルボード・バグダー)	体調を整えてコミュニケーションを取りながら積極的に参加する
20	道具を使ったスポーツ12 (バドミントン・卓球・シャッフルボード・バグダー)	体調を整えてコミュニケーションを取りながら積極的に参加する
21	道具を使ったスポーツ13(インディアカ)	体調を整えてコミュニケーションを取りながら積極的に参加する
22	道具を使ったスポーツ14(インディアカ)	体調を整えてコミュニケーションを取りながら積極的に参加する
23	道具を使ったスポーツ15(インディアカ)	体調を整えてコミュニケーションを取りながら積極的に参加する
24	道具を使ったスポーツ16(インディアカ)	体調を整えてコミュニケーションを取りながら積極的に参加する
25	道具を使ったスポーツ17(ソフトバレーボール)	体調を整えてコミュニケーションを取りながら積極的に参加する
26	道具を使ったスポーツ18(ソフトバレーボール)	体調を整えてコミュニケーションを取りながら積極的に参加する
27	道具を使ったスポーツ19(ソフトバレーボール)	体調を整えてコミュニケーションを取りながら積極的に参加する
28	道具を使ったスポーツ20(ソフトバレーボール)	体調を整えてコミュニケーションを取りながら積極的に参加する
29	道具を使ったスポーツ21(シッティングバレーボール)	体調を整えてコミュニケーションを取りながら積極的に参加する
30	道具を使ったスポーツ22(シッティングバレーボール) まとめ	体調を整えてコミュニケーションを取りながら積極的に参加する

授業科目名	教育学		担当者名	町田洋介			
			実務経験				
教科書	『アクティベート教育学01教育原理』ミネルヴァ書房	単位数	学 科	学 年	学 期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	1	後期	必修	講義
30							
授業概要	教育という営みの範疇とその意義について理解し、現代の教育に連なる教育思想および教育制度の歴史についての知識を得る。また、学校教育を中心とする現代教育の諸課題について学ぶ。						
学習到達目標	教育についての広義の意義・目的を理解する。教育思想および教育制度の歴史を学ぶことにより、その理解を深める。現在の学校教育における諸制度・諸実践について理解する。						
評価方法	授業内小テストおよび筆記試験による						
時数	授 業 内 容		到達目標・学習課題など				
1	教育とは何か		教育として行われるさまざまな活動を知り、教育について理解する。				
2							
3	生活と教育		家庭教育、社会教育について理解する。				
4							
5	公教育の在り様		学校教育を中心に公教育の歴史を知り、公教育の在り方について理解する。				
6							
7	西洋教育思想の歴史(1) 古代		古代ギリシア哲学における知への欲求を学び、教育の源流に関する知識を得る。				
8							
9	西洋教育思想の歴史(2) 中世		中世からルネサンス期におけるヨーロッパのキリスト教を基盤とした教育観・人間観について理解する。				
10							
11	西洋教育思想の歴史(3) 近代		今日の教育観の基盤を成す近代教育思想について理解する。				
12							
13	西洋教育思想の歴史(4) 現代		新教育の理念と実践について理解する。				
14							
15	学校教育の歴史		近代における学校の誕生と展開についての知識を得る。				
16							
17	日本における教育の歴史(1) 近代以前		江戸時代までの子ども観、教育観について理解する。				
18							
19	日本における教育の歴史(2) 近代		明治期に整備された学校教育制度と、新教育および戦争の影響について理解する。				
20							
21	日本における教育の歴史(3) 現代		戦後の学校教育制度とその展開について理解する。				
22							
23	西洋における教育実践		新教育運動の実践についての知識を得る。				
24							
25	日本における教育実践		日本における新教育運動と、生活綴方についての知識を得る。				
26							
27	学力とは何か		教育で育む資質・能力について理解する。				
28							
29	教育における現代的課題		情報化社会における学校教育の諸課題について理解する。				
30							

授業科目名	心理学		担当者名	島田真須美			
			実務経験	公認心理師として診療所等での勤務経験あり			
教科書	心理学・臨床心理学 第2版 内山靖・藤井浩美・立石雅子 編 医歯薬出版株式会社 2024	単位数	学 科	学 年	学 期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	1	前期	必修	講義
30							
授業概要	リハビリテーション専門職は、人との関わりが多い職種であるため、心理学の知識が活かされる事があると思われる。リハビリテーションの視点を持ちながら心理学の基礎的な知識について詳述する。						
学習到達目標	リハビリテーション専門職として心理学を学ぶ意義を知り、リハビリテーションに活かす心理学の基礎的な知識を修得する。						
評価方法	出席、授業態度、期末試験から総合的に評価する。						
時数	授 業 内 容		到達目標・学習課題など				
1	心理学とは		心理学の基本概念について説明できる 教科書 第1章				
2							
3	心理学の誕生と発展		心理学の誕生と発展について説明できる 教科書 第2章				
4							
5	感覚・知覚・注意・認知		感覚・知覚・注意・認知について説明できる 教科書 第3章				
6							
7	情動・動機付け・パーソナリティ・社会		情動・動機付け・パーソナリティ・社会について説明できる 教科書 第4章				
8							
9	記憶・学習		記憶・学習について説明できる 教科書 第5章				
10							
11	言語・概念・思考		言語・概念・思考について説明できる 教科書 第6章				
12							
13	発達と知能		発達と知能について説明できる 教科書 第7章				
14							
15	臨床心理学とは		臨床心理学について説明できる 教科書 第8章				
16							
17	防衛機制		防衛機制について説明できる 教科書 第9章				
18							
19	心理アセスメント		心理アセスメントについて説明できる 教科書 第10章				
20							
21	臨床で用いられる心理検査		臨床で用いられる心理検査について説明できる 教科書 第11章				
22							
23	臨床心理学の介入方法(行動的)		臨床心理学の介入方法(行動的)について説明できる 教科書 第12章				
24							
25	臨床心理学の介入方法(内面的)		臨床心理学の介入方法(内面的)について説明できる 教科書 第13章				
26							
27	臨床心理学の介入方法(相談的)		臨床心理学の介入方法(相談的)について説明できる 教科書 第14章				
28							
29	心理学・臨床心理学まとめ		心理学・臨床心理学の基礎的な知識について説明できる				
30							

授業科目名	英語		担当者名	都築玲子			
			実務経験				
教科書	指定しない プリント小冊子を使用する	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	1	前期	必修	講義
30							
授業概要	医療、科学、環境等の分野についてのニューストピックや、DVDを使用し知見を広めながら、医療実務で役立つ基礎英語力を養成する。						
学習到達目標	英文の基本構造をとらえられるようになり、文、段落、文全体を理解し、必要な情報を得られるように基礎力を身につける。						
評価方法	出席、クラス参加、課題提出、小テスト、期末試験の結果の総合評価とする。						
時数	授 業 内 容		学 習 課 題 ・ 留 意 事 項 等				
1	自己紹介・クラス予定・評価方法 Icebreaking game		クラスルールと、自己紹介、今後の英語学習のためのコツ、前期授業評価基準について理解する。				
2	TOEIC Bridge Sample Test 自己評価		現在の英語力を評価し、各自半年後の目標を確認する。				
3	Comparing COVID-19 with previous pandemics		紀元前から現代まで、人類に幾度か危機をもたらしたパンデミックとCOVID 19を比較し、違いと教訓を学ぶ。				
4	After effects of COVID 19, 次のパンデミックに備える		DVD Are we ready for a pandemic? Bill Gates				
5	1. New Measles Outbreak in Europe		読解Rule1 文章の主語、動詞、目的語、補語など文の構造を理解できる。				
6	2. Outbreak of Plague in Madagascar		マダガスカルで流行した病気について理解できる。				
7	3. New Blood Test may detect cancer		読解Rule 2 代名詞が何を示すか説明できる。				
8	消化器系の臓器の英語表現をまとめる		癌を察知できる新しい血液検査はどのようなものか理解する。				
9	4. Baby Girl Born From Embryo Frozen 24 Years Age		読解Rule 3 言い換え表現を見つけられる。				
10	4. Baby Girl Born From Embryo Frozen 24 Years Age		24年前に凍結された受精卵から女の子が生まれた経過について説明できる。生殖医療の問題点が理解できる。				
11	5.Regular Exercise Can Improve Your Memory		読解Rule 4 地名、団体名、役職名などはまとめて読みやすくすることができる。				
12	5.Regular Exercise Can Improve Your Memory		記憶力、思考力に運動がどのような影響を与えるか説明できる。				
13	6. Moderate Coffee Consumption May Keep You Healthy		適当なコーヒーの消費がある種の病気の予防に役立つことが理解できる。				
14	6. Moderate Coffee Consumption May Keep You Healthy		コーヒーの効用とは何か理解する。				
15	7..Dog Ownership May Improve Your health		犬との生活が人の健康に及ぼす影響について説明できる。				
16	7..Dog Ownership May Improve Your health		どのような病気に効果的であるか説明できる。				
17	8.American Cardiologists Publish New Blood Pressure Guidelines		読解Rule 5 英文の構造をつかめる。				
18	8.American Cardiologists Publish New Blood Pressure Guidelines		血圧の基準値が変わった理由と高血圧の影響について説明できる。				

19	9. Cloning of First Monkeys in China	類人猿ではむずかしいとされることを可能にしたのはどのような技術か理解できる。
20	9. Cloning of First Monkeys in China	サルたちのその後と、その後の問題について理解できる。
21	Rehabilitation for stroke: What to know	脳卒中のリハビリテーションについてどのような職域連携が必要か理解する。
22	Rehabilitation for stroke: What to know	脳卒中が引き起こす障害とは何か。汰職域連携の例として読解する
23	10.Stephan Hawking dies at 76	ホーキング博士の功績について理解できる。
24	10.Stephan Hawking dies at 76	ALSとはどのような病気か理解できる。
25	10.Predictions of Dr. Hawking	ホーキング博士の12の未来予言を読解する。
26	There are no scraps of men	アフガニスタンで働き、神の使いとよばれるイタリア人理学療法士の奮闘について理解する。
27	Tribute to Tetsu Nakamura a humanitarian more than a doctor	中村哲氏がなぜアフガニスタンの地で働いたか目指したものを理解する。
28	Tribute to Tetsu Nakamura a humanitarian more than a doctor	Tribute movie
29	小テスト	vocabulary, Reading, composition
30	Review	総復習

授業科目名	コミュニケーション論		担当者名	小坂井秀行			
			実務経験	言語聴覚士として施設等での勤務経験あり			
教科書	コミュニケーション論・多職種連携論(医歯薬出版)	単位数	学 科	学 年	学 期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	1	後期	必修	講義
	30						
授業概要	言語聴覚士がリハビリテーションを実施する際に、まずリハ専門職として対象者とその家族とのコミュニケーションを円滑にすることは必須である。この授業では、対象者と家族、リハビリに関わる多職種の方々とのコミュニケーションを成立させるスキルをみがくための知識や技能を学ぶ。また、AACについて種類・方法・実際について学ぶ。						
学習到達目標	コミュニケーションの本質を理解し、人に伝えるとはどういうことか？コミュニケーションの手法を学びながら、対象者との面接、家族への伝え方、多職種との連携に必要な知識と応用力を身に着ける。						
評価方法	出席率、授業態度、定期試験による評価。						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	この授業の目的とコミュニケーションとは？			コミュニケーションとは何かを説明できる。			
2							
3	コミュニケーションの基本的な考え方			コミュニケーションの目的を学ぶ。			
4							
5	傾聴する力と説得する力			傾聴するための準備			
6				傾聴して共感する(グループ・ワーク)			
7	言語によるコミュニケーション			ことばの働きについて説明できる。(グループワーク)			
8							
9	ことば以外のコミュニケーション～感情の表現			ノンバーバル・コミュニケーションの重要性(グループ・ワーク)			
10							
11	コミュニケーションの手法			「開かれた質問」と「閉ざされた質問」を体験する(グループ・ワーク)			
12							
13	AACとは何か？			AACの意義、手法を理解し、説明できる。			
14							
15	AACの種類について(ローテク)			手作りのAACについて理解する。			
16	AACの種類について(ハイテク)			AACに役立つハイテク機器			
17	AACの実際と機器の操作と効果			各種機器の操作方法を説明できる。			
18				これからのAACについて(グループワーク)			
19	リーダーシップとメンバーシップ			リーダーに求められる資質を理解し、対してチームを構成するメンバーに求められることも説明できる。			
20							
21	多職種連携とチーム医療～他職種の理解と会話			他職種について説明できる。			
22				多職種連携の重要性を理解する。			
23	リーダーシップとメンバーシップ			リーダーに求められる役割、資質を理解する。			
24				メンバーの役割とリーダーとの関り方について理解し説明できる。			
25	チームアプローチの基本構造			PDCAサイクルについて理解し、説明できる。			
26							
27	チームアプローチの実際とSTの立ち位置			地域包括ケアシステムにおけるSTの役割を理解し、説明できる。			
28							
29	コミュニケーションについて新たに学んだことを発表する回			コミュニケーションとは何か、グループで考えたことをまとめて発表し合う。			
30							

授業科目名	医療倫理		担当者名	尾形由美子			
			実務経験	看護師として病院等での勤務経験あり			
教科書	医療概論(第4版)	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	1	前期	必修	講義
30							
授業概要	医療倫理の歴史、基本概念を理解し、医療現場で遭遇する倫理問題に対処できる言語聴覚士としての基礎的能力を養う。						
学習到達目標	①医療倫理の基礎知識を身につける。 ②医療倫理の問題や考え方を自分でも用いることができるようになる。						
評価方法	グループワーク、ディスカッション、ディベートなど30%、学期末試験70%						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	ガイダンス 医療と倫理との関わり			なぜ医療倫理を学ぶのかを理解できる。 人 道主義・人権について考える。			
2							
3	「医の倫理」小史 i 古代から近代への変遷			倫理規範の歴史を知ることができる。			
4							
5	「医の倫理」小史 ii リハビリテーションの変遷と今後の課題			医の倫理とリハビリテーションとの関連が理解できる。			
6							
7	「言語聴覚士」小史 iii 言語聴覚士の役割			言語聴覚士の役割が理解できる。			
8							
9	医療倫理学的問題 インフォームドコンセント			診療行為を正当なものとするための有効な同意であることを理解できる。			
10							
11	医療倫理学的問題 医療従事者の基本的義務			人命の尊重と患者への献身とはなにか理解することができる。			
12							
13	医療倫理学的問題 医療倫理の4原則			善行の原則と無危害の原則、自立尊重の原則、正義の原則が説明できるようになる。			
14							
15	医療倫理学的問題 医療倫理の4原則(事例から)			医療におけるモラルジレンマ、生命倫理の4原則を考える。			
16							
17	医療倫理学的問題 患者の権利を尊重する			人間の尊厳について考える。			
18							
19	医療倫理学的問題 生命の始まりに関わる倫理的問題			人工妊娠中絶、生命の選別、人工受精、体外受精について現状を知る。			
20							
21	医療倫理学的問題 生命の終りに関わる問題			終末期医療、尊厳死と安楽死について学ぶ。			
22							
23	医療倫理学的問題 臓器移植から再生医療			脳死、臓器移植、遺伝医療、再生医療をめぐる問題について学ぶ。			
24							
25	医療をめぐる状況 医療倫理から考える医療事故・医療安全			医療行為における過失、過誤について理解できる。医療事故を防止する取り組みを知る。			
26							
27	医療をめぐる状況 医療倫理から考えるwell-beingを高める支援			マズローの5段階の基本的欲求を理解し、幸福・健康を高めるために必要なものは何か説明できるようになる。			
28							
29	医療をめぐる状況 医療倫理から考える科学的根拠とこれからの医療			EBMとは何か、医療職は一生勉強していかねばならないことを理解する。			
30							

授業科目名	医学概論		担当者名	及川隆司			
			実務経験	医師として病院等での勤務経験あり			
教科書	学生のための医学概論 (医学書院)	単位数	学 科	学 年	学 期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	1	前期	必修	講義
30							
授業概要	我が国の医療体制の概念や考え方を解説する。また現在の我が国をとりまく医学全体について多岐にわたって講義する。						
学習到達目標	医療体制の概念や考え方を身に付ける						
評価方法	定期試験による						
時数	授 業 内 容		到達目標・学習課題など				
1	チーム医療・医療保険提供体制を理解する		医療を支える人々で保健医療サービスの提供体制、日本の医療保険制度、医療政策と医療計画・医療と経済				
2	医療保険制度・医療改革・医療と経済を理解する						
3	在宅ケアのシステム等を理解する		在宅ケアの推進				
4	高齢者ケアシステムを理解する		高齢者ケアシステムについて理解する				
5	災害医療の定義・種類		災害医療について理解する				
6	災害医療の実践-CSCATTT						
7	救急医療の歴史		救急医療の歴史と日本の現状について理解する				
8	わが国の救急医療体制		救急救命について理解する				
9	医療事故の定義と原因		医療安全について理解する				
10	医療事故の対策						
11	健康の定義・健康政策		健康の定義・ヘルスプロモーション				
12	オーダーメイドの健康増進・倫理規定		オーダーメイドの健康増進法について理解する				
13	老化・認知症の定義と対策		老化・認知症とその対策				
14	精神保健対策と将来		思春・青年・成人期の精神保健と対策について理解する				
15	リハビリテーションの目的とチームワーク		リハビリテーションの目的とチームワーク				
16	ノーマライゼーションへの道と課題		ノーマライゼーションへの道				
17	細菌と人間の戦いにみる医学の歴史		近代医学の誕生				
18	母子の健康をめぐる日本の医療の発達		日本の近代化と医療の発達について理解する				
19	放射線被爆と人間		薬害・公害事例から学ぶこと				
20	薬害・四大公害病から学ぶもの						
21	診断・治療機器の発達と課題		医用工学の発達				
22	臓器移植法の歴史とシステム		臓器移植の定義と施行について理解する				
23	遺伝子診断の課題と今後の医療従事者の役割		生命科学の発達と医学				
24	保健医療分野の国際化		海外での保健医療活動				
25	保管代替医療の内容		現代医療の新たな領域について理解する				
26	統合医療と食。日本における統合医療		予防等の基礎について理解する				
27	患者中心の医療・医療サービスと医学診断		現代医療が目指すもの				
28	POS診療記録が目指すもの		医療と診療記録				
29	チーム医療の実践。生命倫理とその判断		患者中心の医療の方法論				
30	インフォームドコンセント・個人情報保護とターミナルケア		生命倫理と患者の権利				

授業科目名	解剖学		担当者名	眞柳みゆき			
			実務経験	歯科医師として病院等での勤務経験あり			
教科書	言語聴覚士のための解剖・生理学	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
	発声発語・摂食嚥下の解剖・生理学	2					
	適宜:配布プリント【Crosslink】	時間数	言語聴覚科	1	前期	必修	講義
	脳の事典	30					
授業概要	言語聴覚士にとって重要な部分を中心に、人体の仕組みや各器官のはたらきに関して、なるべくわかりやすく解説していく。						
学習到達目標	人体の構造・しくみについての知識を習得する。						
評価方法	課題への取り組み・試験の結果を考慮して総合的に判断する。						
時数	授 業 内 容		到達目標・学習課題など				
1	からだの構造と機能の基本①		ヒトとは？人体の階層性を説明できる				
2	からだの構造と機能の基本②		解剖学的な基本用語を理解する				
3	骨格・骨の構造		骨格系の働きや骨の構造を理解する				
4	骨の連結・体幹の骨		関節・体幹の骨について理解する				
5	頭蓋		頭蓋を形成している骨を知る				
6	筋肉の種類と働き		筋肉について理解する				
7	骨格筋①体幹・上肢・下肢の筋						
8	骨格筋②頭頸部の筋						
9	循環器系		各系に属する器官とその機能・構造について理解する				
10	血液と免疫系・確認問題(p85)						
11	消化器系						
12	泌尿器系						
13	生殖器系						
14	生殖器系・内分泌系①						
15	内分泌系②						
16	感覚器系①						
17	感覚器系②						
18	神経系①						
19	神経系②						
20	神経系③						
21	小テスト		知識定着度を確認し不足している知識を補う				
22	発生発語・摂食嚥下とは？ かかわる器官① 口腔		発生発語・摂食嚥下にかかわる器官とその構造・機能を理解する				
23	発生発語・摂食嚥下にかかわる器官② 鼻腔・咽頭						
24	発生発語・摂食嚥下にかかわる器官③ 喉頭						
25	発生発語・摂食嚥下にかかわる器官④ 呼吸器						
26	発生発語機能・鼻咽腔閉鎖不全		発生発語の機能・かかわる神経について理解を深める				
27	発生発語の神経基盤						
28	摂食嚥下機能		摂食嚥下機能及びかかわる神経について理解を深める				
29	摂食嚥下の神経機構						
30	復習・小テスト		知識定着度を確認し不足している知識を補う				

授業科目名	生理学		担当者名	眞柳みゆき			
			実務経験				
教科書	言語聴覚士のための 解剖・生理学【医歯薬出版株式会社】	単位数	学 科	学 年	学 期	科目種別	授業方法
		2					
	生理学トレーニングノート 【医学教育出版社】	時間数	言語聴覚科	1	前期	必修	講義
30							
授業概要	人体のつくり(構造)については解剖学で学ぶが、生理学では、そのはたらき(機能)についてわかりやすく説明していく。						
学習到達目標	人体のはたらき(機能)について理解し、様々な生理現象を説明できる。						
評価方法	小テスト・提出物・定期試験をもって総合的に判断する。						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	生理学とは？人体の機能の基本			細胞・細胞膜・シグナル伝達等			
2							
3							
4							
5	神経と筋			神経・筋のはたらき			
6							
7	循環器系			心臓・血管系			
8							
9							
10							
11	血液・免疫系			血液・リンパの働き			
12							
13	呼吸器系			鼻腔・咽頭・喉頭・気管・気管支・肺の働き			
14							
15							
16							
17	消化器系			消化器系の臓器・消化液の働き			
18							
19	泌尿器系			泌尿器系の臓器・尿の生成排出について			
20							
21	生殖器系・内分泌系			生殖器系・内分泌系の臓器・内分泌液の働き			
22							
23							
24							
25	感覚器系			感覚器と各担当刺激の伝え方			
26							
27	神経系			神経系の機能・分類			
28							
29							
30							

授業科目名	病理学		担当者名	武田 和久			
			実務経験	医師として病院等での勤務経験あり			
教科書	はじめの一步の病理学 第2版	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	1	後期	必修	講義
30							
授業概要	ヒトのからだの正常な機能と構造が、さまざまな原因(病因)により異常となる仕組み、機序について学習し、それぞれの病態と正常な構造と機能との違いについて学習する。また、からだの損傷や創傷の回復や治癒の機序についても学習する。						
学習到達目標	[1]疾病の成立機序や疾病の基本となる病変とそれに伴う形態・機能の変化、病態生理学、病態生化学について説明できる。 [2]からだの損傷や創傷の回復や治癒の機序についても理解し説明できる。 [3]それぞれの病態と正常な構造と機能との違いについて理解し説明できる。						
評価方法	出席・授業態度・試験(1月)の結果を総合評価						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	病態学総論・疾病・人の死/細胞死			病態学の基本的事項や人の死/細胞死について説明できる。			
2							
3	2 細胞障害(細胞障害・変性)			細胞障害の原因と機序(変性)を分類し各々について説明できる。			
4							
5	細胞障害(生体色素・萎縮・肥大・化生)			色素変性及び病理的变化(細胞増殖・分化異常)について説明できる。			
6							
7	炎症			創傷治癒、炎症について説明できる。			
8							
9	免疫			免疫の異常(アレルギーや自己免疫病など)について説明できる。			
10							
11	血液循環障害			循環障害、出血素因、ショックの機序と疾患について説明できる。			
12							
13	出血 血栓 浮腫			出血・血栓・浮腫について説明できる。			
14							
15	先天異常・遺伝性疾患			遺伝子・染色体の異常疾患について説明できる。			
16							
17	感染症			感染症について説明できる。			
18							
19	腫瘍(1)総論 がんの浸潤・転移など			がんの基本的事項及び浸潤・転移のメカニズム及びがん病期ステージについて説明できる。			
20							
21	腫瘍(2)発癌のメカニズム			発がんのメカニズムと代表的遺伝性がん疾患について説明できる。			
22							
23	代謝性疾患(1)生活習慣病			糖・脂質代謝異常疾患について説明できる。			
24							
25	代謝性疾患(2)アミノ酸代謝異常症、その他			アミノ酸、黄疸、ビタミン、ミネラル異常などの代謝異常疾患について説明できる。			
26							
27	加齢 老年症候群			加齢の機序と加齢関連疾患について説明できる。			
28							
29	学びの振り返り			これまでの授業の要点事項を整理し、説明することができる。			
30							

授業科目名	耳鼻咽喉科学		担当者名	大山健二			
			実務経験	医師として病院等での勤務経験あり			
教科書	病気がみえる vol.13 耳鼻咽喉科	単位数	学 科	学 年	学 期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	1	前期	必修	講義
		30					
授業概要	言語聴覚士として活動するためには、聴覚・音声言語・嚥下等に関わる疾患を担当する耳鼻咽喉科学の知識が不可欠である。 耳鼻咽喉科で扱う領域の生理機能や代表的な疾患の概要について臨床医の立場で解説し、理解を助ける。						
学習到達目標	①耳・鼻・口腔・咽頭・喉頭の構造と機能について説明できる。②この領域の代表的疾患の機序と対応について理解する。③それらの疾患による言語・聴覚・嚥下機能への影響について理解する。						
評価方法	試験、その他課題等含めて総合的に判断する。						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	耳科学				耳の解剖・生理・検査 について理解する		
2							
3	耳科学				耳に関係した検査 について理解する		
4							
5	耳科学				中耳の疾患(中耳炎) についての知識を得る		
6							
7	耳科学				中耳の疾患(慢性中耳炎・伝音障害等) についての知識を得る		
8							
9	耳科学				内耳の疾患(感音難聴) についての知識を得る		
10							
11	耳科学				内耳の疾患(先天性・遺伝性難聴) についての知識を得る		
12							
13	耳科学				平衡機能障害(めまい)を呈する疾患 についての知識を得る		
14							
15	鼻科学				鼻の解剖・生理・検査 について理解する		
16							
17	鼻科学				鼻の疾患(鼻・副鼻腔炎) についての知識を得る		
18							
19	鼻科学				鼻の疾患(腫瘍等) についての知識を得る		
20							
21	口腔・咽頭科学				口腔・咽頭・喉頭の解剖・生理・検査 について理解する		
22							
23	口腔・咽頭科学				口腔・咽頭・喉頭の疾患 についての理解を得る		
24							
25	頭頸部外科学				頭頸部疾患の概要 についての知識を得る		
26							
27	補足				音声・言語・嚥下の障害 についての理解する		
28							
29	まとめ				講義全体を振り返って知識を整理する		
30							

授業科目名	一般臨床医学		担当者名	眞柳みゆき			
			実務経験	歯科医師として病院等での勤務経験あり			
教科書	臨床医学 基礎のキソ 南山堂	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	1	後期	必修	講義
30							
授業概要	言語聴覚療法を実施する際に役立つ医療知識を、今まで習ったことの復習もしながら説明する。						
学習到達目標	言語聴覚療法を行う際に、知っている役立つ医療知識を身につける。						
評価方法	試験及び課題提出等から、総合的に判断する。						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	種々の診察法(現病歴・既往歴やバイタルサインの取り方等を含む)			種々の診察法を知る			
2							
3	各種検査法			検査方法を知る			
4							
5	疾患学			疾患の基礎知識を身につける			
6							
7	薬物療法(投与方法・薬物効果の出方・薬剤の種類等)			薬物療法について理解する			
8							
9							
10	麻酔法(全身麻酔・局所麻酔)・鎮静法			麻酔法について理解する			
11	脳神経・脊髄疾患			各疾患について理解する			
12	口腔・頭頸部疾患						
13	循環器・呼吸器疾患						
14							
15	消化器・肝胆膵疾患						
16							
17	内分泌・代謝疾患						
18							
19	腎臓・泌尿器・生殖器疾患・悪性腫瘍・感染症						
20							
21	先天性疾患・運動器疾患						
22							
23	神経・膠原病・アレルギー・免疫疾患						
24							
25	精神科疾患						
26							
27	眼科・耳鼻咽喉科・皮膚科・小児科疾患						
28							
29	復習・小テスト			復習・小テストにより知識を整理する			
30							

授業科目名	呼吸発声発語系の構造・機能・病態		担当者名	及川 隆司			
				医師として病院等での勤務経験あり			
教科書	病気がみえるvol.13耳鼻咽喉科 (メディック・メディア)	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
	ぜんぶわかる呼吸の辞典 (成美堂出版)	時間数	言語聴覚科	1	後期	必修	講義
授業概要	発声・発話に関わる呼吸器系、口腔周辺の構造・機能・病態についての知識は、構音障害、音声障害、嚥下障害などの専門科目を学ぶ上で必須である。ここでは、それら専門科目を学ぶための基礎を固める。						
学習到達目標	①呼吸器系、喉頭、付属管腔の構造・機能について説明することができる。②発話運動における呼吸器系、喉頭、付属管腔の働きについて説明することができる。③呼吸器系、咽頭・喉頭、付属管腔の病態について説明することができる。						
評価方法	授業態度、定期試験の点数による評価。						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	呼吸器系の基本構造			呼吸器の役割について説明できる。			
2							
3	呼吸器系の基本構造			肺の構造機能、呼気筋と吸気筋、胸郭の運動、呼吸運動の神経支配について説明できる。			
4							
5	呼吸運動のメカニズム			吸気と呼気、安静呼吸と深呼吸、各種の肺気量と呼吸位、発声時の呼吸運動と呼気保持について説明できる。			
6							
7	呼吸機能検査の実際			肺活量と時間肺活量、その他の検査を学ぶ。			
8							
9	呼吸器系の病態			呼吸困難、喘鳴、異常呼吸、咳嗽、気道狭窄、過換気などについてそれぞれ説明できる。			
10							
11	喉頭の基本構造			喉頭の軟骨と靭帯、関節と筋群について説明できる。声帯と仮声帯、喉頭粘膜と分泌腺、神経と血管、年齢変化についても説明できる。			
12							
13	喉頭の機能			呼吸機能・発声機能について学ぶ。発声時の喉頭調節機能、嚥下時の喉頭調節について説明できる。			
14							
15	喉頭の病態			発声機能障害、呼吸障害について学ぶ。誤嚥・喉頭侵入(嚥下障害)について学ぶ。			
16							
17	喉頭の検査			間接喉頭検査、内視鏡検査について学ぶ。声帯振動の各種検査について学ぶ。			
18							
19	構音器官の基本構造			鼻腔、咽頭のしくみについて説明できる。			
20							
21	構音運動			構音に関する筋群の運動と神経制御について学ぶ。			
22							
23	構音器官の病態			組織欠損と奇形、運動障害、鼻咽腔閉鎖不全などについて学ぶ。			
24							
25	構音器官の検査			構音器官の各種検査について学ぶ。			
26							
27	呼吸器系についてのまとめ			呼吸器系、発声機能の構造・機能・病態の復習			
28							
29	発語系についてのまとめ			口腔、咽頭の構造・機能・病態の復習			
30							

授業科目名	聴覚系の構造・機能・病態		担当者名	大山健二			
			実務経験	医師として病院等での勤務経験あり			
教科書	病気がみえる vol.13 耳鼻咽喉科	単位数	学 科	学 年	学 期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	1	後期	必修	講義
		30					
授業概要	言語聴覚士として活動するためには、聴覚系の構造・機能とさまざまな病態に関する、より深い知識と理解が必要となる。前期で学習する耳鼻咽喉科学の中から、聴覚系に範囲をしばったかたちで臨床医の立場で解説し、理解を助ける。						
学習到達目標	①人間の聴覚器の構造と機能について理解する。②この領域の代表的疾患の機序と対応について理解する。③それらの疾患による言語・聴覚機能への影響について理解する。④聴覚障害への対応方法について理解する。						
評価方法	出席・授業態度・後期試験(2月予定)						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	ガイダンス・構造(1)			耳(聴覚器)の全体像 について理解する			
2							
3	構造(2)			外耳と中耳の構造 について理解する			
4							
5	構造(3)			内耳(蝸牛)の構造 について理解する			
6							
7	構造(4)			内耳(前庭・半規管・神経) について理解する			
8							
9	機能(1)			耳介～中耳伝音系の機能 について理解する			
10							
11	機能(2)			内耳の機能 について理解する			
12							
13	機能(3)			内耳の機能 について理解する			
14							
15	機能(4)			内耳～聴神経機能 について理解する			
16							
17	病態(1)			難聴を引き起こす病態の概観 について理解する			
18							
19	病態(2)			難聴(伝音性) について理解する			
20							
21	病態(3)			難聴(感音性) について理解する			
22							
23	病態(4)			難聴(感音性) について理解する			
24							
25	聴覚の補償			難聴への対策 について理解する			
26							
27	補足			理解しにくい点について補足する			
28							
29	まとめ			講義全体を振り返って知識を整理する			
30							

授業科目名	神経系の構造・機能・病態		担当者名	及川 隆司			
				医師として病院等での勤務経験あり			
教科書	病気がみえるvol.13脳・神経 (メディック・メディア)	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	1	後期	必修	講義
30							
授業概要	中枢神経から末梢神経までの神経の構造を学ぶ。また、正常な神経の働き、それらが障害されたときのような障害が現れるかを学ぶ。						
学習到達目標	①脳と神経系の構造・機能を説明できる。②神経系の障害による機能低下(言語聴覚士が関わる失語症、高次脳機能障害など)の機序を説明できる。③病態から推測される予後について説明できる。						
評価方法	授業態度、定期試験によって評価						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	中枢神経系と末梢神経の総論			中枢神経と末梢神経について説明できる。			
2							
3	中枢神経系の構造			大脳(皮質、辺縁系、基底核、視床、白質)の構造について学ぶ。			
4							
5	中枢神経系の構造			脳幹～小脳、脊髄、錐体路、錐体外路などについての構造を学ぶ。			
6							
7	末梢神経系の構造			脳神経の構造と働きについて学ぶ。			
8							
9	末梢神経系の構造			脊髄神経、自律神経の構造について学ぶ。			
10							
11	神経細胞の働き			神経伝導、神経伝達について説明できる。			
12							
13	中枢神経系の機能 大脳皮質の機能局在			運動野、体性感覚野、聴覚野、視覚野、前頭前野、辺縁系、言語領域について学ぶ。			
14							
15	中枢神経系の機能 伝導路			体性感覚、聴覚、視覚、小脳それぞれの伝導路について学ぶ。			
16							
17	中枢神経系の機能 大脳白質の機能			投射線維、交連線維、連合線維の機能について学ぶ。			
18							
19	中枢神経系の機能 脳幹、小脳、脊髄の機能			脳神経核、皮質核路、小脳、脊髄の機能について学ぶ。			
20							
21	末梢神経の機能			運動神経と感覚神経、神経筋接合部、知覚受容体の機能について学ぶ。			
22							
23	中枢神経系の病態			高次脳機能障害、運動麻痺(上位運動ニューロン、下位運動ニューロン)、運動失調の病態について学ぶ。			
24							
25	中枢神経系の病態			大脳基底核障害、感覚障害、脊髄障害による病態について学ぶ。			
26							
27	末梢神経系の病態			運動麻痺、感覚障害、自律神経障害による病態について学ぶ。			
28							
29	脳、神経系の検査			CT、MRI、SPECT、PETなどの各種検査について学ぶ。			
30							

授業科目名	生涯発達心理学		担当者名	山田嘉明			
			実務経験				
教科書	教科書は指定しない 配付資料(プリント)	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	1	後期	必修	講義
30							
授業概要	人間はどのように発達するのか。この生涯にわたる変容過程を理解し、人間の発達にかかわる諸要因および個体と環境の相互作用のあり方について学習する。身体、運動、言語、認知、情緒、社会性の側面から各発達時期での他者との関係性踏まえながら、発達の特徴を学び、発達理論を概観する。						
学習到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・発達を身体・運動、言語・認知、情緒・社会性の領域に分けてとらえ、説明ができる。 ・人間の発達時期ごとの特徴や特色を他者との関係性を踏まえて説明できる。 ・主な発達理論を理解し、説明できる。 						
評価方法	レポート提出(30%)、期末試験(70%)						
時数	授 業 内 容		到達目標・学習課題など				
1	生涯発達心理学とは		発達用語の定義、近代の発達研究、研究方法について説明できる。				
2							
3	胎生期における発達		胎生期(胚期、胎芽期、胎児期)における発達の特徴について説明できる。				
4							
5	周産期における発達		周産期障害、母子保健統計、周産期死亡率、低出生体重児、胎児発育に影響する要因、アプガースコアについて説明できる。				
6							
7	新生児期・乳児期・幼児期における発達(1)		新生児行動評価法、カウプ指数、乳幼児身体発育調査、原始反射、姿勢反射、平衡反応、髄鞘形成、運動発達について説明できる。				
8							
9	新生児期・乳児期・幼児期における発達(2)		一語文、多語文、幼児語、認知発達、イメージを利用した遊びについて説明できる。				
10							
11	新生児期・乳児期・幼児期における発達(3)		情緒の分化、社会化、愛着、微笑、人見知り、分離不安、遊びの発達について説明できる。				
12							
13	発達検査		遠城寺式乳幼児分析的発達検査、日本版デンバー式発達スクリーニング検査、新版K式発達検査2001、乳幼児精神発達診断法(津守・稲毛式)、KIDS乳幼児発達スケールについて説明できる。				
14							
15	児童期における発達		ローレル指数、運動技能、思考における中心化、保存の理解、記憶方略、防衛機制について説明できる。				
16							
17	青年期における発達		二次性徴、形式的操作思考、心理社会的モラトリアム、アイデンティティについて説明できる。				
18							
19	成人期における発達		身体的変化、生活習慣病、結晶性能力、流動性能力、発達課題について説明できる。				
20							
21	老年期における発達		生理的変化、認知機能の変化、継続性理論、SOC理論、死への対応について説明できる。				
22							

23	発達理論(1)ーゲゼルの成熟理論,フロイトの心理学的発達理論	発達課題,発達段階,ゲゼルの成熟理論,フロイトの心理学的発達理論について説明できる。
24		
25	発達理論(2)ーエリクソンの心理社会的発達理論	エリクソンの心理社会的発達理論について説明できる。
26		
27	発達理論(3)ーピアジェの認知的発達理論等	ピアジェの認知的発達理論(均衡化,シエマ,同化,調節,感覚運動期,前操作期,具体的操作期,形式的操作期),ヴィゴツキーの最近接領域,ブルナーの足場かけについて説明できる。
28		
29	まとめと復習	発達関連用語,発達における共通性,発達に影響を与える要因について説明できる。これまでの復習とまとめを行う。
30		

授業科目名	学習・認知心理学		担当者名	山田嘉明			
			実務経験				
教科書	教科書は指定しない 配付資料(プリント)	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	1	前期	必修	講義
	30						
授業概要	人は環境から情報を取り入れ、認識し、記憶し、それをういて思考し、互いにコミュニケーションをとっている。学習・認知心理学の授業前半では学習のタイプと学習行動を対象とし、行動の予測や制御に関する事項・原理を学び、後半では学習形態、環境を知るころの働き、学習と記憶の関係、思考や言語といった仕組みや働きについて学ぶ。						
学習到達目標	・学習心理学および認知心理学で用いられる主要な概念を理解し、説明できる。						
評価方法	レポート提出(30%)、定期試験(70%)						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	学習・認知心理学とは			学習心理学と認知心理学の定義、研究方法、生得的行動と獲得性行動、馴化・脱馴化、鋭敏化について説明できる。			
2							
3	古典的条件づけ(レスポナント条件づけ)			レスポナント条件づけ、条件づけスケジュールについて説明できる。強化と消去、連続強化と部分強化			
4							
5	道具的条件づけ(オペラント条件づけ)			オペラント条件づけ、強化スケジュールについて説明できる。強化と弱化、強化プログラム			
6							
7	認知的アプローチ、刺激性制御			洞察説、サイン-ゲシュタルト説、認知地図、三項随伴性、経時弁別訓練、同時弁別訓練、般化勾配について説明できる。			
8							
9	刺激等価性、逃避・回避学習			言語・表象機能の発現における刺激等価性、逃避学習、回避学習、学習性無力感について説明できる。			
10							
11	技能学習、社会的学習			知覚-運動学習、知覚-運動協応、観察学習、模倣学習、モデリング、代理強化について説明できる。			
12							
13	学習法、学習の転移、動機づけ、要求水準			全習法と分習法、集中法と分散法、学習の転移、外発的・内発的動機づけ、要求水準について説明できる。			
14							
15	感覚、知覚、認知			感覚の感度と強度と範囲、ウェーバーの法則、フェヒナーの法則、形と面の知覚、プレグナントの法則、色彩知覚、奥行知覚、運動知覚、知覚の恒常性について説明できる。			
16							
17	記憶と学習(1)			記憶の過程、記憶の区分、感覚記憶、短期記憶、長期記憶、ワーキングメモリについて説明できる。			
18							
19	記憶と学習(2)			長期記憶の区分、陳述記憶、手続記憶について説明できる。			
20							
21	記憶と学習(3)			記憶方略、忘却、自伝的記憶、予定記憶について説明できる。			
22							

23	思考, 問題解決	アルゴリズム, ヒューリスティックス, 収束的思考, 拡散的思考, 問題解決, 創造的思考, 発想支援について説明できる。
24		
25	知識と推論, ヒューマンエラー	階層的ネットワークモデル, 活性化拡散モデル, スキーマ理論, イメージ処理, 心的回転, ヒューマンエラーについて説明できる。
26		
27	言語, メタ認知	非言語的コミュニケーション, 言語的コミュニケーション, 二項関係, 三項関係, メタ認知的知識, メタ認知的活動について説明できる。
28		
29	まとめと復習	これまでのまとめと復習を行う
30		

授業科目名	言語学 I		担当者名	東ヶ崎祐一			
			実務経験				
教科書	岩田・岩崎編『Crosslink 言語聴覚療法学テキスト 言語学・言語発達学』MEDICAL VIEW ※プリント等も適宜配布・使用	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	1	前期	必修	講義
30							
授業概要	言語学の基本的概念・基礎的手法を学ぶ。人間の言語について、音(音声・音韻)、形(形態・語彙)、文の組み立て(統語)、意味、使い方(語用論)といったさまざまな面から見てゆき、考え、理解することで、基礎的な知識を身につけていく。						
学習到達目標	言語、ことばというものについて、その中にどのような仕組み・メカニズムがあるか理解し、言語聴覚士の業務においても知識を応用させてリハビリテーションに活かせるようになる。						
評価方法	期末試験・課題提出・授業における態度を総合評価						
時数	授 業 内 容		到達目標・学習課題など				
1	授業説明、言語学とは		言語学がどのような学問分野か、まず大づかみに理解する。所記と能記、ラングとパロールといった、言語の根本特徴について知る。				
2	言語とは何か(言語学の基礎)						
3	言語の特徴を考える(言語学の基礎)		恣意性と有契性、二重文節性、通時態と共時態といった概念や言語の持つ特徴について知る。				
4	言語の基本的な性質、言語の特徴						
5	日本語の音を考える(音韻論)①		言語における音とは何か、音声と音素の違い、日本語の音やアクセントについて知る。				
6	音素、アクセント						
7	日本語の音を考える(音韻論)②		複合語アクセント、母音や子音の交替、連濁など、日本語の音が起こす共時的変化について知る。				
8	アクセント(続き)、形態音韻論						
9	日本語の単語を考える(形態論・意味論)①		日本語における単語とはどんなものか、どのような種類があってどのように構成されているかについて知る。				
10	語とは何か、語の成り立ち						
11	日本語の単語を考える(形態論・意味論)②		日本語の3種類の言葉の種類(和語・漢語・外来語)、およびそれぞれの特徴や長所・短所について知る。				
12	語種						
13	日本語の単語を考える(形態論・意味論)③		言葉の持つ意味やその広がり、また動詞の自動詞・他動詞の違いとその表すものの差異などについて知る。				
14	語の意味・動詞の活用と自他						
15	日本語の文法を考える(統語論)①		日本語では格助詞によって表される格と動詞との関係、また能動・受動・使役といったヴォイスや、テンスすなわち時制について知る。				
16	格関係と項、文法カテゴリー(ヴォイス、テンス)						
17	日本語の文法を考える(統語論)②		進行・完了といった動作の容態について表すアスペクト、話し手の心的態度について表すモダリティについて知る。				
18	文法カテゴリー(アスペクト、モダリティ)、複文						
19	日本語のバリエーションを考える(社会言語学)①		言葉の地理的な変異、また社会集団や階層による変異について知る。				
20	地域方言、社会方言						
21	日本語のバリエーションを考える(社会言語学)②		日本語における敬語の役割、外国人のためのやさしい日本語、また現在進行する日本語の変化などについて知る。				
22	敬語・やさしい日本語、言語変化						

23	日本語の文字を考える(文字論)① 言語における文字、漢字	世界の文字の分類、日本語において使われる文字の種類と特徴について知り、また漢字の基本的知識を身につける。
24		
25	日本語の文字を考える(文字論)② 仮名、表記法	日本語における専用の表音文字である仮名(平仮名・片仮名)の基本的知識や、日本語における表記の問題点について知る。
26		
27	内容の復習①(音韻論・形態論・意味論)	これまでの授業で学習した内容についての振り返り、国試過去問の復習などを通して、授業で得た知識や考察方法を強化させる。
28		
29	内容の復習②(統語論・社会言語学・文字論) まとめ	ここまで学習したことを概観し、言語と言語学、日本語について学問的に考察するとは何かを再確認する。
30		

授業科目名	音声学Ⅰ		担当者名	東ヶ崎祐一			
			実務経験				
教科書	竹内・稲田編『Crosslink 言語聴覚療法学テキスト 音響・音声学』MEDICAL VIEW ※プリント等も適宜配布・使用	単位数	学 科	学 年	学 期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	1	後期	必修	講義
	30						
授業概要	言語を構成する基本的材料である音声やそれに関わる概念とその記述方法、具体的には「言語における音声とは」「音声器官の構造とはたらし」「国際音声記号」「母音・子音・超分節的要素」について学ぶ。						
学習到達目標	言葉の音声というものについて、その産出されるメカニズム、音声の種類や分類、日本語における音声や音韻、音節や拍の構造、韻律的特徴といった、音声学の基礎的概念や思考法を身につける。						
評価方法	期末試験・課題提出・授業における態度を総合評価						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	授業説明、音声学とは(音響学・聴覚心理学と対比して)			この授業で扱う「音声」すなわち「言語の材料としての音声」について、音響学や聴覚心理学とも比較しながら理解する。			
2							
3	音声①			人間の言語における音声がどのようなものか、非言語音とどう違うのかについて知る。			
4	音声の基礎的な性質						
5	音声②			音声を出すための器官や部位について知る。			
6	音声器官						
7	分節音(単音)①			音声を記述する手段であるIPA(国際音声記号)と、その持つ意味について知る。			
8	音声の記述方法と国際音声記号						
9	分節音(単音)②			母音とは何か、その分類基準と個々の音について知る。			
10	母音						
11	分節音(単音)③			子音とは何か、その分類基準と個々の音について知る。ここでは主に「阻害音」と呼ばれる破裂音・摩擦音などを扱う。			
12	子音①(破裂音・摩擦音・破擦音)						
13	分節音(単音)④			前回に引き続き、子音の分類基準と個々の音について知る。ここでは主に「共鳴音」と呼ばれる鼻音・流音・半母音などを扱う。			
14	子音②(鼻音・流音・接近音)						
15	分節音(単音)⑤			言語には実際の音響的実現としての「音声」の他に、脳内の存在・概念としての「音素」がある。ここではその2つの差異について知る。			
16	音声と音韻						
17	分節音(単音)⑥			音声は隣接する音によって様々な影響を受けるが、その影響がどのような形で実現するのかわかる。			
18	いろいろな音声現象						

19	超分節的特徴(韻律的特徴)① リズム	言語の音は個々の音声だけでなく、それらを含み音楽的表現として現れる要素もある。ここではそのような「リズム」について知る。
20		
21	超分節的特徴(韻律的特徴)② アクセント①	日本語のアクセントの特徴、および個々の単語に現れるアクセントの形式にはどのようなものがあるかについて知る。
22		
23	超分節的特徴(韻律的特徴)③ アクセント②	アクセントの環境による変化、また複合語や外来語においてアクセントがどのように実現するかについて知る。
24		
25	超分節的特徴(韻律的特徴)④ イントネーション	個々の語を超えて文全体で奏でるリズムである「イントネーション」の、日本語における特徴について知る。
26		
27	超分節的特徴(韻律的特徴)④ パラ言語情報と非言語情報	厳密には言語音とは違うが、実際の音声と組み合わせられて使われる様々な音声の変異や表情について知る。
28		
29	復習、まとめ	ここまでの授業で学んだことを総括し、言語音声、日本語における音声とは何かについて再確認する。
30		

授業科目名	音響学		担当者名	櫻井 潤			
			実務経験	企業等での実務経験あり			
教科書	言語聴覚療法学テキスト 音響・音声学	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	1	前期	必修	講義
30							
授業概要	言語聴覚士の臨床に不可欠な音響分野の知識を学ぶ。また、音響学的な現象としての「声」を客観的に理解する。						
学習到達目標	①物理現象としての音を理解する。②音圧と音圧レベルについて理解する。③音のスペクトルについて理解する。④フォルマント周波数について理解する。⑤音源フィルタ理論について理解する。⑥音声のデジタル化について理解する。						
評価方法	出席・授業態度・前期試験(9月予定)						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	物理現象の音について①			音の振動について理解する。			
2	物理現象の音について②			音声現象について理解する。			
3	物理現象の音について②			音源について理解する。			
4	音圧と音圧レベルについて①			圧力変化としての音について理解する。			
5	音圧と音圧レベルについて②			音圧と音圧レベルの違いについて理解する。			
6	音圧と音圧レベルについて③			音速・波長・周波数について理解する。			
7	音圧と音圧レベルについて④			デシベル(dB)について理解する。			
8	音の伝わり方について①			疎密波について理解する。			
9	音の伝わり方について②			音の放射・回折について理解する。			
10	音の伝わり方について③			音の反射・屈折について理解する。			
11	音のスペクトルについて①			各種ノイズについて理解する。			
12	音のスペクトルについて②			周波数成分について理解する。			
13	音のスペクトルについて③			音の波形について理解する。			
14	音のスペクトルについて④			基音と倍音について理解する。			
15	音のスペクトルについて⑤			線スペクトルと連続スペクトルについて理解する。			
16	共鳴・共振について①			音の共鳴(共振)について理解する。			
17	共鳴・共振について②			空気振動について理解する。			
18	共鳴・共振について③			共鳴周波数について理解する。			
19	共鳴・共振について④			フォルマント周波数について理解する。			
20	音声生成について①			フーリエ解析について理解する。			
21	音声生成について②			音声波形について理解する。			
22	音声生成について③			音源、声道、口腔の働きについて理解する。			
23	音声生成について④			音源フィルタ理論について理解する。			
24	言語音の生成と知覚について①			発生音について理解する。			
25	言語音の生成と知覚について②			母音の音響特性について理解する。			
26	言語音の生成と知覚について③			子音の音響特性について理解する。			
27	言語音の生成と知覚について④			韻律と特殊拍について理解する。			
28	音声の記録方法とデジタル信号処理について①			音声のデジタル化について理解する。			
29	音声の記録方法とデジタル信号処理について②			標本化と量子化について理解する。			
30	音声の記録方法とデジタル信号処理について③			音声のデジタル処理について理解する。			

授業科目名	言語発達学		担当者名	熊谷美緒			
			実務経験	言語聴覚士として療育施設等での勤務経験あり			
教科書	言語聴覚療法学テキスト 言語学・言語発達学/メジカル ビュー社	単位数	学 科	学 年	学 期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	1	前期	必修	講義
		30					
授業概要	子どもがどのように言葉を獲得していくのか、を学ぶ。						
学習到達 目標	前言語期、幼児期、学童期それぞれの発達段階における言語発達について理解できる。						
評価方法	試験及び課題提出等から、総合的に判断する。						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	「ことば」の発達とは何だろう			言語発達の基盤について理解する。			
2							
3	言語発達を説明する理論①			学習説、生得説について理解する。			
4							
5	言語発達を説明する理論②			認知説、社会・相互交渉説について理解する。			
6							
7	前言語期の発達①			コミュニケーション行動の発達、共同注意の発達について理解する。			
8							
9	前言語期の発達②			発声行動・言語音知覚の発達について理解する。			
10							
11	前言語期の発達③			グループワーク			
12							
13	1～2歳の言語発達①			初語の出現・語彙の増加、言語発達を促す大人の役割について理解する。			
14							
15	1～2歳の言語発達②			構文の発達、象徴機能の発達について理解する。			
16							
17	1～2歳の言語発達③			グループワーク			
18							
19	幼児期の言語発達①			語彙の発達、構文の発達について理解する。			
20							
21	幼児期の言語発達②			談話の発達、音韻意識の発達について理解する。			
22							
23	幼児期の言語発達③			グループワーク			
24							
25	学童期の言語発達①			読み書き能力の発達について理解する。			
26							
27	学童期の言語発達②			語彙・構文の発達について理解する。			
28							
29	学童期の言語発達③			グループワーク			
30							

授業科目名	リハビリテーション概論		担当者名	島田真須美			
			実務経験	言語聴覚士として診療所等での勤務経験あり			
教科書	最新リハビリテーション基礎講座 リハビリテーション概論 佐伯寛、大庭潤平、浅井剛 編著 医歯薬出版 2025	単位数	学 科	学 年	学 期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	1	後期	必修	講義
30							
授業概要	専門職として必要なリハビリテーションの概念, 対象者の理解, 多職種連携, 医療・福祉制度や倫理などに関する知見・知識を体系的に習得する。						
学習到達目標	本講義で得た知識を専門職としての活動や日常生活において活かしていけるようになることを目指す。						
評価方法	試験及び課題提出等から、総合的に判断する。						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	リハビリテーションの概念・理念・定義			・リハビリテーションの概念について理解する。			
2							
3	健康と障害の概念と分類①			・健康の定義、健康と疾病の関係について説明できる。 ・ICD、ICIDH、ICFについて理解する。			
4							
5							
6	健康と障害の概念と分類②						
7							
8	リハビリテーション対象者の理解①			・多様なリハビリテーション対象者について理解する。 ・リハビリテーション対象者の心理的变化やそのサポートを説明できる。			
9							
10	リハビリテーション対象者の理解②						
11							
12	リハビリテーションの5分野①			・リハビリテーション5分野の歴史的背景や現状を理解し、それぞれの概要を説明できる。			
13							
14	リハビリテーションの5分野②						
15							
16	医療の提供体制①			・日本の医療提供体制と課題、今後の方向性を理解する。 ・救急・災害・へき地・地域医療の概要を理解する。			
17							
18	医療の提供体制②						
19							
20	リハビリテーションにおける倫理			・医療倫理と医療安全について理解し両者が相互に関連していることを説明できる。			
21							
22	リハビリテーションの実際①			・リハビリテーションにおける目標設定、プログラム作成の考え方、カンファレンスについて理解する。 ・医療情報や、医療で求められるコミュニケーションについて理解する。			
23							
24	リハビリテーションの実際②						
25							
26	保健予防の考え方と実践①			・予防医学の考え方を説明できる。 ・保健予防の実践について、例を挙げることができる。			
27							
28	保健予防の考え方と実践②						
29							
30	医療・福祉制度と関連法規			・医療および障害福祉サービスに関する制度・法律を理解する。			

授業科目名	言語聴覚障害学概論		担当者名	片岡由夏			
			実務経験	言語聴覚士として病院等での勤務経験あり			
教科書	最新言語聴覚学講座 言語聴覚障害学概論 (医歯薬出版)	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	1	前期	必修	講義
30							
授業概要	言語聴覚士(ST)の成り立ちや職域、専門職としてSTに求められる資質、能力について講義する。また、多岐にわたる言語聴覚障害に関して、その概要を講義する。言語、聴覚、心理、コミュニケーションの基礎についても解説する。						
学習到達目標	言語聴覚士(ST)がどのような専門職なのか、理解し、説明できる。また、言語聴覚障害にはどのようなものがあるのか、その原因や症状について理解し、概要を説明できるようになることを目標とする。						
評価方法	出席、受講態度、課題、試験(9月)の結果から総合的に評価						
時数	授 業 内 容		到達目標・学習課題など				
1	オリエンテーション / 言語聴覚士(ST)について		講義の進み方、内容に関して、見通しを持つ。言語聴覚士とはどのような仕事か理解する。				
2							
3	言語聴覚士(ST)の成り立ちと、職務		国内外の言語聴覚士の歴史や、その成り立ちについて理解する。また、言語聴覚士の職域について理解する。				
4							
5	言語とは何か、また日本語の特徴		「言語」について理解し、「言語とは何か?」という問いに対して、自分の言葉で説明できるようにする。また日本語の特徴についても学ぶ。				
6							
7	言語とコミュニケーション、言語の獲得		コミュニケーションとは何か、言語とコミュニケーションの違いについて説明できるようになる。また、言語発達についても学ぶ。				
8							
9	脳と言語、発声発語器官、聴覚、平衡器官		言語の中核である脳、発声発語、聴覚に関する器官について学び、理解する。				
10							
11	言語聴覚障害の評価、診断、治療		言語聴覚障害の評価、診断、治療に関して、大まかな流れを理解する。				
12							
13	言語聴覚障害総論		多岐にわたる言語聴覚障害にはどのようなものがあるのか、その概要を理解する。				
14							
15	高次脳機能障害		高次脳機能障害について、その原因、症状、病巣に関し、学び、理解する。				
16							
17	認知症		認知症とはどのようなものか、その定義を説明できるようにする。また認知症の症状や原因について理解する。				
18							
19	失語症		失語症とは何か、原因、病巣、症状について、学び、理解する。また、大まかな分類や対応についても学ぶ。				
20							
21	構音障害		構音障害の種類、原因、症状に関して学び、構音障害以外の言語障害との違いを理解する。				
22							
23	音声障害		音声障害について、その原因、症状を学び、理解する。発声の仕組みについても学び、理解する。				
24							
25	摂食嚥下障害		摂食、嚥下に関わる器官と、正常な嚥下について理解する。その上で摂食嚥下障害と、その原因、症状、対応について理解する。				
26							
27	発達障害、吃音		発達障害、吃音に関して、診断基準や症状について知り、理解する。発達障害の評価の概要についても学ぶ。				
28							
29	聴覚障害		聴覚障害の種類や症状、検査/評価の方法について、その概要を理解する。聴覚補償や代替手段についても学ぶ。				
30							

授業科目名	失語症 I		担当者名	萱場 文			
			実務経験	言語聴覚士として病院等での勤務経験あり			
教科書	・失語症 臨床標準テキスト ・ぜんぶわかる 脳の事典 ・配布資料(プリント)	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	1	前期	必修	講義
30							
授業概要	失語症における言語症状、タイプ分類、失語症の近縁症状について学び、失語症の基礎知識の習得をめざす。						
学習到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・失語症の症状の理解の習得をめざす。 ・失語症と他の言語障害の違いを説明できるようになる。 ・臨床の基本の考え方となるよう、失語症のタイプ分類について理解できるようになる。 						
評価方法	課題、試験の結果から総合的に判断します。学習態度を考慮することがあります。						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	オリエンテーション 失語症の歴史 失語症の定義			失語症の定義について説明できる。			
2	鑑別 意識障害 認知症			失語症の近縁の症状について、失語症との違いを説明できる。			
3	鑑別 構音障害 発語失行 その他						
4	失語症の原因疾患 脳血管障害 脳外傷			失語症の原因疾患について説明できる。			
5	失語症の原因疾患 脳腫瘍 神経変性疾患						
6	病巣①			失語症に関連する大脳の言語領域について説明できる。			
7	病巣②						
8	言語の側性化						
9	失語症の定義まとめ			定義、原因疾患を説明できる。			
10	一般症状 精神状態の把握 神経心理症状の把握			精神状態、神経心理症状を説明できる。			
11	言語症状の分析モデル① 聴覚的理解 単語読解過程			理解面の症状を説明できる。			
12	言語症状の分析モデル② 発話表出 文字・音変換 書字表出過程			発話面の症状を説明できる。			
13	発話面の症状① 流暢性 構音とプロソディーの障害			流暢性、構音とプロソディーを説明できる。			
14	発話面の症状② 喚語困難 錯語 ジャルゴン 失文法 等			その他発話症状について説明できる。			
15	理解面の症状① 語音認知 単語の理解			語音認知、単語の理解について説明できる。			
16	理解面の症状② 文の理解 談話障害			文の理解、談話障害について説明できる。			
17	復唱障害			復唱障害について説明できる			
18	読字障害			読字障害について説明できる。			
19	書字障害			書字障害について説明できる。			
20	古典型失語症候群① ブローカー失語 ウエルニッケ失語			ブローカー失語、ウエルニッケ失語を説明できる。			
21	古典型失語症候群② 伝導失語 健忘失語 全失語			伝導失語、健忘失語、全失語を説明できる。			
22	古典型失語症候群③ 混合型			混合型失語について説明できる。			
23	古典型失語症候群④ まとめ			古典型失語症候群のタイプ分類ができる。			
24	純粋型① 純粋語唾 純粋語聾 純粋失読			純粋語唾、純粋語聾、純粋失読を説明できる。			
25	純粋型② 純粋失書 その他の読字・書字障害 失読失書			純粋失書等の読字・書字障害を説明できる。			
26	非定型失語群			非定型失語群について説明できる。			
27	原発性進行性失語			原発性進行性失語について説明できる。			
28	小児失語			小児失語の定義等を説明できる。			
29	まとめ・復習①			言語症状・失語症候群について理解し、知識を習得できたか確認する。			
30	まとめ・復習②						

授業科目名	失語症評価法		担当者名	萱場 文、島田 真須美			
			実務経験	言語聴覚士として病院等での勤務経験あり			
教科書	・標準失語症検査マニュアル 改訂第2版 ・WAB失語症検査/医学書院 ・失語症臨床標準テキスト/医歯薬出版(株)	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		1					
		時間数	言語聴覚科	1	後期	必修	演習
30							
授業概要	失語症者に対する臨床での評価法について学ぶ。						
学習到達目標	検査法の内容を理解し、その手続き、教示方法、結果の記載、解釈ができるようにする。						
評価方法	授業態度・期末試験の結果から総合的に判断します。						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	評価・診断 スクリーニング検査 検査実施上の留意点			検査実施上の留意点を学ぶ			
2	MMSE・HDS-Rの演習			スクリーニング検査の目的を学び、実施する			
3	WABの概要			WABの目的・内容について説明できる			
4	WAB 自発話 演習			手順に沿って検査を実施できるようになる			
5	WAB 話し言葉の理解 演習			手順に沿って検査を実施できるようになる			
6	WAB 復唱・呼称 演習			手順に沿って検査を実施できるようになる			
7	WAB 読み 演習			手順に沿って検査を実施できるようになる			
8	WAB 書字 演習			手順に沿って検査を実施できるようになる			
9	WAB 行為・構成行為・視空間行為・計算 演習			手順に沿って検査を実施できるようになる			
10	WAB 失語指数・皮質指数 演習			指数の算出方法がわかる			
11	WAB 実技 ペアになって教示をだしてみる			検査の教示を正しく提示できるようになる			
12	WAB 実技 ペアになって教示をだしてみる			検査の教示を正しく提示できるようになる			
13	WAB 演習①			検査を実施し、適切に評価できるようになる			
14	WAB 演習②			検査を実施し、適切に評価できるようになる			
15	WAB 演習③			検査を実施し、適切に評価できるようになる			
16	SLTAの概要			SLTAの目的・内容について説明できる			
17	SLTA 聞く側面 単語の理解 短文の理解			手順に沿って検査を実施できるようになる			
18	SLTA 聞く側面 複雑な口頭命令			手順に沿って検査を実施できるようになる			
19	SLTA 話す側面 演習 呼称 単語の復唱 動作説明			手順に沿って検査を実施できるようになる			
20	SLTA 話す側面 演習 まんがの説明 文の復唱 ご列挙 音読			手順に沿って検査を実施できるようになる			
21	SLTA 読む側面 演習			手順に沿って検査を実施できるようになる			
22	SLTA 書く側面 計算演習			手順に沿って検査を実施できるようになる			
23	SLTA 実技 ペアになって教示をだしてみる			検査の教示を正しく提示できるようになる			
24	SLTA 実技 ペアになって教示をだしてみる			検査の教示を正しく提示できるようになる			
25	SLTA 演習①			検査を実施し、適切に評価できるようになる			
26	SLTA 演習②			検査を実施し、適切に評価できるようになる			
27	SLTA 演習③			検査を実施し、適切に評価できるようになる			
28	SLTA 演習④			検査を実施し、適切に評価できるようになる			
29	SLTA まとめ			検査を実施法を理解できた確認する			
30							

授業科目名	高次脳機能障害 I		担当者名	島田真須美			
			実務経験	言語聴覚士として診療所等での勤務経験あり			
教科書	高次脳機能障害学 第4版 阿部晶子、吉村貴子 編 医学書院 2025	単位数	学 科	学 年	学 期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	1	前期	必修	講義
30							
授業概要	言語聴覚士が主に関わる失語症は、高次脳機能障害の1つであり、失語症者は他の高次脳機能障害を合併している場合がある。症状理解の一助として高次機能障害について知る必要があるため、基本概念を学び、発症機序や症状、評価方法、リハビリテーションの基本的な知識を身につける。						
学習到達目標	高次脳機能障害の基本概念を学び、各種の高次機能障害の発症機序や症状、評価方法、リハビリテーションの基本的な知識を修得する。						
評価方法	授業態度、期末試験から総合的に評価する。						
時数	授 業 内 容		到達目標・学習課題など				
1	高次脳機能障害総論		高次脳機能障害の基本概念を理解する				
2							
3	失認		失認について説明できる				
4							
5	視空間障害		視空間障害について説明できる				
6							
7	身体意識・病態認知の障害		身体意識・病態認知の障害について説明できる				
8							
9	動作・行為の障害		動作・行為の障害について説明できる				
10							
11	記憶障害		記憶障害について説明できる				
12							
13	前頭葉と高次脳機能障害		前頭葉と高次脳機能障害について説明できる				
14							
15	半球離断症候群		半球離断症候群について説明できる				
16							
17	認知症①		認知症について説明できる				
18							
19	認知症②		認知症について説明できる				
20							
21	外傷性脳損傷の高次脳機能障害		外傷性脳損傷の高次脳機能障害について説明できる				
22							
23	認知コミュニケーション障害①		認知コミュニケーション障害について説明できる				
24							
25	認知コミュニケーション障害②		認知コミュニケーション障害について説明できる				
26							
27	高次脳機能障害のリハビリテーションにおける言語聴覚士の役割		高次脳機能障害のリハビリテーションにおける言語聴覚士の役割について説明できる				
28							
29	まとめ		これまでの講義を振り返り総合的な理解を深めることができる				
30							

授業科目名	高次脳機能障害Ⅱ		担当者名	島田真須美			
			実務経験	言語聴覚士として診療所等での勤務経験あり			
教科書	高次脳機能障害学 第4版 阿部晶子、吉村貴子 編 医学書院 2025	単位数	学 科	学 年	学 期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	1	後期	必修	講義
30							
授業概要	言語聴覚士が主に関わる失語症は、高次脳機能障害の1つであり、失語症者は他の高次脳機能障害を合併している場合がある。症状理解の一助として高次脳機能障害の発症機序や症状、対応方法、リハビリテーションについて詳述する。						
学習到達目標	各種の高次脳機能障害の発症機序や症状、対応方法、リハビリテーションに関する知識を修得する。						
評価方法	授業態度、期末試験から総合的に評価する。						
時数	授 業 内 容		到達目標・学習課題など				
1	高次脳機能障害総論		高次脳機能障害の基本概念を理解する				
2							
3	失認の評価とリハビリテーション		失認の評価とリハビリテーションについて説明できる				
4							
5	視空間障害の評価とリハビリテーション		視空間障害の評価とリハビリテーションについて説明できる				
6							
7	身体意識・病態認知の障害の評価とリハビリテーション		身体意識・病態認知障害の評価とリハビリテーションについて説明できる				
8							
9	動作・行為の障害の評価とリハビリテーション		動作・行為の障害の評価とリハビリテーションについて説明できる				
10							
11	記憶障害の評価とリハビリテーション		記憶障害の評価とリハビリテーションについて説明できる				
12							
13	前頭葉障害の評価とリハビリテーション		前頭葉障害の評価とリハビリテーションについて説明できる				
14							
15	半球離断症候群の評価とリハビリテーション		半球離断症候群の評価とリハビリテーションについて説明できる				
16							
17	認知症の評価とリハビリテーション①		認知症の評価とリハビリテーションについて説明できる				
18							
19	認知症の評価とリハビリテーション②		認知症の評価とリハビリテーションについて説明できる				
20							
21	外傷性脳損傷による高次脳機能障害の評価とリハビリテーション		外傷性脳損傷による高次脳機能障害の評価とリハビリテーションについて説明できる				
22							
23	認知コミュニケーション障害の評価とリハビリテーション①		認知コミュニケーション障害の評価とリハビリテーションについて説明できる				
24							
25	認知コミュニケーション障害の評価とリハビリテーション②		認知コミュニケーション障害の評価とリハビリテーションについて説明できる				
26							
27	高次脳機能障害のリハビリテーションにおける言語聴覚士の役割		高次脳機能障害のリハビリテーションにおける言語聴覚士の役割について説明できる				
28							
29	まとめ		全体を振り返り総合的な理解ができる				
30							

授業科目名	言語発達障害		担当者名	熊谷美緒			
			実務経験	言語聴覚士として療育施設等での勤務経験あり			
教科書	STクリア言語聴覚療法4 言語発達障害／建帛社	単位数	学 科	学 年	学 期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	1	後期	必修	講義
30							
授業概要	小児の言語発達障害についての基礎知識を学び、対象児への支援に必要な評価方法及び訓練方法を学ぶ。						
学習到達目標	①発達障害の代表例について理解できる。②小児領域で必要な検査の概要を理解できる。 ③発達段階や障害特性に応じた訓練方法について理解できる。						
評価方法	試験及び課題提出等から、総合的に判断する。						
時数	授 業 内 容		到達目標・学習課題など				
1	第2章 言語発達障害学		言語発達障害の捉え方、関連する疾患を理解する。発達障害の原因と背景を理解する。				
2	I 言語発達障害の定義						
3	II 言語発達障害と関連する様々な障害						
4	III 言語発達障害の病態						
5	第3章 言語発達障害の評価		評価の視点、側面を理解する。				
6	評価とは、情報収集、行動観察						
7	検査、評価のまとめと方針の設定		言語発達検査の種類、記録の取り方について理解できる。				
8	記録の取り方、報告書の書き方						
9	第4章 指導・支援について		発達段階に即した指導について理解し、説明できる。				
10	指導・支援とは、発達段階に即した指導						
11	各種指導・支援の方法		各種指導・支援の方法及び、個別指導と集団指導の違いを理解し、説明できる。				
12	個別指導と集団指導、保護者・家族支援						
13	第5章－I 知的発達症		知的発達症について、定義・特徴的な症状及び指導方法を説明できる。				
14	定義、有病率・原因、症状、評価、指導・支援						
15	第5章－II 脳性麻痺・重症心身障害		脳性麻痺・重症心身障害について、定義・特徴的な症状及び指導方法を説明できる。				
16	定義、有病率・原因、症状、評価、指導・支援						
17	第5章－III 自閉症スペクトラム症		自閉症スペクトラムについて、定義・特徴的な症状及び指導方法を説明できる。				
18	定義、有病率・原因、症状、評価、指導・支援						
19	第5章－IV 特異的言語発達障害		特異的言語発達障害について、定義・特徴的な症状及び指導方法を説明できる。				
20	定義、有病率・原因、症状、評価、指導・支援						
21	第5章－V 学習障害		学習障害について、定義・特徴的な症状及び指導方法を説明できる。				
22	定義、有病率・原因、症状、評価、指導・支援						
23	第5章－VI 注意欠如多動症		注意欠如多動症について、定義・特徴的な症状及び指導方法を説明できる。				
24	定義、有病率・原因、症状、評価、指導・支援						
25	第5章－VII 後天性言語障害		後天性言語発達障害について、定義・特徴的な症状及び指導方法を説明できる。				
26	定義、有病率・原因、症状、評価、指導・支援						
27	第6章 多職種との連携		小児領域に関わる他職種を理解し、連携するうえでの原則を説明できる。				
28	多職種とは、連携の原則 など						
29	まとめ		総合的なまとめをおこなう。				
30							

授業科目名	運動性構音障害 I		担当者名	佐々木貴行			
			実務経験	言語聴覚士として病院等での勤務経験あり			
教科書	「言語聴覚士のための運動障害性構音障害学」廣瀬肇他著 医歯薬出版 配布資料(プリント)	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	1	前期	必修	講義
30							
授業概要	STが行うリハビリテーションの中核ともいえる運動障害性構音障害を解剖・生理・神経学の確認をしながら概要を理解していく。また、評価に必要な知識の初歩も学び、理解を深める。						
学習到達目標	運動障害性構音障害の原因と構音障害の分類を理解し、自らの言葉で説明できる。 評価(AMSD)の目的とマニュアルについて理解できる。						
評価方法	出席、授業態度、レポート、筆記試験を総合評価						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	運動障害性構音障害とは			COM障害の中での運動障害性構音障害を理解			
2							
3	運動障害性構音障害の基礎 1(原因や種類について)			解剖生理学をもとに 運動障害性構音障害の基礎を理解			
4							
5	運動障害性構音障害の基礎 1.5(原因や種類について)			解剖生理学をもとに運動障害性 構音障害の基礎を理解し説明できる			
6							
7	運動障害性構音障害の基礎2 (解剖・生理の視点から)			運動障害性構音障害の 原因や種類の基礎を理解			
8							
9	運動障害性構音障害の基礎2.5 (解剖・生理の視点から)			運動障害性構音障害の原因 や種類を理解し説明できる			
10							
11	運動障害性構音障害の基礎3 (正常と異常の違いを知る)			正常な構音と異常の基礎的な違いを理解			
12							
13	運動障害性構音障害の基礎3.5 (正常と異常の違いを知る)			正常な構音と異常の基礎的 な違いを理解し説明できる			
14							
15	ことばの産生のしくみ1			発話機構について理解する			
16							
17	ことばの産生のしくみ2			発話機構について理解し説明できる			
18							
19	運動障害性構音障害のタイプ分類1			障害のタイプ分類を理解する			
20							
21	運動障害性構音障害のタイプ分類2			障害のタイプ分類を理解し説明できる			
22							
23	運動障害性構音障害の評価の基礎1			評価方法の視点と種類を理解する			
24							
25	運動障害性構音障害の評価の基礎2			評価方法を理解し実践できる			
26							
27	運動障害性構音障害のリハビリテーションの基礎			運動障害性構音障害の リハビリテーションを理解できる			
28							
29	運動障害性構音障害 I について振り返り			これまでの復習を行い 自分の言葉で説明できる			
30							

授業科目名	摂食嚥下障害 I		担当者名	萱場 文			
			実務経験	言語聴覚士として病院等での勤務経験あり			
教科書	摂食嚥下障害学 第3版/医学書院	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	1	後期	必修	講義
30							
授業概要	摂食嚥下機能の解剖生理学的基盤と多様な病態を理解する。評価・治療の知識を獲得し、実践できるようにする。						
学習到達目標	<ul style="list-style-type: none"> 摂食嚥下のメカニズム、病態・症状を分類し、説明できるようにする。 摂食嚥下障害の検査・評価方法を習得し、実践できるようにする。 						
評価方法	課題、試験の結果から総合的に判断します。学習態度を考慮することがあります。						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	正常な嚥下 嚥下の概念 嚥下の期と相 嚥下モデルについて			嚥下の定義や概念について説明できる。			
2	(成人)			「期」と「相」、各嚥下モデルを理解する。			
3	嚥下器官のしくみとはたらき(解剖) ①-1 口腔			口腔の構造について説明できる。			
4	嚥下器官のしくみとはたらき(解剖) ①-2 咀嚼筋群・舌筋群			咀嚼筋群、舌筋群のはたらきを説明できる。			
5	嚥下器官のしくみとはたらき(解剖) ②-1 咽頭/咽頭筋群			咽頭の構造、咽頭筋群のはたらきを説明できる。			
6	嚥下器官のしくみとはたらき(解剖) ②-2 舌骨上筋群・下筋群			舌骨上筋群・下筋群のはたらきを説明できる。			
7	嚥下器官のしくみとはたらき(解剖) ③食道/食道筋群			食道の構造、食道筋群のはたらきを説明できる。			
8	嚥下に関連する神経機構			神経制御、呼吸の協調性を説明できる。			
9	嚥下器官のしくみとはたらき(総括)			嚥下器官のしくみとはたらきについて理解する。			
10	成人の嚥下障害 概要及び運動障害に伴う摂食嚥下障害① 脳血管疾患			脳血管疾患に伴う摂食嚥下障害を説明できる。			
11	運動障害に伴う摂食嚥下障害①-2 (脳卒中、ワレンベルグ等)			脳血管疾患に伴う摂食嚥下障害を説明できる。			
12	運動障害に伴う摂食嚥下障害②-1 神経筋疾患(ALS,パーキンソン病等)			神経筋疾患に伴う摂食嚥下障害を説明できる。			
13	運動障害に伴う摂食嚥下障害②-2 (MSA,ギランバレー症候群,筋ジス等)			神経筋疾患に伴う摂食嚥下障害を説明できる。			
14	悪性腫瘍に伴う摂食嚥下障害			悪性腫瘍に伴う摂食嚥下障害を説明できる。			
15	高次脳機能障害、認知症に伴う摂食嚥下障害			認知系の障害に伴う摂食嚥下障害を説明できる。			
16	その他の摂食嚥下障害(呼吸機能障害・精神疾患・頸椎病変・薬剤)			その他の摂食嚥下障害を説明できる。			
17	成人の評価(評価の流れ、情報収集、問診・臨床評価)			評価の概要を理解できる。			
18	評価① 摂食嚥下に関連する器官			関連する器官の評価を説明できる。			
19	評価② 食事場面の観察・評価/包括的アセスメント			食事場面の評価/包括的アセスメントを理解する。			
20	評価③ スクリーニングテスト (質問紙 MWST WST FTなど)			質問紙、MWST、WST、FT等を説明できる。			
21	評価④ スクリーニングテスト (頸部聴診法)			頸部聴診法を理解する。			
22	評価⑤ スクリーニングテストの実際			スクリーニングテストを実際に施行できる。			
23	嚥下造影(VF)とは			嚥下造影(VF)を理解し、説明できる。			
24	嚥下造影(VF)の実際			嚥下運動、誤嚥、残留等の見方を理解する。			
25	嚥下造影(VF)の読影			嚥下造影を読影し、説明できる。			

26	嚥下内視鏡検査(VE)とは	嚥下内視鏡検査(VE)を理解し、説明できる。
27	嚥下内視鏡検査(VE)の実際	嚥下運動、誤嚥、残留等の見方を理解する。
28	嚥下内視鏡検査(VE) VF・VEの短所・長所 その他の検査	VF・VE及びその他検査の理解を深める。
29	言語聴覚士に求められる感染症対策	STに求められる感染症対策について説明できる。
30	言語聴覚士に求められる感染症対策の実際	手洗い、手指消毒、マスクの着脱が実践できる。

授業科目名	聴覚障害 I		担当者名	小坂井秀行			
			実務経験	言語聴覚士として施設等での勤務経験あり			
教科書	聴覚障害学 第4版 (医学書院)	単位数	学 科	学 年	学 期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	1	前期	必修	講義
30							
授業概要	聴覚障害についての基礎知識を学び、聴覚障害児・者が置かれている様々な状況に言語聴覚士がどのように対応、支援していくかを多面的に考察する。今後は、高齢の聴覚障害の割合も増えると予想され、高齢者の心理的特性と障害との関連、支援の方法について学ぶ。1年次は主に成人・高齢者の聴覚障害と補聴器装用までの支援について学習する。						
学習到達目標	聴覚障害とは何か？から始まり、小児の聴覚障害と発達の過程から、ろう者、中途失聴者、高齢者と様々なライフステージで抱える課題を理解し、そのリハビリテーション支援方法を考えることができるようにする。						
評価方法	出席・授業態度、試験により評価する。						
時数	授 業 内 容		到達目標・学習課題など				
1	聴覚の発達から考える。		聴覚の機能と意義を説明できる。				
2	聴覚障害とは何か？発症率・分類、障害の程度を学ぶ。		難聴が生活に及ぼす影響について理解する。				
3	聴覚障害とライフステージについて学ぶ。		難聴の心理的影響について理解する。				
4	聴覚障害のリハビリテーションの概要について学ぶ。		難聴リハビリテーションの概要を説明できる。				
5	音とは何か。音の性質、音波について学ぶ。		音の性質について理解する。				
6	音圧レベルと聴力レベルについて学ぶ。		聴覚と音響学との関係を理解する。				
7	聴覚の心理的特、ラウドネス、ピッチについて学ぶ。		聴覚における音の3要素を説明できる。				
8	マスキングの概念を学ぶ。		マスキングと聴力検査について説明できる。				
9	両耳聴、音源定位～ことばの知覚・認知を学ぶ。		両耳聴効果について説明できる。				
10	聴覚の発生～構造機能の概要を学ぶ。		聴覚器官の発生を説明できる。				
11	聴覚の発生～構造機能の概要を学ぶ。		聴覚器官の構造・機能の概要を説明できる。				
12	聴覚生理と語音聴取～補充現象について学ぶ。		有毛細胞と補充現象の関係を理解する。				
13	伝音難聴と感音難聴の概要を学ぶ。		聴覚障害の原因について説明できる。				
14	中枢性疾患、遺伝性による難聴を学ぶ。		聴覚障害の原因について説明できる。				
15	平衡器官の発生、構造、機能の概要を学ぶ。		平衡器官とめまいについて説明できる。				
16	聴覚補償機器～補聴器の基本的知識を学ぶ。		補聴器の構造・機能の概要を説明できる。				
17	補聴器の調整機能について学ぶ。		補聴器の調整原理と調整法を説明できる。				
18	補聴器の特性測定の実験の実際を学ぶ。		聴覚障害と補聴器の必要性を理解する。				
19	成人の補聴器適合と装用指導の概要を学ぶ。		補聴器の適合から試聴までを理解する。				
20	成人の補聴器適合と装用指導の概要を学ぶ。		補聴器の試聴から装用後まで説明できる。				
21	小児の補聴器適合について概要を学ぶ。		成人と小児の補聴器適合の違いを理解する。				
22	成人難聴のリハビリテーションの概要を学ぶ。		ライフステージでの課題を説明できる。				
23	成人難聴の評価、補聴効果の評価を学ぶ。		成人難聴へのSTの関わり方を説明できる。				
24	補聴器以外のコミュニケーション手段について学ぶ。		コミュニケーション手段の多様性を理解する。				
25	超高齢社会での難聴への支援方法を学ぶ。		中途難聴における補聴の課題を説明できる。				
26	補聴器装用へのSTの役割を学ぶ。		補聴器適合のチーム成員と役割を理解する。				
27	語音聴取改善のための聴取訓練を学ぶ。		視覚情報の活用方法について説明できる。				

28	コミュニケーションストラテジーの概要を学ぶ。	STが支援するコミュニケーションストラテジーを理解する。
29	難聴発症時期別におけるSTの支援を学ぶ。	重症度によるコミュニケーション障害の改善に向けた支援を説明できる。
30	高齢期発症例に対する指導・支援を学ぶ。	高齢期難聴に対しSTに期待される役割について説明できる。

授業科目名	聴覚検査法 I		担当者名	小坂井秀行			
			実務経験	言語聴覚士として施設等での勤務経験あり			
教科書	聴覚検査の実際 改訂4版 (日本聴覚医学会)	単位数	学 科	学 年	学 期	科目種別	授業方法
		1					
	聴覚障害学 第4版 (医歯薬出版)	時間数	言語聴覚科	1	後期	必修	演習
授業概要	1年次では、純音聴力検査、自記オーディオメトリー、閾値上聴力検査、語音聴力検査、インピーダンス・オーディオメトリーについてそれらの検査の方法を学ぶ。実際に検査を実施するにあたり、これらの検査機器の使用方法はもとより、検査の目的、検査結果から対象者に何を伝えるのかを十分に理解し、安全かつ適切な方法で検査の演習を行う。						
学習到達目標	言語聴覚士が行う聴力検査のために必要な知識を学び、検査機器の特性・機能について説明できる。実際にオーディオメータに触れ、基本的な操作をできるようにする。						
評価方法	出席率と授業態度。定期試験で評価する。						
時数	授 業 内 容		到達目標・学習課題など				
1	聴覚検査の予備知識 耳の構造と機能の復習		聴覚検査の前に予習・復習しておくこと。				
2	聴覚検査の予備知識 難聴その種類とオーディオグラムとの関係		聴覚検査の前に前期の復習しておく。				
3	音の基礎知識 音圧レベルと聴力レベルなど復習		音の知識についても復習しておくこと。				
4	オーディオメータとは？その機能について演習(グループ・ワーク)		実際にオーディオメータに触れて確かめる。				
5	聴覚検査を行うに際しての心構えと注意事項		聴力検査の目的を理解する。				
6	純音聴力検査 気導聴力検査の準備とオーディオグラム		オーディオグラムの見方を理解する。				
7	検査法 予備検査～本検査の演習(グループ・ワーク)		検査機器を適切に操作できる。				
8	気導聴力検査の演習(グループ・ワーク)		検査機器を適切に操作できる。				
9	骨導聴力検査 その意義と検査方法		気導・骨導聴力検査の違いを説明できる。				
10	マスキングとは何か？ マスキング法の手順		マスキング効果について説明できる。				
11	骨導聴力検査の演習(グループ・ワーク)		骨導聴力検査を適切に実施できる。				
12	骨導聴力検査の演習(グループ・ワーク)		骨導聴力検査を適切に実施できる。				
13	気導・骨導聴力検査の振り返り(グループ・ワーク)		聴力検査の手順と操作を復習する。				
14	自記オーディオメトリー 演習(グループ・ワーク)		自記オーディオメトリーを説明できる。				
15	閾値上聴力検査と補充現象について		補充現象について説明できる。				
16	語音聴力検査 その意義と方法		語音聴力検査を適切に実施できる。				
17	語音聴力検査の演習(グループ・ワーク)		語音聴力検査を適切に実施できる。				
18	自記オーディオメトリー、語音聴力検査振り返り(グループ・ワーク)		各検査を通しての疑問点をグループ・ワークで話し合い、発表する。				
19	インピーダンス・オーディオメトリー 検査の目的と種類		インピーダンス・オーディオメータの検査の目的と評価を理解する。				
20	ティンパノメトリー 演習(グループ・ワーク)		機器を適切に操作することができる。				
21	耳小骨筋反射検査 演習(グループ・ワーク)		機器を適切に操作することができる。				
22	インピーダンス・オーディオメトリー 振り返り(グループ・ワーク)		検査の評価・結果を説明できる。				
23	耳管機能検査 方法・結果と解釈		耳管機能検査を理解する。				

24	選別聴力検査 新生児・乳幼児・学童選別検査	新生児・乳幼児・学童における聴力検査を理解する。
25	他覚的聴力検査 聴性脳幹反応検査	聴性脳幹反応検査を説明できる。
26	耳音響放射 OAEとEOAE	OAEとEOAEを説明できる。
27	乳幼児聴力検査 BOA、COR演習(グループ・ワーク)	遊戯聴力検査を説明できる。
28	CORの演習振返り(グループ・ワーク)	COR検査を適切に実施できる。
29	機能性難聴の検査について	機能性難聴について説明できる。
30	これまでの各検査のまとめ	各種検査について復習する。

授業科目名	臨床実習 I		担当者名	小坂井秀行、熊谷美緒、眞柳みゆき、 島田真須美、萱場 文			
			実務経験	言語聴覚士、歯科医師として 病院等での勤務経験あり			
教科書	適宜紹介する	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		1					
		時間数	言語聴覚科	1	後期	必修	実習
		45					
授業概要	<p>病院や福祉施設など実習施設において、実際の臨床場面を見学することで言語聴覚士の仕事への意識を高めることを目的とする。言語聴覚療法、摂食嚥下療法、小児発達支援などの見学を通して、言語聴覚士のことば使い、態度、身のこなし、基本的スキルの実践を学ぶ。実習前の校内での実習指導と実習後の個人面談での臨床実習指導者からの評価及び自己評価をもとに、今後の課題と目標を考察し、実習の総括とする。</p>						
学習到達目標	<p>言語聴覚士の仕事、求められる資質について理解し、学生自身、自分に何が足りないのかを明確にして今後の努力目標をたてる。</p>						
評価方法	<p>実習先指導者による評価50%、実習前後の学内評価(準備・報告書等)50%。</p>						
時数	授 業 内 容						
45時間	<p>〈見学実習の目的〉 言語聴覚士や関連職種の見学を通してその役割を理解し、対象者への対応や職業人・社会人としての態度を学ぶ。また、実際の言語聴覚療法の場面を見学することで、臨床の場の理解を深め、言語聴覚士の仕事の面白さ、重要さを見つけることも見学実習の目的である。</p> <p>〈見学実習の目標〉 (1)リハビリテーション専門職に就くための自覚をもつ。 (2)多職種連携、リハビリテーションチームとは何かを学ぶ。 (3)記録・報告をすることを学ぶ。 (4)対象者へのことば使い、接し方を学ぶ。</p> <p>〈実習計画〉 (1)実習施設は医療機関、社会福祉施設とする。 (2)実習時間は1日8時間とする。 (3)実習施設での言語聴覚士の臨床場面を見学する。 (4)毎日の実習日誌を記録し、バイザーから指導を受ける。 (5)実習終了後、実習報告書を学校に提出する。 (6)実習中に理解できなかったことを学校で指導する。</p>						

授業科目名	人間関係論		担当者名	萱場 文			
			実務経験				
教科書	配布資料	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	2	後期	必修	講義
		30					
授業概要	人間関係の基礎となる心理学的知識を体系的に学び、対人理解・コミュニケーション能力・援助技術を高めることを目的とする。医療・福祉・教育現場において必要な対人スキルを実践的に習得する。グループワーク中心に進めていく。						
学習到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・人間関係の基本理論を説明できる。 ・自己および他者の理解を深められる。 ・ストレスや葛藤に対処しながら、適切なコミュニケーション方法を選択できる。 						
評価方法	課題や試験の結果から総合的に判断。学習意欲・態度を考慮することがある。						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	人間関係とコミュニケーション			人間関係の基礎概念を説明できる。コミュニケーションの役割について学ぶ。			
2							
3	対人認知			印象形成、ステレオタイプについて理解し、他者を理解するという事学ぶ。			
4							
5	パーソナリティ			性格理論について知識を深め、自己イメージと他者がもつ自分のイメージの違いを比較し、自己理解、他者理解を深める。			
6							
7	コミュニケーションとチャネル			対人コミュニケーションチャネルについて理解し、インターネット、SNS、メディアがコミュニケーション与える影響について考える。			
8							
9	感情			感情の種類、感情喚起のメカニズムについて学び、対人関係で、生じる感情の影響や医療現場における感情労働について考える。			
10							
11	葛藤と欲求不満			葛藤と防衛機制について学び、今まで葛藤場面でのような対処してきたのか振り返りを行い、自己理解、他者理解を深める。			
12							
13	ストレス			ストレス理論を学び、グループワークを通してストレスコーピングで自分のストレスが対処できるか考えてみる。			
14							
15	援助行動・援助要請・ソーシャルサポート・社会的スキル			援助行動、ソーシャルサポート、社会的スキルについて学ぶ。			
16							
17	人間関係を理解する			人間関係の代表的観察方法、交流分析、マインドフルネスについて学ぶ。			
18							
19	カウンセリング的アプローチと人間関係			カウンセリングの基本的な考え方や技法について学ぶ。			
20							
21	動機づけと人間関係			動機づけのメカニズムや欲求について理解し、原因帰属や自己効力感の基本的理論について考える。			
22							
23	リーダーシップとチーム			リーダーシップ理論、チームについて学ぶ。			
24							
25	コーチング			医療者にとって有益なコーチングの考え方やその背景にある様々な心理学について学ぶ。			
26							
27	集団			集団の特性や集団から受ける影響について学ぶ。			
28							
29	人間関係を難しくする障害			自閉症スペクトラム症、パーソナリティ障害について学ぶ。			
30							

授業科目名	健康と暮らし		担当者名	島田真須美			
			実務経験				
教科書	特になし 資料は授業内で配布	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	2	後期	必修	講義
		30					
授業概要	健康は単に病気の有無ではなく、生活習慣、環境、家族、社会制度など多くの要因と結びついている。本授業では、これらの要素を体系的に学び、ケース検討やグループワークを通して実践的に考える力を養う。						
学習到達目標	生活習慣や環境が健康に与える影響を理解し、言語聴覚士の立場から対象者の生活背景を踏まえた支援を考えることができる。						
評価方法	授業態度、小テスト、期末試験から総合的に評価する。						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	「健康」とは何か			健康の多面的な概念について説明できる			
2							
3	睡眠・食事・運動の基礎			基本的な生活習慣が健康に与える影響について説明できる			
4							
5	ストレスとメンタルヘルス			ストレス反応の仕組みについて説明できる			
6							
7	住環境と健康			住環境が健康に与える影響について説明できる			
8							
9	地域社会と健康			地域社会と健康について説明できる			
10							
11	家族構造とライフサイクル			家族のライフサイクルと健康課題を説明できる			
12							
13	コミュニケーションと健康			コミュニケーションが健康に与える影響を説明できる			
14							
15	慢性疾患と生活の変化			慢性疾患が生活に与える影響を説明できる			
16							
17	障害と暮らし			障害の種類と生活課題を説明できる			
18							
19	高齢者の暮らしと健康			高齢者の健康課題を説明できる			
20							
21	医療制度の基礎			医療保険制度の概要を説明できる			
22							
23	福祉制度と生活支援			福祉制度の概要を説明できる			
24							
25	STが支える生活の質(QOL)			STが生活のどの部分を支えるか説明できる			
26							
27	事例で学ぶ生活支援			生活支援の視点で事例を分析できる			
28							
29	まとめ			全体を振り返り、健康と暮らしのつながりについて説明できる			
30							

授業科目名	社会の科学		担当者名	島田真須美			
			実務経験				
教科書	特になし 資料は授業内で配布	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	2	前期	必修	講義
		30					
授業概要	社会の仕組みを体験的・対話的に理解し、言語聴覚士として臨床現場で必要となる「社会的背景を読み取る力」を身につける。社会問題をフィールドワークやグループワークを通して実践的に学ぶ。						
学習到達目標	社会問題を自分事として考え、他者理解につなげる。楽しさと発見を通して、学びへのモチベーションを高める。						
評価方法	授業態度、期末試験から総合的に評価する。						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	社会の科学とは？			社会科学の基本概念を理解する			
2							
3	社会科学の視点(経済・政治・文化・心理)を体験			社会科学を多視点から理解する			
4							
5	身近な社会問題を探すフィールドワーク①			学校周辺の「社会のサイン」を探す			
6							
7	身近な社会問題を探すフィールドワーク②			「社会のサイン」から問題点を考える			
8							
9	身近な社会問題を探すフィールドワーク③			「社会のサイン」から問題点を考える			
10							
11	地域社会の未来			今後の地域社会について考える			
12							
13	家族の多様性			家族背景が支援に与える影響を考える			
14							
15	格差と貧困について考える			格差と貧困について体験的に理解する			
16							
17	コミュニケーションと社会心理			コミュニケーションと社会心理について理解する			
18							
19	メディアと情報を読み解く			メディアと情報について体験的に理解する			
20							
21	地域における支援資源			地域の支援資源について理解する			
22							
23	社会問題分析			社会問題の多因子性を理解する			
24							
25	グループプロジェクト① 社会課題を選ぶ			社会課題をグループで検討する			
26							
27	グループプロジェクト② 発表準備			上記の課題発表の準備をする			
28							
29	最終発表会 & 振り返り			全体課題発表と全体の振り返り			
30							

授業科目名	暮らしの法律		担当者名	熊谷美緒			
			実務経験				
教科書	①看護学生のためのわかりやすい法律・制度／中央出版 ②配布資料	単位数	学科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	2	前期	必修	講義
30							
授業概要	講義では、契約・消費者トラブル・SNS利用・労働・金銭問題など、学生が直面しやすい身近な問題を取り上げる。トラブルの予防と適切な対応方法について考え、社会人として必要な法的知識を身につける。						
学習到達目標	①日常生活に関わる基本的な法律の知識を説明できる。 ②若者に多いトラブルとその予防方法を説明できる。						
評価方法	試験及び課題提出等から、総合的に判断する。						
時数	授業内容			到達目標・学習課題など			
1	今一番気になる制度は？			今自分自身が関心がある事柄に関連する制度や法律を調べ、発表できる。			
2							
3	18歳の法的立場を考える			未成年と成人の違いなどについて考えることができる。			
4							
5	契約			契約にまつわるトラブルについて考えることができる。			
6							
7	学生生活			SNS、DVなどのトラブルについて考えることができる。			
8							
9	働く			働くことの意味、お金の稼ぎ方などについて考えることができる。			
10							
11	就職活動と法律			就活にまつわるトラブルについて考えることができる。			
12							
13	労働者の保護			労働法、雇用について考えることができる。			
14							
15	結婚			婚姻について考えることができる。			
16							
17	子どもの権利・子育て			子どもの権利及び子育てについて考えることができる。			
18							
19	生活設計			税金、社会保険料などについて理解できる。			
20							
21	犯罪			犯罪の定義を考え、関連制度を学ぶ。			
22							
23	交通事故			交通事故について考えることができる。			
24							
25	医療保険・介護保険			社会保障制度の概要を理解し、説明できる。			
26							
27	年金			年金制度の概要を理解し、説明できる。			
28							
29	まとめ			総合的なまとめをおこなう。			
30							

授業科目名	多職種連携論		担当者名	尾形由美子、小坂井秀行			
			実務経験	看護師、言語聴覚士として 病院等での勤務経験あり			
教科書	リハビリシック コミュニケーション論・多職種連携論（医歯薬出版株式会社）	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	2	後期	必須	講義
30							
授業概要	多職種連携における看護分野(バイタル・医療的ケア)を理解する。急変時の対応について理解する。チーム・アプローチにおける言語聴覚士の役割と連携の仕方について理解する。						
学習到達目標	医療行為と看護分野の理解を通して適切に対応できるようになる。医療現場での多職種間のコミュニケーションに欠かせない他職種への理解と急性期・回復期・維持期(生活期)におけるSTの役割と実践を説明できる。						
評価方法	筆記試験と実技内容						
時数	授 業 内 容		到達目標・学習課題など				
1	バイタルサインとは		バイタルサインの種類と略語				
2			バイタルサインの異常の見方				
3			意識レベル・JCSとは				
4	バイタルサインの実際		体温・脈拍・血圧・呼吸数の測定と記録方法				
5			事例よりバイタルサインの必要性を学ぶ。				
6	医療的ケアとは		医療行為とは				
7			日常生活において必要な医療的ケアとは				
8			喀痰の性状と吸引に起こりうることは				
9	医療的ケアの実際		口腔吸引の実際				
10			鼻腔吸引の実際				
11			気管カニューレ内部の吸引の実際				
12	救急蘇生		急変とは 急変を未然に防ぐには				
13			心肺蘇生ガイドライン カーラー救命曲線				
14	救急蘇生の実際		シュミレーターとAEDを用いた心肺蘇生の実際				
15	まとめ		医療従事者としての役割				
16	多職種連携とチーム医療		求められる背景と目的を理解する。				
17	他職種の理解		それぞれの専門性を説明できること。				
18	チーム・アプローチの基本構造		チームを作るうえでの注意事項				
19	チーム・アプローチの基本構造		役割り分担と目標の共有の仕方				
20	チーム・アプローチにおける課題と対応		ファシリテーションとは何か。				
21	チーム・アプローチにおける課題と対応		多様性への対応の仕方				
22	多職種連携の実践(急性期)		急性期における連携のポイント				
23	多職種連携の実践(急性期)		目標達成への具体的展開				
24	多職種連携の実践(回復期)		回復期における連携のポイント				
25	多職種連携の実践(回復期)		目標達成への具体的展開				
26	多職種連携の実践(維持期)		維持期における連携のポイント				
27	多職種連携の実践(維持期)		目標達成への具体的展開				
28	生活期リハにおける多職種連携		生活期リハの目的と展開				
29	在宅における多職種連携		在宅での主な関係職種と役割				
30	まとめ		小テスト				

授業科目名	地域共生論		担当者名	小坂井秀行			
			実務経験				
教科書	【参考書】 まちづくりとしての地域包括ケアシステム(東京大学出版会)	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	2	後期	必修	講義
30							
授業概要	<p>少子高齢化に加え地方からの人口流出が進み、首都圏と地方との格差が広がる現在、いかにして地域再生(創生)の道を進むのか?地域づくりのためには他分野、他職種の間がどのように力を合わせていくのか、その中で地域リハビリテーションが果たす役割を理解し、言語聴覚士も地域共生から「まちづくり」に至る過程で何ができるのか考える授業とする。</p>						
学習到達目標	<p>地域共生社会の基本的な考え方や具体的な事例や改革に触れながら、多様な人々が年齢、障害の有無、地域の差を超えて自分らしく生きていくために、自分(言語聴覚士)は何ができるのか?地域共生社会の1要素としての地域包括ケアシステムの役割を理解し、説明できる。</p>						
評価方法	試験によるもの。						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	地方自治とは何か			明治維新後～地方自治法(昭和22年)までの地方自治についての歴史を学ぶ。			
2							
3	地方自治の必要性			なぜ地方自治は必要なのかを説明できる。			
4							
5	日本の人口・地方の人口の推移			少子高齢化に至った原因について説明できる。			
6							
7	高齢化率の上昇による問題点(グループワーク)			高齢化率が地域にもたらす社会的課題について説明できる。			
8							
9	現在自分が住む地域社会の課題(グループワーク)			現在の地域社会の課題を挙げ、原因についてまとめることができる。			
10							
11	地域住民を支えるためのシステム			支え合うまちづくりに必要な社会資源を挙げることができる。			
12							
13	震災からの復興と再生を考える(グループワーク)			南三陸町の震災復興とまちづくりを考えてみる。			
14							
15	地域創生を成功させた事例について考える(グループワーク)			豊明市の事例について検証し、STとしての関り方を考える。			
16							
17	地域共生社会と地域包括ケアの違い			地域共生社会と地域包括ケアの違いについて理解し、説明できる。			
18							
19	医療・福祉が地域共生に果たす役割			地域共生の中で医療福祉の関り方を理解し、説明できる。			
20							
21	障害を持つ子どもへの支援			障害者が孤立せず、共に助け合うためにSTはどう働きかけるか説明できる。			
22							
23	高齢者の生活を支援する方法			人生会議、エンディングノートについて、理解し説明できる。			
24							
25	地域包括ケアシステムにおけるリハビリテーションの役割			地域包括ケアシステムにおけるSTの役割と地域共生のための考えを述べるることができる。			
26							
27	すべての人が安心して暮らせる地域づくり(グループワーク)			地域で助け合う新しいまちづくりについて、自分の考えで説明できる。			
28							
29	地域共生社会の中で言語聴覚士にできること			地域共生社会について学んだことを説明できる。			
30							

授業科目名	こども学		担当者名	熊谷美緒			
			実務経験				
教科書	子どもの健康と安全／中山書店	単位数	学科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	2	後期	必修	講義
30							
授業概要	療育の現場では、訓練以外の時間も子どもと過ごすことがある。この科目では、「言語聴覚士」であるまえに、「子どもを支援する立場」として必要な知識を学ぶ。						
学習到達目標	・子どもの健康と安全の知識を身につける。						
評価方法	試験及び課題提出等から、総合的に判断する。						
時数	授業内容			到達目標・学習課題など			
1	第1章 子どもの健康と安全				子どもの健康、健康に影響するもの、子供を取り巻く環境と安全について説明できる。		
2							
3	第2章 子どもの健康と発育①				成長発達の一般的原則、形態的発達、運動機能の発達について説明できる。		
4							
5	第2章 子どもの健康と発育②				精神機能の発達、生理的機能の発達、発育評価について説明できる。		
6							
7	第3章 子どもの健康と子育てに必要な養護・しつけ①				居住・施設環境、子どもの特性と基本的生活習慣などを説明できる。		
8							
9	第3章 子どもの健康と子育てに必要な養護・しつけ②				日常に必要な養護について説明できる。		
10							
11	第4章 子どもの事故とその予防①				子どもの事故の特徴、事故やけがの理解と応急処置について説明できる。		
12							
13	第4章 子どもの事故とその予防②				事故やけがの予防について説明できる。		
14							
15	第5章 子どもに多い症状・病気とその対処及び予防①				子どもが病気にかかりやすい理由、感染予防、子どもに多い感染症について説明できる。		
16							
17	第5章 子どもに多い症状・病気とその対処及び予防②				集団生活における感染対策、予防接種、その他の疾患と対処法について説明できる。		
18							
19	第6章 障害をもつ子どもと家庭へのかかわり				障害の概念、精神的な障害とそのケア、特殊なケアの介助方法について説明できる。		
20							
21	第7章 児童虐待				児童虐待の定義・予防・対処について説明できる。		
22							
23	第8章 災害の影響から子どもをできるだけ守る				災害の種類と影響、災害への備えについて説明できる。		
24							
25	第9章 地域との連携・協働				地域ネットワークシステム、専門職との連携・協働について考える。		
26							
27	まとめ①				総合的なまとめをおこなう。		
28							
29	まとめ②				総合的なまとめをおこなう。		
30							

授業科目名	解剖学実習		担当者名	眞柳みゆき			
			実務経験	歯科医師として病院等での勤務経験あり			
教科書	発生発語・摂食嚥下の解剖・生理学 言語聴覚士のための解剖・生理学	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		1					
		時間数	言語聴覚科	2	前期	必修	実習
45							
授業概要	人体の構造・仕組みを学ぶ。言語聴覚士にとって重要な頭頸部については、特に理解を深める。また、解剖実習の根幹である献体制度を理解する。						
学習到達目標	人体の複雑な構造について、各組織がどのように結びついて機能しているかを理解する。解剖学的用語を覚える。						
評価方法	実習態度・小テスト・レポート・期末試験の結果で評価する。						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	解剖学実習(観察・見学)についての説明			解剖学実習(観察・見学)について、その概要(御献体、白菊会等を含めて)を理解する			
2							
3							
4	骨学①			体幹・上肢・下肢を構成している骨を学ぶ			
5							
6							
7	骨学②			頭頸部を構成している骨、また、孔について学ぶ			
8							
9							
10	復習・小テスト			小テスト(筆記・口頭試問)			
11							
12							
13	頭頸部・脳・口腔の構造について			頭頸部の器官・骨・筋・神経・脈管について模型等を利用して学ぶ			
14							
15							
16							
17							
18							
19	神経系			神経系について分類・走行当について学ぶ			
20							
21							
22	循環器系			器官・骨・筋・神経・脈管について模型等を利用して学ぶ			
23							
24							
25	実習前指導			実習時の服装・持ち物等について理解する			
26							
27							
28	解剖実習(観察実習)			御献体を用いて、実際に人体(頭頸部・脳を中心に)を観察する			
29							
30							

31	実習後指導①	解剖学(観察)実習で学んだ知識の整理・報告書作成等をする
32		
33		
34	実習後指導②	小テスト(筆記・口頭試問)
35		
36		
37	呼吸器系	各系の器官・骨・筋・神経・脈管について模型等を利用して学ぶ
38		
39		
40	消化器系・泌尿器系	
41		
42		
43	生殖器系・内分泌系	
44		
45		

授業科目名	内科学		担当者名	玉井ときわ、眞柳みゆき			
			実務経験	医師、歯科医師として病院等での勤務経験あり			
教科書	crosslink basic リハビリテーションテキスト 内科学 / メジカルビュー社	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	2	前期	必須	講義
		30					
授業概要	言語聴覚療法を行う上で関わりの大きい疾患を中心に内科領域の疾患についてその概要・特徴を説明する						
学習到達目標	内科領域の疾患についてその概要・特徴を理解する						
評価方法	出席・試験の結果等を考慮して総合的に判断する						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	内科学概論			内科学の概要について理解する			
2							
3							
4	診断学総論			内科学の診断法について診察の流れ・検査を学び理解する			
5							
6	治療学総論			内科的治療法を知る			
7							
8	循環器疾患①			循環器疾患について学ぶ			
9	循環器疾患②						
10	呼吸器疾患・感染症①			呼吸器疾患・感染症について学ぶ			
11	呼吸器疾患・感染症②						
12	消化管疾患①			消化器疾患について学ぶ			
13	消化管疾患②						
14	肝・胆・膵			肝・胆・膵疾患について学ぶ			
15	アレルギー・リウマチ・膠原病						
16	腎・泌尿器疾患			腎・泌尿器疾患について学ぶ			
17	血液疾患①						
18	血液疾患②			腎・泌尿器疾患について学ぶ			
19	脳神経疾患						
20	復習・まとめ			電解質異常について学ぶ			
21	小テスト						
22	循環器疾患③呼吸器疾患・感染症③			各疾患について学んだことを復習し、理解を深める			
23	消化器疾患③・肝・胆・膵②						
24	腎・泌尿器疾患②						
25	血液疾患③・脳血管疾患②						
26	電解質異常・内分泌疾患			電解質異常・内分泌疾患について学ぶ			
27	代謝疾患			代謝疾患について学ぶ			
28	婦人科疾患			婦人科疾患について学ぶ			
29	中毒・熱中症など			中毒・熱中症について学ぶ			
30	復習・まとめ			小テストをして復習する			

授業科目名	小児科学		担当者名	菊池 敦生			
			実務経験	医師として病院等での勤務経験あり			
教科書	小児科学・発達障害学 医学書院	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	2	後期	必修	講義
		30					
授業概要	小児は、発達途上であるため同じ疾患でも成人とは異なる病態を示すことが多いため、成人との相違点にも着目しながら解説していく						
学習到達目標	小児の疾患についてその概要・特徴を理解する						
評価方法	試験の結果等を考慮して総合的に判断する						
時数	授 業 内 容		到達目標・学習課題など				
1	小児科学とは		小児科学を学ぶ意義を知る				
2	小児の発達・成長①		小児の発達・成長の概念・評価法を学ぶ				
3	小児の発達・成長②						
4	小児保健①		乳児健診・予防接種等に関して学ぶ				
5	小児保健②						
6	小児疾患の診断法①		小児疾患の各種診断法を学ぶ				
7	小児疾患の診断法②						
8	遺伝疾患と先天異常①		遺伝性疾患・先天異常について学ぶ				
9	遺伝疾患と先天異常②						
10	新生児疾患①		新生児の特徴や新生児疾患について学ぶ				
11	新生児疾患②						
12	神経・骨・筋肉疾患①		けいれん・てんかんと等をはじめとする神経系や筋ジストロフィー・重症筋無力症などの筋肉疾患等について学ぶ				
13	神経・骨・筋肉疾患②						
14	循環器疾患①		循環器系の正常な血液動態・構造を理解し、循環器疾患について学ぶ				
15	循環器疾患②						
16	感染症		感染症について学ぶ				
17	消化器疾患①		消化器系の解剖生理を理解し、先天性疾患をはじめとした消化器系疾患について学ぶ				
18	消化器疾患②						
19	消化器疾患③						
20	内分泌・代謝疾患①		内分泌・代謝疾患について学ぶ				
21	内分泌・代謝疾患②						
22	免疫・アレルギー疾患・膠原病①		免疫・アレルギー疾患・膠原病について学ぶ				
23	免疫・アレルギー疾患・膠原病②						
24	腎・泌尿器・生殖器疾患①		腎・泌尿器・生殖器の解剖生理を学び、疾患について理解する				
25	腎・泌尿器・生殖器疾患②						
26	血液疾患・悪性腫瘍①		血液疾患・悪性腫瘍について学ぶ				
27	血液疾患・悪性腫瘍②						
28	心身症・神経症①		心身症・神経症について学ぶ				
29	心身症・神経症②						
30	眼科・耳鼻科疾患		眼科・耳鼻科疾患について学ぶ				

授業科目名	精神医学		担当者名	及川隆司			
			実務経験	医師として病院等での勤務経験あり			
教科書	「標準理学療法学・作業療法学」 専門基礎分野 精神医学 第2 版 医学書院	単位数	学科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	2	前期	必修	講義
30							
授業概要	精神医学的な症状と診察手法、および主要な疾患の症状・治療を概説する。また精神科領域における社会保障制度を講義する。						
学習到達目標	精神医学の基礎的概念を理解し、臨床各論の知識を身につける						
評価方法	授業への出席と筆記試験の総合成績						
時数	授業内容			到達目標・学習課題など			
1	総論・精神医学概観			精神医学の歴史を学び、現代の精神医学的な考え方を理解する。			
2	疾患分類、精神症状の概要(1)			精神疾患の分類を学ぶ。主要な精神症状を理解する。			
3	精神症状の概要(2)			主要な精神症状を理解する			
4	精神症状の概要(3)			主要な精神症状を理解する			
5	精神障害の診断(1)			精神科的診察手法と診断について学ぶ			
6	精神障害の診断(2)			精神科医療で用いられる各種検査について			
7	脳器質性精神障害(1)、認知症の概要			認知症を生じる脳器質性疾患を学ぶ			
8	脳器質性精神障害(2)			認知症以外の脳器質性疾患による精神障害を学ぶ			
9	症状性精神障害			内科疾患等に付随する精神障害を学ぶ			
10	精神作用物質による障害			薬物を含む精神作用物質が精神機能に及ぼす影響を理解する			
11	てんかんの分類と症状			各種てんかんの内容、症状を理解し、てんかん脳波の見方を学ぶ			
12	てんかんの治療とケア			てんかんの薬物治療を学ぶ			
13	統合失調症の概要と症状(1)			統合失調症の概念を学ぶ			
14	統合失調症の概要と症状(2)			統合失調症の症状を理解する			
15	統合失調症の経過と予後、治療(1)			統合失調症の分類と予後を学ぶ			
16	統合失調症の経過と予後、治療(2)			統合失調症の薬物治療を学ぶ			
17	気分障害(1)			気分障害の概念を学ぶ			
18	気分障害(2)			うつ病の病態と症状を理解する			
19	気分障害(3)			双極性障害を理解し、気分障害の薬物治療			
20	神経症性障害(1)			神経症の考え方と疾患分類を学ぶ			
21	神経症性障害(2)			神経症としての各種病態、症状を理解する			
22	生理的・心理的要因による障害			神経因性食思不振と睡眠障害について学ぶ			
23	人格障害と発達障害			人格の考え方とその障害、および発達障害の概要を理解する			
24	精神遅滞			精神遅滞を生じる疾患を学び、精神遅滞の概要を理解する			

25	ライフサイクルと精神障害(1)	出生から死に至るライフサイクルの中で生じる種々の精神科的問題を考察する
26	ライフサイクルと精神障害(2)	各ライフステージにおける主要な精神障害を学ぶ
27	精神障害の治療とリハビリテーション(1)	精神科医療で用いられる薬物とその治療効果を学ぶ
28	精神障害の治療とリハビリテーション(2)	薬物以外の精神科的治疗手法を学ぶ
29	精神保健医療と福祉(1)	精神保健福祉法を中心とした、精神科領域の法的基盤を理解する
30	精神保健医療と福祉(2)	精神科医療と各種福祉制度との関連を理解する

授業科目名	リハビリテーション医学		担当者名	及川隆司			
			実務経験	医師として病院等での勤務経験あり			
教科書	Crosslink basic	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
	リハビリテーション医学	2					
	MEDICAL VIEW	時間数	言語聴覚科	2	前期	必修	講義
	適宜:プリントを配付	30					
授業概要	リハビリテーション医学について、その概要から各疾患・障害ごとのリハビリテーション療法について解説する						
学習到達目標	リハビリテーション医療の概要を知り、疾患・障害の特徴をおさえ、適したリハビリテーション療法を選択できるようになる						
評価方法	出席・試験の結果等を考慮して総合的に判断する						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	リハビリテーション医学の理念と定義①			リハビリテーション医学の理念・定義を学び、一般医療と異なる点・障害の分類法を理解する。			
2	リハビリテーション医学の理念と定義②						
3	健康と生活機能①			心身機能・身体構造の評価法を学び、リハビリテーションにおける「参加」の概念を理解する。			
4	健康と生活機能②						
5	健康と生活機能③						
6	リハビリテーション医療の計画・リスク管理			リハビリテーション療法について学び、チーム医療として各職種がどのように連携して進めていくか等計画できるようになる。			
7	チーム医療・多職種連携						
8	リハビリテーション医療を取り巻く制度・法律						
9	リハビリテーション療法(理学・作業・言語聴覚療法)			リハビリテーション療法と装具、自助具等について使用法を学び、また、住環境の整え方を知る。			
10	装具・補助用具・自助具と環境						
11	ICUにおけるリハビリテーション			対象疾患・障害について学び、適したリハビリテーション療法を理解する			
12	心大血管・脳血管・神経筋疾患のリハビリテーション						
13	運動器リハビリテーション			対象疾患・障害について学び、適したリハビリテーション療法を理解する			
14	呼吸器リハビリテーション						
15	がん患者リハビリテーション			対象疾患・障害について学び、適したリハビリテーション療法を理解する			
16	腎臓リハビリテーション						
17	糖尿病リハビリテーション			対象疾患・障害について学び、適したリハビリテーション療法を理解する			
18	リンパ浮腫複合的治療						
19	障害児(者)リハビリテーション			対象疾患・障害について学び、適したリハビリテーション療法を理解する			
20	難病患者リハビリテーション						
21	摂食機能療法			対象疾患・障害について学び、適したリハビリテーション療法を理解する			
22	失語症のリハビリテーション						
23	視覚障害・聴覚障害・平衡障害に対するリハビリテーション			対象疾患・障害について学び、適したリハビリテーション療法を理解する			
24	排尿・排便障害に対するリハビリテーション、精神作業療法						
25	高次脳機能障害・認知症のリハビリテーション			対象疾患・障害について学び、適したリハビリテーション療法を理解する			
26	スポーツ復帰・障害者スポーツ・脊髄損傷に対するリハビリテーション						
27	上肢・下肢切断者のリハビリテーション			ICTを利用したリハビリテーション療法や予防対策を学ぶ			
28	近未来のリハビリテーション医療						
29	ロコモティブシンドローム・サルコペニア・フレイル・生活習慣病対策			緩和期・終末期のリハビリテーション療法を知る			
30	緩和期・終末期のリハビリテーション医療						

授業科目名	臨床神経学		担当者名	及川隆司			
			実務経験	医師として病院等での勤務経験あり			
教科書	なし 適宜:プリントを配付 【参考文献】 病気がみえるvol.7 脳・神経	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	2	前期	必修	講義
		30					
授業概要	神経系の解剖生理を復習しながら、神経系疾患に関して、その症状・診査表・治療法等について解説する						
学習到達目標	神経系の疾患について、説明できるようにする						
評価方法	出席・試験の結果等を考慮して総合的に判断する						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	神経系の解剖生理①			神経系の解剖生理学を理解する			
2	神経系の解剖生理②						
3	神経学的検査			神経系疾患の検査・診察法を学ぶ			
4	神経症候学(神経学的診察)						
5	脳血管障害① 脳梗塞			疾患の原因・特徴・治療法や対処法について学ぶ			
6	脳血管障害② くも膜下出血						
7	脳血管障害③ 一過性虚血性心疾患・もやもや病			"			
8	頭部外傷(外傷性脳損傷)						
9	脳腫瘍①			"			
10	脳腫瘍②						
11	中枢神経系感染症① 脳炎・髄膜炎			"			
12	中枢神経系感染症② 脳膿瘍・プリオン病(CDJ)						
13	神経変性疾患① パーキンソン病			"			
14	神経変性疾患② ハンチントン病						
15	神経変性疾患③ ALS(筋萎縮性側索硬化症)			"			
16	神経変性疾患④ その他の疾患						
17	認知症① アルツハイマー型認知症			"			
18	認知症② レビー小体型認知症						
19	認知症③ 前頭側頭葉変性症			"			
20	認知症④ 血管性認知症						
21	認知症⑤ その他の認知症をきたす疾患			"			
22	水頭症						
23	脱髄疾患① 多発性硬化症			"			
24	脱髄疾患② その他の脱髄疾患						
25	末梢神経障害			"			
26	筋疾患(ミオパチー)						
27	神経筋接合部疾患①			"			
28	神経筋接合部疾患②						
29	代謝性疾患			"			
30	その他						

授業科目名	歯科口腔外科学		担当者名	眞柳みゆき			
			実務経験	歯科医師として病院等での勤務経験あり			
教科書	最新言語聴覚学講座 臨床歯科医学・口腔外科学	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	2	前期	必修	講義
		30					
授業概要	顎口腔領域の構造・機能・疾患について分かりやすく説明していく。						
学習到達目標	発声発語機能・摂食嚥下機能に関わる顎口腔領域の構造・機能・発生・疾患について理解する。						
評価方法	出席・課題への取り組み・試験の結果を考慮して総合的に判断する。						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	歯科概論 歯科とは？			歯科医療について理解する			
2	歯・口腔・顎・顔面の構造① 歯・歯周組織			歯・口腔・顎・顔面の構造について理解する			
3	歯・口腔・顎・顔面の構造② 顔面・顎部の形態・構造						
4	歯・口腔・顎・顔面の構造③ 顔面・顎・口腔・歯の発生と発育						
5	歯・口腔・顎・顔面の機能① 咀嚼機能(1)			歯・口腔・顎・顔面の機能について理解する			
6	歯・口腔・顎・顔面の機能② 摂食嚥下機能						
7	歯・口腔・顎・顔面の機能③ 構音障害						
8	歯・口腔・顎・顔面の診察法			歯科での診察法を知る			
9	う蝕・歯髄炎・根尖性歯周炎			疾患および歯科医学的処置について学ぶ			
10	う蝕以外の硬組織疾患			疾患および歯科医学的処置について学ぶ			
11	歯周組織の疾患			疾患および歯科医学的処置について学ぶ			
12	歯髄炎・根尖性歯周炎			疾患および歯科医学的処置について学ぶ			
13	う蝕以外の硬組織疾患			疾患および歯科医学的処置について学ぶ			
14	歯周組織の疾患			疾患および歯科医学的処置について学ぶ			
15	歯列不正 歯・歯周組織の欠損			疾患および歯科医学的処置について学ぶ			
16	歯の萌出・数・形態・形成の異常			疾患および歯科医学的処置について学ぶ			
17	口腔・顎・顔面の先天異常・発育異常①			疾患および歯科医学的処置について学ぶ			
18	口腔・顎・顔面の先天異常・発育異常②			疾患および歯科医学的処置について学ぶ			
19	口腔・顎・顔面の外傷			疾患および歯科医学的処置について学ぶ			
20	口腔・顎・顔面の炎症・感染症			疾患および歯科医学的処置について学ぶ			
21	口腔・顎・顔面の嚢胞・類似疾患			疾患および歯科医学的処置について学ぶ			
22	唾液腺疾患・口腔乾燥症			疾患および歯科医学的処置について学ぶ			
23	顎関節疾患・口腔粘膜疾患			疾患および歯科医学的処置について学ぶ			
24	口腔に症状を現す血液疾患			疾患および歯科医学的処置について学ぶ			
25	口腔・顎・顔面の神経系疾患			疾患および歯科医学的処置について学ぶ			
26	口腔ケア			口腔ケアに関して学ぶ			
27	口腔機能障害に対する対応			言語・嚥下障害に対する歯科医学的対応を学ぶ			
28	口腔機能発達不全症			各疾患及び加齢による口腔機能障害に対する歯科医学的対応を学ぶ			
29	中枢性疾患						
30	加齢による口腔機能障害						

授業科目名	臨床心理学		担当者名	山田嘉明			
			実務経験				
教科書	臨床心理学 配付資料(プリント)	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	2	前期	必修	講義
		30					
授業概要	心理的問題をもつ人(クライアント)の臨床心理学的査定法と心理的援助方法について学ぶ。前半では臨床心理学の背景, 研究方法, DSM診断分類について概観し, 不安症や身体症状症, 強迫症, 解離症, 統合失調症, 双極症, うつ病等を理解する。臨床心理学的査定法については面接法と主な心理検査を学習する。心理的援助方法は精神分析的方法, 認知行動療法, クライアント中心療法を中心に後半でみていく。						
学習到達目標	<ul style="list-style-type: none"> 不安症や身体症状症, 強迫症, 解離症, 統合失調症, 双極症, 摂食障害などの症状を理解し, 説明できる。 臨床心理学的査定法を理解し, 説明できる。 主な心理療法を理解し, 説明できる。 						
評価方法	レポート提出(20%), 期末試験(80%)						
時数	授 業 内 容		到達目標・学習課題など				
1	臨床心理学とは何か, 伝統的診断分類		臨床心理学の定義, 対象, 精神的な変調に関する伝統的な診断分類について説明できる。				
2							
3	DSMによる診断分類		DSMによる診断分類, 不安症, 身体症状症, 強迫症, 解離症などの症状や障害について説明できる。				
4							
5	統合失調症		統合失調症の症状や障害について説明できる。				
6							
7	双極症, 抑うつ症群		双極症やうつ病等の症状や障害について説明できる。				
8							
9	心身症ー摂食障害		摂食障害(神経性無食欲症, 神経性大食症)の症状や障害について説明できる。				
10							
11	発達障害		自閉スペクトラム症, 注意欠如・多動症, 限局性学習障害について説明できる。				
12							
13	臨床心理学的査定法(1)ー面接法, 心理検査, 知的機能スクリーニング検査		面接法, 心理検査の種類, 知的機能スクリーニング検査について説明できる。				
14							
15	臨床心理学的査定法(2)ー知能検査		ビネー式知能検査, ウェクスラー式知能検査について説明できる。				
16							
17	臨床心理学的査定法(3)ーパーソナリティ検査		主なパーソナリティ検査について説明できる。パーソナリティ検査の実例をみる。				
18							
19	臨床心理学的査定法(4)ー神経心理学的検査		リハビリテーション分野などでよく利用される神経心理学的検査について説明できる。				
20							
21	心理療法(1)ー精神分析的方法		心理療法(精神療法)の定義, 方法, 精神分析的アプローチについて説明できる。				
22							
23	心理療法(2)ー行動療法, 認知療法, 認知行動療法		行動療法, 認知療法, 認知行動療法について説明できる。				
24							
25	心理療法(3)ークライアント中心療法		クライアント中心療法について説明できる。				
26							
27	心理療法(4)ー集団療法, 家族療法など		集団療法, 家族療法について説明できる。				
28							
29	まとめと復習		これまでのまとめと復習を行う。				
30							

授業科目名	心理測定法		担当者名	山田嘉明			
			実務経験				
教科書	教科書は指定しない 配付資料(プリント)	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		1					
		時間数	言語聴覚科	2	後期	必修	講義
		15					
授業概要	直接的な測定や調査ができない研究対象に対して、データに基づく検証ができるようさまざまな測定法や調査法が開発され、心理測定法として心理学や関連諸科学の発展に寄与してきた。言語聴覚療法の評価においても、心理測定法は重要な役割をもっている。ここでは心理測定の方法論やデータ分析方法について学習する。						
学習到達目標	心理学における代表的な測定法について、それらの特徴や意義、利用法を説明できる。 ・心理物理学的測定法を説明できる。 ・検査の信頼性、妥当性を説明できる。 ・代表的なデータ解析法について説明できる。						
評価方法	レポート提出(20%)、期末試験(80%)						
時数	授 業 内 容		到達目標・学習課題など				
1	心理測定法とは		尺度の水準、名義尺度、順序尺度、間隔尺度、比率尺度、偶然誤差、恒常誤差について説明できる。				
2							
3	心理物理学的測定法(1)―調整法、極限法、上下法		閾値、刺激閾、弁別閾、主観的等価点、丁度可知差異、調整法、極限法、上下法について説明できる。				
4							
5	心理物理学的測定法(2)―恒常法、最尤法、マグニチュード推定法		恒常法、最尤法、マグニチュード推定法、および信号検出理論について説明できる。				
6							
7	テスト理論		古典的テスト理論、項目反応理論、検査の信頼性と妥当性について説明できる。				
8							
9	尺度構成法、調査法		尺度構成法、評定法、多次元尺度構成法、質問紙法、悉皆調査、標本調査について説明できる。				
10							
11	データ解析法(1)―統計学事始め		記述統計学、推測統計学、統計的仮説検定について説明できる。				
12							
13	データ解析法(2)―重回帰分析、因子分析、共分散構造分析		重回帰分析、因子分析、共分散構造分析について説明できる。				
14							
15	まとめと復習		これまでのまとめと復習を行う。				

授業科目名	言語学Ⅱ		担当者名	東ヶ崎祐一			
			実務経験				
教科書	今泉敏・小澤由嗣編『言語聴覚士のための基礎知識 音声学・言語学』医学書院 ※プリント等も適宜配布・使用	単位数	学 科	学 年	学 期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	2	前期	必修	講義
30							
授業概要	1年時に履修した知識に基づき、人間の言語の特質から音韻論、形態論、統語論、意味論などの個別分野についての知識を深め、脳内で言語がどのように処理されているかを考察していく。						
学習到達目標	言語学Ⅰで学んだ知識・概念をもとに、より深く人間の言語・言語学、および日本語の各側面(音韻・携帯・統語・意味・変異・歴史など)について理解・説明が可能となり、また実際の言語現象について思考・分析が可能になる。						
評価方法	期末試験・課題提出・授業における態度を総合評価						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	授業説明			言語学とは人間の何を対象とした学問か、また言語学が必要な理由を理解・説明できる。			
2	1 言語学の基礎① ことばとは何か						
3	1 言語学の基礎②			ソシュールの言語観や言語の機能を理解できる。言語の生産性の基盤となるものを説明できる。			
4	記号体系としての言語/言語の生産性を支える性質						
5	2 音韻論①			音声と音素の違いを説明できる。音素や素性を用いて言語を音韻論的に分析できる。			
6	音韻/音素/日本語の音素						
7	2 音韻論②			音韻とそこに働く規則という概念を学び、それを用いて日本語の音韻現象を説明できる。			
8	弁別組成と音韻規則/アクセントの音韻規則						
9	3 語彙・文法・意味①			「文法」という概念をつかむ。統語構造とは何か、また生成文法の基礎について理解、説明できる。			
10	「文法」とことばの知識/文法Ⅰ/文法Ⅱ						
11	3 語彙・文法・意味②			文法における「格」や「主題」、「一致」について理解、説明できる。また、語と形態素、複合語の生成について理解、説明できる。			
12	文法Ⅲ/語彙Ⅰ/語彙Ⅱ						
13	3 語彙・文法・意味③			複合によりできた言葉がどのような構造を持つか理解、説明できる。また語の意味というもの、指示や叙述について理解、説明できる。			
14	語彙Ⅲ/意味Ⅰ/意味Ⅱ						
15	3 語彙・文法・意味③			談話の含意、語用論の基礎について理解、説明できる。			
16	意味Ⅲ/意味Ⅳ/人文科学から自然科学へ						
17	4 言語学と周辺分野①			近代言語学が哲学に及ぼした影響、また歴史言語学について理解、説明できる。また言語と心理・認知の問題について理解できる。			
18	言語学と哲学・歴史学/言語学と心理学・認知科学						
19	4 言語学と周辺分野②			言語学と論理学の関係、また「発話内行為」「グライスの公準」「関連性理論」といった言語の語用論的側面について理解・説明できる。			
20	言語学と自然科学/言語学とコミュニケーション論						
21	5 言語学的にみた日本語①			日本語の歴史について理解できる。また現代日本語の音素や特殊音素、音節とモーラ、特有の音配列について理解・説明できる。			
22	日本語の歴史と語彙層/音韻論からみた日本語						
23	5 言語学的にみた日本語②			日本語の独特な文字体系について理解・説明できる。また日本語の名詞複合や動詞の変化・自他交替について理解・説明できる。			
24	文字論からみた日本語/形態論からみた日本語						
25	5 言語学的にみた日本語③			日本語の文型・語配列の特徴、格助詞、関係節、主題、敬語といった日本語を特徴づける現象について理解・説明できる。			
26	統語論・意味論から見た日本語						
27	データ分析演習①			今まで学んできたことを踏まえ、応用して、言語現象を分析できる。ここでは外来語のアクセントの付け方や言い間違いについて扱う。			
28	外来語アクセント/言い間違い						
29	データ分析演習② 連濁			前回と同様にして、連濁について分析、そこに潜む日本語の特徴について説明できる。ここまで学習してきたことを概観、再確認する。			
30	まとめ						

授業科目名	音声学Ⅱ		担当者名	東ヶ崎祐一			
			実務経験				
教科書	今泉敏・小澤由嗣編『言語聴覚士のための基礎知識 音声学・言語学』医学書院 ※プリント等も適宜配布・使用	単位数	学 科	学 年	学 期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	2	後期	必修	講義
		30					
授業概要	1年時に履修した知識に基づき、人間の音声の記述方法を習得、またそれとともに音声算出のメカニズムや、音声の被る変化、音声と共に産出される音節、拍やアクセントなどを理解する。さらに上記の知識手法を用いた音声分析能力を身につける。						
学習到達目標	言語音産出に必要な音声器官のしくみ、音声記述に必要な国際音声記号、音声学的分析手法の基礎を身につける。そして調音の運動生理学的メカニズム、更に音声と音員の違いを踏まえた脳内での音に処理についても理解、説明できるようにする。						
評価方法	期末試験・課題提出・授業における態度を総合評価						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	授業説明			音声学の種類、各調音器官の役割などが理解できる。			
2	1 発声発語器官と構音① 発声発語器官						
3	1 発声発語器官と構音②			母音や子音が発声器官でどのように産出されるかを理解できる。			
4	構音						
5	2 音声記号と分節音① 表音文字表記と音声表記/二重文節と分節音/音素/相補分布, 条件異音, 自由変音			音声と文字表記の差について、また音素や音変化について理解・説明できる。			
6							
7	2 音声記号と分節音②			国際音声記号について理解し、それを用いて音声を表記できるようにする。また子音の種類や分類について理解を深める。			
8	音声の分類①						
9	2 音声記号と分節音③			子音(承前)の種類やその分類について理解を深める。			
10	音声の分類②						
11	2 音声記号と分節音④			母音の種類やその分類について理解を深める。また音が隣り合うことによって起こる「同化」や、音節について理解・説明できる。			
12	音声の分類③/調音結合/同化/音節						
13	3 超分節的要素①			言語において単語に起こる現象としてのアクセントや、その特徴・種類・意味について理解・説明できる。			
14	アクセント/						
15	3 超分節的要素②			イントネーション・強調を含めた言語のリズムやその種類・意味について理解・説明できる。			
16	イントネーション/リズム						
17	4 日本語音声学①			日本語におけるリズムの単位としてのモーラというものについて理解・説明できる。			
18	分節的特徴①						
19	4 日本語音声学②			日本語における母音や子音の特徴について理解・説明できる。			
20	分節的特徴②						
21	4 日本語音声学③			撥音・促音・長音といった、日本語特有の音の種類や特徴について理解・説明できる。			
22	特殊モーラ						
23	4 日本語音声学④			日本語におけるアクセントやその特徴について理解・説明できる。			
24	韻律的特徴①						
25	4 日本語音声学⑤			日本語におけるアクセントやその特徴について理解・説明できる。			
26	韻律的特徴②						
27	データ分析・過去問演習①			日本語の実際の発話の音をIPAを使って表記できる。音節・モーラやアクセントを総合的に考慮し、言語の変化を分析・説明できる。			
28	IPA表記/超分節的要素						
29	データ分析・過去問演習② 発話エラーの音声学			音響音声学への橋渡しとして発話エラーを分析、音声学的に説明できる。ここまで学習してきたことを概観、再確認する。			
30	まとめ						

授業科目名	聴覚心理学		担当者名	櫻井 潤			
			実務経験	企業等での実務経験あり			
教科書	言語聴覚療法学テキスト 音響・音声学	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	2	前期	必修	講義
		30					
授業概要	「音をどのように聞いているか」についての知識を学ぶ。また、言語聴覚士として「聴こえるしくみ」をどのようにとらえるかを理解する。						
学習到達目標	①聴覚のしくみを理解する。②音の心理的及び物理的側面について理解する。③ラウドネス曲線について理解する。④聴覚の周波数分析とマスキング現象について理解する。⑤両耳の聴こえ方について理解する。⑥聴覚情景分析について理解する。						
評価方法	出席・授業態度・前期試験(9月予定)の結果を総合評価する。						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	音響学基礎①			音の物理的基礎について理解する。			
2	音響学基礎②			音の種類と波形について理解する。			
3	音響学基礎③			音の強さとデシベル(dB)について理解する。			
4	音響学基礎④			音の分析(スペクトル分析)について理解する。			
5	音響学基礎⑤			共鳴とフィルタについて理解する。			
6	音響学基礎⑥			反射、回折、屈折、残響について理解する。			
7	聴覚の仕組みについて①			聴覚器(耳)の構造を理解する。			
8	聴覚の仕組みについて②			聴覚刺激の伝搬過程を理解する。			
9	聴覚の仕組みについて③			「内耳(蝸牛)」の電気変換の仕組みを理解する。			
10	音の心理的側面と物理的側面について①			音の3要素について理解する。			
11	音の心理的側面と物理的側面について②			周波数(Frequency)と音高(Pitch / ピッチ)について理解する。			
12	音の心理的側面と物理的側面について③			音圧(Sound Pressure)と音の大きさ(Loudness / ラウドネス)について理解する。			
13	音の心理的側面と物理的側面について④			聴覚閾値、痛覚閾値、可聴範囲について理解する。			
14	音の大きさの知覚について①			フォンとゾーンについて理解する。			
15	音の大きさの知覚について②			ラウドネス曲線について理解する。			
16	音の大きさの知覚について③			補充現象(リクルートメント)について理解する。			
17	音の高さの知覚について①			音色について理解する。			
18	音の高さの知覚について②			時間的パターンの知覚について理解する。			
19	音の高さの知覚について③			物理的指標、心理的指標、「高い・低い」。非線形性について理解する。			
20	聴覚の周波数分析とマスキング現象について①			聴覚の周波数分析(内耳の働き)について理解する。			
21	聴覚の周波数分析とマスキング現象について②			聴覚フィルタについて理解する。			
22	聴覚の周波数分析とマスキング現象について③			マスキング現象と臨界帯域について理解する。			
23	両耳聴効果について①			音源の定位、両耳間について理解する。			
24	両耳聴効果について②			両耳ラウドネス加算効果について理解する。			
25	環境と聴覚について①			音による環境理解と騒音について理解する。			
26	環境と聴覚について②			聴覚疲労と聴覚順応について理解する。			
27	環境と聴覚について③			カクテルパーティー効果、マガーク効果、音韻修復効果について理解する。			

28	臨床応用と環境について①	難聴者の聴覚心理(補充現象など)について理解する。
29	臨床応用と環境について②	音声知覚と環境音響について理解する。
30	臨床応用と環境について③	聴覚特性への対応について理解する。

授業科目名	社会保障制度		担当者名	熊谷美緒			
			実務経験				
教科書	・言語聴覚士テキスト第4版／医歯薬出版株式会社 ・図解社会保障入門2026／中央法規	単位数	学科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	2	後期	必修	講義
30							
授業概要	社会保障制度の目的と仕組みについて学び、医療保険、介護保険、障害者福祉制度を中心に理解する。言語聴覚士の臨床場面と関連づけながら、対象者の生活を支える制度と専門職の役割について考える。						
学習到達目標	①社会保障制度の目的と体系を説明できる。②医療保険、介護保険、障害者福祉制度の概要を説明できる。③言語聴覚士の支援と社会保障制度の関係を説明できる。						
評価方法	試験及び課題提出等から、総合的に判断する。						
時数	授業内容		到達目標・学習課題など				
1	社会保障と社会福祉		社会保障の概念及び機能を理解し、概要を説明できる。				
2							
3	社会保障の体系と範囲		社会保障の体系と範囲について理解し、概要を説明できる。				
4							
5	社会保障を構成する各制度①社会保険制度 -a)医療保険		各社会保険制度について理解し、概要を説明できる。				
6	-b)年金保険						
7	-c)介護保険						
8	-d)労災保険						
9	-e)雇用保険						
10	社会保障を構成する各制度②社会手当制度		社会手当制度を理解し、説明できる。				
11	社会保障を構成する各制度③公的扶助制度(生活保護制度)		生活保護制度について理解し、概要を説明できる。				
12							
13	社会福祉を構成する各法規①社会福祉法		社会福祉法の概要を理解し、説明できる。				
14	社会福祉を構成する各法規②福祉6法 -a)児童福祉法		生活保護法を除く福祉5法について概要を理解し、説明できる。				
15	-b)老人福祉法						
16	-c)身体障害者福祉法						
17	-d)知的障害者福祉法						
18	-e)母子及び父子並びに寡婦福祉法						
19	社会福祉を構成する各法規③関係・関連法律		関係・関連法律の概要を説明できる。				
20	社会福祉を構成する各法規④主要な障害者福祉関係法		主要な障害者福祉関係法の概要をそれぞれ理解し、ポイントを説明できる。				
21	-a)障害者基本法 -b)障害者総合支援法						
22	-c)精神保健福祉法 -d)発達障害者支援法						
23	障害者福祉に関する施策の実施		手帳制度や福祉用具(補装具、日常生活用具)などについて概要を理解し、説明できる。				
24							
25	介護保険		介護保険制度を理解し、概要を説明できる。				
26							
27	社会福祉援助技術		社会福祉援助について概要を理解し、説明できる。				
28							
29	社会保障の実施体制		社会保障の実施体制を説明できる。				
30							

授業科目名	言語聴覚障害評価学		担当者名	島田真須美			
			実務経験	言語聴覚士として施設等での勤務経験あり			
教科書	標準言語聴覚障害学 言語聴覚療法評価・診断学／医学書院	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	2	前期	必修	講義
		30					
授業概要	言語聴覚療法における評価・診断の基本的な過程を学ぶ。						
学習到達目標	言語聴覚療法における評価・診断の基本概念、過程について理解できる。						
評価方法	試験及び課題提出等から、総合的に判断する。						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	評価・診断の基本概念			評価・診断の基本概念について理解する。			
2							
3	臨床データの解釈			臨床データの解釈について理解する。			
4							
5	評価・診断の過程			評価・診断の過程について理解する。			
6							
7	スクリーニング			スクリーニングについて理解する。			
8							
9	各領域において必要とされる検査①			各領域において必要とされる検査について理解する。			
10							
11							
12	各領域において必要とされる検査②			各領域の評価・診断の実際について理解する。			
13							
14							
15	各領域の評価・診断の実際③			各領域の評価・診断の実際について理解する。			
16							
17							
18	報告書の書き方①			報告書の書き方について理解する。			
19							
20							
21	報告書の書き方②			報告書の書き方について理解する。			
22							
23	情報提供			情報提供について理解する。			
24							
25	言語聴覚障害学における研究			言語聴覚障害学における研究について理解する。			
26							
27	研究の種類			研究の種類について理解する。			
28							
29	論文の読み方			論文の読み方について理解する。			
30							

授業科目名	失語症Ⅱ		担当者名	萱場 文			
			実務経験	言語聴覚士として病院等での勤務経験あり			
教科書	・失語症 臨床標準テキスト ・ぜんぶわかる 脳の事典 ・配布資料(プリント)	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	2	前期	必須	講義
	30						
授業概要	各病期(急性期 回復期 生活期)に必要な失語症の評価とリハビリテーションの理論、方法、及び治療計画について学ぶ。失語症者が抱える問題点を捉え、機能的にだけでなく、生活的側面にも視点を向け、社会参加や環境調整を含めたコミュニケーション支援について学習を深める。						
学習到達目標	・各病期(急性期 回復期 生活期)に必要な失語症の評価法とリハビリテーションについて説明できる。 ・生活的側面にも視点を向けた社会参加や環境調整を含めたコミュニケーション支援について種類、内容について説明できる。						
評価方法	課題、試験の結果から総合的に判断します。学習態度を考慮することがあります。						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	評価・診断過程(収集する情報の種類)			情報収集すべき内容を理解する。			
2	問診・スクリーニング検査①			問診・スクリーニング検査について説明できる。			
3	スクリーニング検査②			失語症のスクリーニング検査について実施できる。			
4	スクリーニング検査③						
5	鑑別診断 カウンセリング 改善の評価			鑑別診断等について説明できる。			
6	検査施行上の留意点 総合的失語症検査			検査施行上の留意点について説明できる。			
7	特定の側面の検査①失語症補助テスト、TLPA、STA			失語症補助テスト,TLPA,STAを説明できる。			
8	特定の側面の検査②トークンテスト、CADL			トークンテスト,CADLを理解し、説明できる。			
9	特定の側面の検査③SALA、SCTAW			SALA,SCTAWを理解し、説明できる。			
10	関連する認知機能の評価①			非言語的知能の分析、失行失認の分析、記憶障害の分析の評価について説明できる。			
11	関連する認知機能の評価②			注意障害の分析、遂行機能障害の分析、社会行動障害の分析の評価について説明できる。			
12	医学的情報の収集 心理社会的側面の情報収集(サマリー)			医学的情報及び心理社会的側面の情報収集について説明できる。			
13	鑑別、経過と予後、訓練援助の方針の決定			鑑別について述べ、訓練援助の方針を説明できる。			
14	評価・診断のまとめ			評価・診断を理解し、知識を習得できたか確認する。			
15	リハビリテーション過程 失語症治療の歴史 多職種連携			リハビリテーションの流れ、多職種連携について概略を述べることができる。失語症治療の歴史について学ぶ。			
16	失語症セラピー①(行動変容法 刺激・促進法 機能再編成法)			左記の内容を理解し、内容を述べることができる。			
17	失語症セラピー②(遮断除去法 語用論的アプローチ 認知神経心理学的アプローチ 拡大・代替コミュニケーション)			左記の内容を理解し、内容を述べることができる。			
18	言語モダリティー別訓練について 言語モダリティー別訓練(言語理解 発話 書字)の促進パターン			左記の内容を理解し、内容を述べることができる。			
19	言語モダリティー別訓練課題(聴覚的理解 発話 読字 書字)			左記の内容を理解し、内容を述べることができる。			
20	語彙・意味の訓練 音韻の訓練			左記の内容を理解し、内容を述べることができる。			
21	読字の訓練			読字の訓練について理解し、説明できる。			
22	書字の訓練			書字の訓練について理解し、説明できる。			
23	文・統語の訓練			文・統語の訓練について理解し、説明できる。			

24	重症度別の言語訓練の組み立て	重・中・軽度の失語症の言語訓練の組み立てについて説明できる。
25	可能なコミュニケーション手段と注意事項の周知 失語症のコミュニケーションの有効性増進法(PACE)①	コミュニケーション原則の周知徹底の方法や代替コミュニケーションの具体的指導について説明できる。
26	失語症のコミュニケーションの有効性増進法(PACE)②	失語症のコミュニケーションの有効性増進法について内容を理解し、説明、実施できるようにする。
27	心理・社会的問題への対応	若年層・中年層・高齢層における問題点を踏まえ、心理社会的問題への対応について述べることができる。
28	訓練計画	社会的側面、ニーズ、家族、予後予測など総合的に考えて、訓練計画を立案できるようにする。
29	各期(急性期・回復期・生活期)の訓練・援助	急性期・回復期・生活期の各期での訓練・援助について説明できる。
30	訓練・援助のまとめ	訓練・援助について理解し、知識を習得したか確認する。

授業科目名	言語発達障害評価学Ⅰ		担当者名	熊谷美緒			
			実務経験	言語聴覚士として療育施設等での勤務経験あり			
教科書	なし	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		1					
		時間数	言語聴覚科	2	前期	必修	演習
		30					
授業概要	小児の評価に必要な検査の実施方法及び、結果の解釈について学ぶ。						
学習到達目標	適切に検査を実施し、結果を解釈できるようになる。						
評価方法	試験及び課題提出等から、総合的に判断する。						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	言語検査(<S-S法>①)			検査の実施と採点ができる。			
2							
3	言語検査(<S-S法>②)			検査の実施と採点ができる。			
4							
5	言語検査(<S-S法>③)			検査の実施と採点ができる。			
6							
7	言語検査(<S-S法>④)			検査の実施と採点ができる。			
8							
9	発達検査(遠城寺式乳幼児分析的発達検査法①)			検査の実施と採点ができる。			
10							
11	発達検査(遠城寺式乳幼児分析的発達検査法②)			検査の実施と採点ができる。			
12							
13	発達検査(新版K式発達検査①)			検査の実施と採点ができる。			
14							
15	発達検査(新版K式発達検査②)			検査の実施と採点ができる。			
16							
17	ルリア理論、CHC理論について			ルリア理論、CHC理論について理解し説明できる。			
18							
19	知能検査の概要			知能検査の概要を理解し、説明できる。			
20							
21	知能検査(WISC-V①)			WISC-Vの概要を理解し、説明できる。			
22							
23	知能検査(WISC-V②)			WISC-Vの下位検査(VCI、VSI)を理解し、実施できる。			
24							
25	知能検査(WISC-V③)			WISC-Vの下位検査(FRI、WMI)を理解し、実施できる。			
26							
27	知能検査(WISC-V④)			WISC-Vの下位検査(PSI)を理解し、実施している。採点結果からFSIQ及び各合成得点を導き出すことができる。			
28							
29	知能検査(WISC-V⑤)			WISC-Vの結果を解釈し、説明できる。			
30							

授業科目名	言語発達障害評価学Ⅱ		担当者名	熊谷美緒			
			実務経験	言語聴覚士として療育施設等での勤務経験あり			
教科書	なし	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		1					
		時間数	言語聴覚科	2	後期	必修	演習
		30					
授業概要	小児の評価に必要な検査の実施方法及び、結果の解釈について学ぶ。						
学習到達目標	適切に検査を実施し、結果を解釈できるようになる。						
評価方法	試験及び課題提出等から、総合的に判断する。						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	知能検査(WPSSI-Ⅲ①)			WPPSI-Ⅲの下位検査(VCI、PRI)を理解し、実施できる。			
2							
3	知能検査(WPSSI-Ⅲ②)			WPPSI-Ⅲの下位検査(PSI、GLC)を理解し、実施できる。			
4							
5	知能検査(WPSSI-Ⅲ③)			WPPSI-Ⅲの下位検査の採点結果からFSIQ及び各合成得点を導き出すことができる。			
6							
7	知能検査(WPSSI-Ⅲ④)			WPPSI-Ⅲの結果を解釈し、説明できる。			
8							
9	田中ビネー知能検査Ⅴ① 小児①			発達チェック及び1歳級～6歳級の問題を理解する。			
10							
11	田中ビネー知能検査Ⅴ② 小児②			7歳級～13歳級の問題を理解する。			
12							
13	田中ビネー知能検査Ⅴ③ 成人①			成人級の問題を理解し、実施できる。			
14							
15	田中ビネー知能検査Ⅴ④ 成人②			成人級の問題を理解し、実施できる。			
16							
17	田中ビネー知能検査Ⅴ⑤ 採点・結果の解釈			田中ビネーⅤの結果を解釈し、説明できる。			
18							
19	学習認知検査(KABC-Ⅱ①)			KABC-Ⅱの概要、理論的基盤を理解し、説明できる。			
20							
21	学習認知検査(KABC-Ⅱ②)			KABC-Ⅱの認知検査を理解し、実施できる。			
22							
23	学習認知検査(KABC-Ⅱ③)			KABC-Ⅱの習得検査を理解し、実施できる。			
24							
25	学習認知検査(KABC-Ⅱ④)			KABC-Ⅱを採点し、結果を出すことができる。			
26							
27	学習認知検査(KABC-Ⅱ⑤)			KABC-Ⅱの結果を解釈し、支援への活用の仕方を理解し、説明することができる。			
28							
29	その他検査及びまとめ			その他の検査含め、検査の理解を深める。			
30							

授業科目名	運動性構音障害 II		担当者名	佐々木貴行			
			実務経験	言語聴覚士として病院等での勤務経験あり			
教科書	「言語聴覚士のための運動障害性構音障害学」廣瀬肇他著 医歯薬出版 配布資料(プリント)	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	2	前期	必修	講義
30							
授業概要	運動障害性構音障害 I で学んだ基礎をもとに評価・訓練の視点を深めていく。正常と異常を音声や発話明瞭度、発話自然度を通して判断する力を習得する。また、実習に必要な実践的な視点とアセスメントの基本を学んでいく。						
学習到達目標	運動障害性構音障害をタイプ別に特徴を理解し、基本的な評価・訓練方法を習得し説明できる。評価方法(AMSDやSLTA-ST)の実践と病態に応じた検査結果について理解できる。						
評価方法	出席、授業態度、レポート、筆記試験を総合評価						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	運動障害性構音障害 I の復習			前年度の学習の振り返り			
2							
3	音声の仕組みと正常と異常を理解する1			音声の障害と構音障害を区別する			
4							
5	音声の仕組みと正常と異常を理解する2			音声の障害と構音障害を区別し自分の言葉で説明できる			
6							
7	日本語の構音を理解する1			日本語の構音異常を理解する			
8							
9	日本語の構音を理解する2			構音の歪みを障害として理解し説明できる			
10							
11	ことばの神経機構を理解する1			正常な構音と異常の違いを理解			
12							
13	ことばの神経機構を理解する2			正常な構音と異常の違いを理解し自分の言葉で説明できる			
14							
13	運動障害性構音障害のタイプ別の評価・訓練方法の基礎1			タイプ分類毎の評価・訓練方法を理解			
14							
15	運動障害性構音障害のタイプ別の評価・訓練方法の基礎2			タイプ分類毎の評価・訓練方法を理解			
16							
17	運動障害性構音障害のタイプ別の評価・訓練方法の基礎3			タイプ分類毎の評価・訓練方法を理解			
18							
19	運動障害性構音障害のタイプ別の評価・訓練方法の基礎4			タイプ分類毎の評価・訓練方法を理解し自分の言葉で説明できる			
20							
19	発声発語検査の実践(AMSDとSLTA-ST)1			検査方法の確認と実践			
20							
21	発声発語検査の実践(AMSDとSLTA-ST)2			検査方法の確認と実践			
22							
27	検査結果の分析1			模擬的な症例を通して分析する			
28							
29	検査結果の分析2			模擬的な症例を通して分析する			
30							

授業科目名	器質性構音障害		担当者名	阿部由香			
			実務経験	言語聴覚士として病院等での勤務経験あり			
教科書	クリア言語聴覚療法5 建帛社 小児発声発語障害 編著 佐藤亜希子 緒方祐子	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	2	後期	必修	講義
		30					
授業概要	器質性構音障害の概念と理論,方法論について学び,臨床で用いられる検査等の演習も行う。教科書を通して発声発語機関の構造や機能,音韻と構音の発達を確認し,小児で多く見られる器質性構音障害の発話症状を解説する。また,演習では基本的な検査だけでなく,小児と関わるための臨床的な視点も解説する(グループ演習も実施する)。						
学習到達目標	器質性構音障害の概念,理論,方法論を理解する。演習において小児の発話特性について学び,実践にむけた情報収集・検査方法等を理解し,修得する。						
評価方法	課題取組・試験の結果を総合評価						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	第1章:小児の発声発語障害に必要な基礎知識 【発声発語の構造機能】【音韻と構音の発達】			発声発語器官を理解し,鼻咽腔閉鎖機能について説明できる。構音発達と順序性について説明できる。			
2							
3	第1章:小児の発声発語障害に必要な基礎知識 【音韻と構音の発達】【音声学的な知識の復習】			音韻認識について理解する。日本語の音素表記と音声表記の違いが説明できる。			
4							
5	第2章:小児の発話障害の原因・要因と発症メカニズム 【小児の発話障害の基本的概念】			構音障害の分類について説明できる。 機能的構音障害について説明できる。			
6							
7	第2章:原因や要因が認められる発話障害 ③器質性の原因・要因			器質性構音障害の原因要因について学ぶ。			
8							
9	第3章:発話の症状① 【構音誤りの分類】			構音の誤りの分類について説明できる。			
10							
11	第3章:発話の症状② 【特異的な構音操作の誤り】			特異的な構音操作の誤り(異常構音)について学ぶ。			
12							
13	第3章:発話の症状② 【特異的な構音操作の誤り】			発話サンプルを用いて聞き取りをする。			
14							
15	第3章:発話の症状③ 【語の音の配列の誤り】 【鼻咽腔閉鎖機能具全の関連する発話症状】			語の音の配列の誤りを分類できる。受動的な発話と能動的な発話の誤りについて学ぶ。			
16							
17	第4章:評価 鼻咽腔閉鎖機能の評価および口蓋裂言語検査について			評価について学ぶ。			
18							
19	第6章【器質性の原因・要因に伴う発話障害】 I 口唇裂・口蓋裂 P133~140			口蓋裂の治療の流れについて学ぶ。			
20							
21	第6章【器質性の原因・要因に伴う発話障害】 I 口唇裂・口蓋裂 P141~152			口唇裂・口蓋裂に関するSTの役割と言語管理について学ぶ。			
22							
23	第6章【器質性の原因・要因に伴う発話障害】 I 口唇裂・口蓋裂 P153~169			口唇裂・口蓋裂の言語治療の実際について学ぶ。			
24							
25	第6章【器質性の原因・要因に伴う発話障害】 I 口唇裂・口蓋裂 P170~185			口唇裂・口蓋裂の言語治療の実際について学ぶ。			
26							
27	第6章【器質性の原因・要因に伴う発話障害】 I 口唇裂・口蓋裂 P186~204			口唇裂・口蓋裂の関連疾患及びそれらを伴う症候群の特徴を学ぶ。			
28							
29	第6章【器質性の原因・要因に伴う発話障害】 II 舌の形態以上に伴う構音障害			舌の形態異常に伴う発話障害について学ぶ。			
30							

授業科目名	機能性構音障害		担当者名	阿部由香			
			実務経験	言語聴覚士として病院等での勤務経験あり			
教科書	クリア言語聴覚療法5 小児発声発語障害/建帛社	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	2	前期	必修	講義
		30					
授業概要	機能性構音障害の概念と理論,方法論について学び,臨床で用いられる検査等の演習も行う。教科書を通して発声発語機関の構造や機能,音韻と構音の発達を確認し,小児で多く見られる機能性構音障害の発話症状を解説する。また,演習では基本的な検査だけでなく,小児と関わるための臨床的な視点も解説する(グループ演習も実施する)。						
学習到達目標	機能性構音障害の概念,理論,方法論を理解する。演習において小児の発話特性について学び,実践にむけた情報収集・検査方法等を理解し,修得する。						
評価方法	出席・課題取組・試験の結果を総合評価						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	第1章:小児の発声発語障害に必要な基礎知識 I【発声発語の構造機能】II【音韻と構音の発達】			発声発語器官を理解し,鼻咽腔閉鎖機能について説明できる。 構音発達と順序性について説明できる。			
2							
3	第1章:小児の発声発語障害に必要な基礎知識 III【音韻と構音の発達】【音声学的な知識の復習】			音韻認識について理解する。 日本語の音素表記と音声表記を学ぶ。			
4							
5	第2章:小児の発話障害の原因・要因と発症メカニズム 【小児の発話障害の基本的概念】【機能性構音障害とは】			構音障害の分類について説明できる。 機能性構音障害について説明できる。			
6							
7	第3章:発話の症状 I-①【構音誤りの分類】			構音の誤りの分類について説明できる。			
8							
9	第3章:発話の症状 I-②【特異的な構音操作の誤り】			特異的な構音操作の誤り(異常構音)について学ぶ。			
10							
11	第3章:発話の症状 II【語の音の配列の誤り】 III【鼻咽腔閉鎖機能具全の関連する発話症状】			語の音の配列の誤りを分類できる。受動的な発話と能動的な発話の誤りについて学ぶ。			
12							
13	第4章:評価 【小児の臨床場面でのSTの役割について】 【情報収集の方法や内容について】			小児の臨床場面での情報収集の内容と質問の仕方について説明できる。			
14							
15	第4章:評価 【小児の発話障害の評価に必要な検査の種類や内容】			構音・音韻の検査の実施方法を理解する。			
16							
17	第4章:評価 【評価のまとめから判定を行い,治療方針の立案について】			評価のまとめから問題点の抽出と治療方針の立案について考える。			
18							
19	第4章:評価 【評価サマリーの作成の仕方を学ぶ】			評価サマリーを作成の仕方を学ぶ。			
20							

21	第5章:訓練・支援 【言語治療の原則について学ぶ】	構音訓練の流れについて理解する。
22	【構音訓練の流れについて学ぶ】	
23	第5章:訓練・支援 【系統的構音訓練について学ぶ】	系統的訓練について考える。
24	【系統的構音訓練について学ぶ】	
25	第5章:訓練・支援 【系統的構音訓練について学ぶ】	系統的訓練について考える。
26	【系統的構音訓練について学ぶ】	
27	第5章:訓練・支援 【構音障害の特徴から構音訓練の方法について学ぶ】	訓練につまずいたとき,養育者と子どもとSTの連携について考え、理解する。
28	【構音障害の特徴から構音訓練の方法について学ぶ】	
29	第5章:訓練・支援 【訓練に使用する効果的な教材の選択について学ぶ】	教材について学ぶ。
30	第5章:効果測定・事例・まとめ	事例を通じて訓練の効果測定を学ぶ。

授業科目名	摂食嚥下障害Ⅱ		担当者名	萱場 文、小坂井秀行			
			実務経験	言語聴覚士として病院等での勤務経験あり			
教科書	摂食嚥下障害学 第2版／医学書院	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	2	前期	必修	講義
30							
授業概要	小児から成人・高齢者までの摂食嚥下機能の発達と成熟、加齢に伴う変化を追いながら、健常者の摂食嚥下の機序を学ぶ。そのうえで、摂食嚥下障害を引き起こす病態、嚥下運動を阻害する原因を把握するため、言語聴覚士が行える検査・評価・訓練についての知識を身につける。摂食嚥下リハビリテーションのチームアプローチにおけるSTの役割についても学ぶ。						
学習到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・小児の摂食嚥下のメカニズム、病態を理解する。 ・摂食嚥下障害の検査・評価方法を習得し、問題点を抽出することができる。 						
評価方法	課題、試験の結果から総合的に判断します。学習態度を考慮することがあります。						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	小児の摂食嚥下障害の概要			小児摂食嚥下障害の概要、原因を説明できる。			
2	小児疾患別の摂食嚥下障害への関わり方Ⅰ(脳性麻痺)			疾患別にみられる摂食嚥下障害の特徴を理解し、支援方法を学ぶ。			
3	小児疾患別の摂食嚥下障害への関わり方Ⅱ(先天性疾患)						
4	小児疾患別の摂食嚥下障害への関わり方Ⅲ(ダウン症候群)						
5	小児疾患別の摂食嚥下障害への関わり方Ⅳ(自閉症スペクトラム症)						
6	小児疾患別の摂食嚥下障害への関わり方Ⅴ(器質性障害)						
7	小児の食物拒否と回避・制限性食物摂取症						
8	小児摂食嚥下障害の評価			小児摂食嚥下障害の評価についてのまとめ。			
9	小児摂食嚥下障害のリハビリテーション支援			リハビリテーション支援方法のまとめ。			
10	小児の摂食嚥下障害まとめ			小テスト			
11	スクリーニング検査(RSST MWST WST)の実際			RSST,MWST,WSTを実践で実施できる。			
12	嚥下造影(VF)嚥下造影の実際 嚥下造影の見方			VF(動画)を見て評価を行い、理解を深める。			
13	嚥下内視鏡検査(VE)の実際			VE(動画)を見て評価を行い、理解を深める。			
14	合併症とリスク管理① 誤嚥性肺炎、窒息			合併症、リスク管理について理解し、説明できる。			
15	合併症とリスク管理② 気管カニューレ、低栄養、脱水、非経口栄養			合併症、リスク管理について理解し、説明できる。			
16	加齢に伴う変化/サルコペニア、フレイルとの関係			サルコペニア、フレイルとの関係を説明できる。			
17	成人の治療・訓練 概要 間接訓練の実際			成人の治療訓練の概要について学ぶ。			
18	成人の治療・訓練 間接訓練/直接訓練			間接訓練(舌、咽頭)について説明できる。			
19	成人の治療・訓練 直接訓練の実際			直接訓練について説明できる。			
20	成人の治療・訓練 食物形態の調整 その他			食物形態の調整、PAP等について説明できる。			
21	成人の治療・訓練 病態別① 脳血管障害			病態別の摂食嚥下障害の特徴と対応について理解し、説明できる。			
22	成人の治療・訓練 病態別② 神経筋疾患						
23	成人の治療・訓練 病態別③ 認知症に伴う摂食嚥下障害						
24	情報の統合、臨床推論と介入計画の立案①			嚥下障害の有無、病態把握、重症度、予後予測、訓練適応、リスクマネジメントについて説明できる。			
25	病態把握、重症度、予後予測、訓練適応、リスクマネジメント						
26	情報の統合、臨床推論と介入計画の立案②			ICFに基づく問題整理と介入計画立案について説明できる。事例に基づいて、ICFから問題を抽出できる。			
27	ICFに基づく問題整理と介入計画立案						
28	言語聴覚士の役割とチームアプローチ① 言語聴覚士の基本的な役割			チームアプローチにおけるSTの役割を学ぶ。			
29	言語聴覚士の役割とチームアプローチ② 多職種連携、NST			NST、地域における多職種連携について学ぶ。			
30	成人の嚥下障害について(総括)			成人の嚥下障害についてまとめ。			

授業科目名	聴覚障害Ⅱ		担当者名	阿部由香			
			実務経験	言語聴覚士として病院等での勤務経験あり			
教科書	聴覚障害学第3版 医学書院 シリーズ監修 藤田郁代 編集城間将江、鈴木恵子、小淵千絵	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	2	前期	必修	講義
		30					
授業概要	小児聴覚障害について学ぶ。聴覚障害の発達への影響、原因と種類・特性、聞こえの障害特性、早期発見・早期療育について解説する。聴覚検査と評価では必要に応じ演習を行う。言語・コミュニケーションの検査及び評価、指導支援等についても解説する。視覚聴覚の重複障害においても解説する。						
学習到達目標	小児聴覚障害の概念、原因や発達への影響を学ぶだけでなく、評価についても学ぶ。難聴児、難聴のある重複障害児の療育について学ぶことが目標である。						
評価方法	出席・課題取組・試験の結果を総合評価						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	第1章 4 聴覚障害のリハビリテーションの概要 小児難聴のリハビリテーション			小児難聴の支援の概要を学ぶ。			
2							
3	第1章 4 聴覚障害のリハビリテーションの概要 小児難聴のリハビリテーション			小児難聴の支援の概要を学ぶ。			
4							
5	第4章 5 乳幼児聴力検査			乳幼児の聴力検査について学ぶ。			
6							
7	第4章 5 乳幼児聴力検査			乳幼児の聴力検査について学ぶ。			
8							
9	第7章 1 小児難聴のリハビリテーションの概要			小児期の発達と難聴の影響について学ぶ。			
10							
11	第7章 2 小児難聴の評価			聴覚評価について学ぶ。			
12							
13	第7章 2 小児難聴の評価			コミュニケーション発達、言語評価について学ぶ。			
14							
15	第7章 2 小児難聴の評価			コミュニケーション発達、言語評価について学ぶ。			
16							
17	第7章 3 小児難聴の指導・支援			小児難聴の指導と支援の観点を学ぶ。			
18							
19	第7章 3 小児難聴の指導・支援			小児期における選択と内容と条件を学ぶ。			
20							
21	第7章 3 小児難聴の指導・支援			難聴児の音声言語獲得上の課題等を学ぶ。			
22							
23	第7章 4 学校教育における指導と課題			聴覚障害児の学校教育について学ぶ。			
24							
25	第8章 6 視覚聴覚二重障害			盲ろう者が抱える課題などについて学ぶ			
26							
27	第8章 7 難聴を伴う重複障害			難聴を伴う重複障害児について学ぶ			
28							
29	第9章 聴覚障害にかかわる健診制度について			聴覚障害にかかわる健診制度について学ぶ			
30							

授業科目名	聴覚検査法Ⅱ		担当者名	小坂井秀行			
			実務経験	言語聴覚士として施設等での勤務経験あり			
教科書	聴覚検査の実際 改訂5版 (日本聴覚医学会)	単位数	学 科	学 年	学 期	科目種別	授業方法
		1					
	聴覚障害学 第3版 (医歯薬出版)	時間数	言語聴覚科	2	後期	必修	演習
		30					
授業概要	純音聴力検査に始まり他覚的聴力検査各種について、検査の目的、聴覚経路のどこを診ているのかを学ぶ。乳幼児から成人までの聴覚検査機器の操作方法について説明し、実際に学生同士で模擬検査を実施する。						
学習到達目標	言語聴覚士が行う聴力検査のために必要な知識を学び、検査機器の特性・機能について説明できる。実際に各種聴覚検査機器に触れ、基本的な操作をマスターする。						
評価方法	出席率と授業態度。定期試験で評価する。						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	1年次の復習:耳音響放射(OAE、EOAE、DPOAE、SOAE)と聴性誘発反応(蝸電図、聴性脳幹反応、聴性定常反応)			他覚的聴力検査について復習し、説明できる。			
2							
3	乳幼児聴力検査総論			検査の意義と目的、検査の特殊性について理解する。			
4							
5	聴性行動反応聴力検査			音に対する原始反射、その後の成長に伴う聴性反応検査を理解し、実施できる。			
6							
7	条件詮索反応聴力検査(COR)と遊戯聴力検査、語音聴力検査			検査の手順と検査結果の記録まで習得し、実施できる。			
8							
9	小児の他覚的聴力検査のまとめと新生児聴覚スクリーニング検査および乳幼児健康診査			小テストにて知識の確認			
10							
11	機能性難聴の検査			機能性難聴とは何か、心因性難聴の検査、詐聴とその診断について理解する。			
12							
13	後迷路障害の検査			検査方法と評価について説明できる。			
14							
15	耳鳴検査			ピッチ・マッチ検査、ラウドネス・バランス検査について説明できる。			
16							
17	補聴器装用のための検査1			補聴器の構造と種類、適応判定、選択、調整のための検査ができる。			
18							
19	補聴器装用のための検査2			不快・快適レベルの検査方法と補聴器適合検査について説明できる。			
20							
21	人工内耳のための検査			成人の場合、小児の場合それぞれについて理解し、説明できる。			
22							
23	純音聴力検査:気導・骨導についての検査を実施			気導・骨導検査を理解し、実施できる。			
24							
25	語音聴力検査を実施			語音聴力検査を理解し、実施できる。			
26							
27	自記オージオメトリー、閾値上聴力検査を実施			自記オージオメトリー、閾値上聴力検査を理解し、実施できる。			
28							
29	インピーダンス・オージオメトリー、耳小骨筋反射検査の実施			インピーダンス・オージオメータを操作、検査の目的を理解し、実施できる。			
30							

授業科目名	臨床実習Ⅱ		担当者名	熊谷美緒、眞柳みゆき、萱場文、島田真須美、小坂井秀行			
			実務経験	言語聴覚士、歯科医師として病院等での勤務経験あり			
教科書	適宜紹介する	単位数	学 科	学 年	学 期	科目種別	授業方法
		4					
		時間数	言語聴覚科	2	後期	必修	実習
		180					
授業概要	病院や福祉施設など実習施設において、言語聴覚士が臨床で実践する検査法を正しく用い、評価するための観察眼を養うことを目的とする。言語聴覚療法、摂食嚥下療法、小児発達支援などの実際に触れ、言語聴覚士のことば使い、態度、身のこなし、基本的スキルを習得する。実習前の校内での実習指導と実習後の個人面談での臨床実習指導者からの評価及び自己評価をもとに、今後の課題と目標を考察し、実習の総括とする。						
学習到達目標	言語聴覚士が行う検査を症例に応じて適切に選択、実施し、総合的な評価ができる。さらに評価内容をまとめ、的確に説明することができる。						
評価方法	実習先指導者による評価50%、実習前後の学内評価(準備・報告書等)50%。						
時数	授 業 内 容						
180時間	<p>〈実習期間〉 実習期間: 令和9年1月12日～2月8日</p> <p>〈実習の目的〉 学生が臨床場面に参加しながら言語聴覚療法を経験し、評価を行うことで、技能および考察能力を向上させる。医療チームの一員として言語聴覚士の仕事の実際を体験すること。</p> <p>〈評価実習の目標〉 (1) 適切な検査法を選択し、評価できる。 (2) 問題点を抽出し、リハビリテーションの目標を設定できる。 (3) 記録・報告を正確にできる。</p> <p>〈実習計画〉 (1) 実習施設は言語聴覚士が業務に従事している医療機関、社会福祉施設とする。 (2) 実習時間は指導する言語聴覚士の勤務時間に順じ、1日8時間とする。 (3) 実習施設での言語聴覚士の臨床場面やカンファレンスなどを見学する。 (4) 実習指導者の指導のもと、失語症検査あるいは構音検査などを適宜に実施する。 (5) 評価とエビデンスに基づいた訓練目標の設定を行い、その根拠を考察する。 (6) 毎日の実習日誌と指導者からの課題を提出し、指導を受ける。 (7) 実習期間終了後、実習報告書を提出する。</p>						

授業科目名	形成外科学		担当者名	今井啓道、今井利郎、眞柳みゆき、小坂井秀行			
			実務経験	医師、歯科医師、言語聴覚士として病院等での勤務経験あり			
教科書	標準形成外科学 第8版 (医学書院) 配布プリント	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
	時間数	言語聴覚科	3	通年	必修	講義	
	30						
授業概要	形成外科は、先天的あるいは後天的な体表の変形を手術的に正常な状態に復して、形態と機能、並びに精神的にもQOLを高め、社会復帰に益することを目標としている。本講義では、唇裂口蓋裂、頭頸部がん、開口障害をきたし得る外傷や熱傷、骨折、疾患による顎顔面変形など、治療対象疾患についての診断、治療原理や術式について学んでいく。						
学習到達目標	形成外科の扱う疾患について説明できる。特に頭頸部がんの治療における適切な再建手術について説明できる、口唇裂・口蓋裂について起こりえる障害を説明でき、成長期までに必要な手術について順次説明することが出来る。口蓋裂を呈する先天性疾患を挙げ、その特徴を説明することが出来る						
評価方法	筆記試験80点、受講態度(平常点)20点の合計100点満点で評価を行う						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	形成外科総論① どんな診療科？(皮弁・植皮・組織移植)			形成外科の特色を理解する			
2	形成外科総論② 創傷治癒と縫合(ケロイド・肥厚性瘢痕含む)			創傷治癒過程について理解し、ケロイドと肥厚性瘢痕の違いを説明できる			
3	唇裂口蓋裂① 唇顎口蓋裂総論(病態、解剖、疫学、発生学)			唇顎口蓋裂という疾患を知り、疫学的特徴・口唇口蓋の発生を説明できる			
4	唇裂口蓋裂② 乳幼児期に行われる治療 (唇裂手術、口蓋裂手術)			口唇裂手術、口蓋裂手術を区別できる。口蓋裂手術の目的を説明できる。			
5	唇裂口蓋裂③ 学童期に行われる治療 (鼻咽腔閉鎖不全、顎裂部骨移植、歯科矯正と言語治療)			鼻咽腔不全の治療法を説明できる。顎裂部骨移植の目的を説明できる。			
6	唇裂口蓋裂④ 青年期に行われる治療 (顎矯正手術、口唇鼻修正手術)			顎矯正手術について説明できる。口唇や鼻の変形の修正術を知る。			
7	口蓋裂を有する他の先天性頭蓋顎顔面疾患(頭蓋顎顔面外科)			口蓋裂を有する様々な症候群について名前と疾患の特徴を理解する。			
8	手や体幹の先天性疾患			手や体幹の先天性疾患について知る			
9	母斑・脈管形成異常(血管腫など)			血管腫について知る			
10	言語の問題をきたす後天性疾患(顔面外傷や顔面神経麻痺、変性疾患など)			顔面外傷などの後天的理由で言語の問題を来す可能性がある病態を知る。			
11	熱傷・難治性潰瘍・褥瘡(床ずれ)			熱傷の深さや予後を説明できる。床ずれなど治りにくいキズについて知る。			
12	頭頸部再建①癌総論(癌治療の基礎知識、頭頸部再建の基本)			頭頸部にできる悪性腫瘍について知り、その治療法の基本を説明できる。			
13	頭頸部再建②(口腔・中咽頭の再建)			舌癌など口腔内のがんについて、治療法と音声言語への影響を説明できる。			
14	頭頸部再建③(下咽頭その他の再建)			下咽頭がんの治療法について説明でき、音声言語への影響を説明できる。			
15	乳房再建手術・四肢の再建			乳がん術後や四肢の腫瘍、外傷により失われた組織の再建について知る。			

16	唇顎口蓋裂に関する手術法について	解剖・分類について復習し、各症例に適した手術法を知る
17		
18		
19	唇顎口蓋裂の口腔発達に及ぼす影響	口腔発達に及ぼす影響を知る(歯数不足・歯列不正・顎劣成長等)
20		
21	唇顎口蓋裂の成長期に応じた治療ケアの目安及び口腔発達をサポートするポイント	唇顎口蓋裂患者の口腔機能発達について知る
22		
23	頭頸部再建術時の各種皮弁について	皮弁の種類を知り頭頸部再建術を復習する
24		
25	口唇口蓋裂に伴う摂食障害について	口唇口蓋裂に伴う摂食障害について詳しく知る
26		
27	口唇口蓋裂に伴う構音障害について	口唇口蓋裂に伴う構音障害について詳しく知る
28		
29	まとめ	小テスト
30		

授業科目名	関係法規		担当者名	萱場 文			
			実務経験				
教科書	教科書は使用しない 配布資料	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	3	後期	必修	講義
		30					
授業概要	医療分野に従事する専門職として必要な法的知識を学ぶ、安全で適切な医療提供を行うための基盤を形成する。						
学習到達目標	<ul style="list-style-type: none"> 法の基本概念を説明できる。 医療関連法規の概要を説明できる。 						
評価方法	試験及び課題提出等から、総合的に判断する。						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	法とはなにか			法の種類、条文の読み方、法律用語について学ぶ。			
2							
3	医療職に関する法律①			医師法、保健師助産師看護師法、その他関連職種の法律の概要について知る。			
4							
5	言語聴覚士法について			業務、免許など言語聴覚士に関わる法律について学ぶ。			
6							
7	医療制度と倫理			医療法、臓器移植法、インフォームドコンセントについて学ぶ。			
8							
9	地域保健と健康増進			地域保健法、健康増進法について学ぶ。			
10							
11	感染症と公衆衛生			感染症法、予防接種法について学ぶ			
12							
13	医薬品と安全管理			医薬品、医療機器等の品質、有効性及び安全性の確保に関する法律、麻薬、覚せい剤に関する法律について学ぶ。			
14							
15	障害者福祉に関すること			障害者福祉に関連する法律を学ぶ。			
16							
17	児童・高齢者福祉に関すること			児童・高齢者福祉に関する法律を学ぶ			
18							
19	労働に関する法律			雇用保険法、労働者災害保険法、労働基準法、労働者の福祉に関する法律について学ぶ。			
20							
21	教育に関連する法律			学校教育法、学校保健安全法について知る。			
22							
23	環境に関連する法律			環境基本法など、生活に関わる法律について学ぶ。			
24							
25	その他医療に関連する法律			個人情報、守秘義務、著作権に関する法律を学ぶ。			
26							
27	医療事故が起きた時の責任			民事上、刑事上、行政上の責任について学ぶ。			
28							
29	関係法規の復習			関係法規の総まとめをする。			
30							

授業科目名	言語聴覚障害診断学Ⅱ		担当者名	島田真須美			
			実務経験	言語聴覚士として施設等での勤務経験あり			
教科書	言語聴覚療法 評価・診断学 第3版 深浦順一、植田恵 編 医学書院 2023 言語聴覚障害診断-成人編 改訂第2版 大塚裕一 著 診断と治療社 2024	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		1					
		時間数	言語聴覚科	3	前期	必修	演習
		30					
授業概要	事例を通して、言語聴覚療法における評価、診断およびリハビリテーションの方法を学ぶ。						
学習到達目標	言語聴覚障害における問題点を整理し、リハビリテーションプログラムを立案・実施することができる。						
評価方法	試験及び課題提出等から、総合的に判断する。						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	評価・診断の基本概念			評価・診断の基本概念について理解できる。			
2							
3	発症経過ごとの評価			発症経過ごとの評価について説明できる。			
4							
5	対象者観察の方法			対象者を観察する視点を身につける。			
6							
7	観察レポートの書き方			観察レポートの書き方を実践する。			
8							
9	対象者の観察レポート①			観察レポートを作成する。			
10							
11							
12	対象者の観察レポート②						
13	リハビリテーションプログラムの立案①			観察、評価の結果に基づいて、リハビリテーションプログラムを作成する。			
14							
15							
16	リハビリテーションプログラムの立案②						
17	リハビリテーションプログラムの立案③			報告書の書き方について理解する。			
18							
19	報告書の書き方			報告書の書き方について理解する。			
20							
21	対象者の報告書①			示された事例について報告書を作成する。			
22							
23							
24	対象者の報告書②						
25	摂食嚥下障害の観察・評価①			摂食嚥下障害の観察、評価方法を理解する。			
26							
27	対象者の報告書③			想定した報告先を考慮して報告書を作成する。			
28							
29	摂食嚥下障害の観察・評価②			摂食嚥下障害の観察、評価方法を理解する。			
30							

授業科目名	失語症Ⅲ		担当者名	萱場 文			
			実務経験	言語聴覚士として病院等での勤務経験あり			
教科書	失語症 臨床標準テキスト (医歯薬出版株式会社)	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
	配布資料	時間数	言語聴覚科	3	通年	必修	講義
		30					
授業概要	<ul style="list-style-type: none"> 失語症の評価から治療計画立案のプロセスと失語症訓練の基盤となっている失語症の治療理論を学習する。 重症度、失語症タイプ、発症時期に合わせた訓練計画の手法を学ぶ。 失語症の理論、症状、評価、訓練についての総復習を行う。 						
学習到達目標	<ul style="list-style-type: none"> 失語症の治療理論に基づいた治療計画を立案できる。 治療計画に基づき、訓練を実施できる。 失語症の理論、症状、評価、訓練について理解し、実践に役立てることができるようになる。 						
評価方法	レポート、課題、試験などの結果で総合的に判断します。学習態度を考慮に入れることがあります。						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	問診 スクリーニング			臨床場面での問診、スクリーニングを実践できる。			
2	総合検査、掘り下げ検査 他の検査			失語症者に対する検査を選択できる。			
3	失語症セラピーの理論 言語モダリティ別成績に基づく訓練法			失語症の治療理論の知識を獲得できる。			
4	語彙・意味の訓練			失語症の語彙・意味の訓練の技法を獲得する。			
5	音韻訓練 発話動作・構音の訓練			失語症の音韻訓練 発話動作・構音の訓練の技法を獲得する。			
6	文・統語の訓練 実用的コミュニケーション訓練			文・統語の訓練 実用的コミュニケーション訓練の技法を獲得する。			
7	ブローカ失語の訓練の実際(1)			ブローカ失語の模擬症例に対して目標、訓練の立案をICFに基づいて計画できる。			
8	ブローカ失語の訓練の実際(2)			計画したものを発表する。			
9	ウエルニッケ失語の訓練の実際(1)			ウエルニッケ失語の模擬症例に対して目標、訓練の立案をICFに基づいて計画できる			
10	ウエルニッケ失語の訓練の実際(2)			計画したものを発表する。			
11	失語症の症状(発話面)			失語症(発話面)の症状を説明できる。			
12	失語症の症状(理解面)			失語症(理解面)の症状を説明できる。			
13	古典型失語症候群			古典型失語症候群の分類を説明できる。			
14	失語症の病巣			失語症の病巣について説明できる。			
15	純粋型 非定型失語群			純粋型 非定型失語群について説明できる。			
16	原発性進行性失語			原発性進行性失語について説明できる。			
17	読字の障害(表層失読、深層失読、音韻失読)			表層失読・深層失読・音韻失読を説明できる、			
18	言語症状の分析モデル(聴覚理解過程)			言語症状の分析モデル(聴覚理解過程)を理解し、理論を応用できる。			
19	言語症状の分析モデル(単語読解過程)			言語症状の分析モデル(単語読解過程)を理解し、理論を応用できる。			
20	言語症状の分析モデル(発話表出過程)			言語症状の分析モデル(発話表出過程)を理解し、理論を応用できる。			
21	言語症状の分析モデル(書字過程)			言語症状の分析モデル(書字過程)を理解し、理論を応用できるようにする。			
22	言語症状の分析モデルのまとめ			言語症状の分析モデルについて理解し、症状分析に使用できる。			

23	スクリーニング検査 総合検査 特定の側面の検査 その他	スクリーニング検査、総合検査、特定の側面の検査、その他の検査について確認し、臨床で使えるようにする。
24	高次脳機能障害の関与と把握	主な高次脳機能検査の内容について知識を獲得する。
25	失語症セラピーの理論の確認	失語症セラピーの理論の知識を深め、その内容を述べるようになる。
26	失語症セラピーの実際 言語モダリティ別成績に基づく訓練法	言語モダリティ別成績に基づく訓練法についての理論、具体例について述べるができる。
27	失語症セラピーの実際 語彙・意味の訓練 音韻の訓練	語彙・意味の訓練、音韻の訓練の実際について具体例を含めて述べるができる。
28	失語症セラピーの実際 読字・書字の訓練 文・統語の訓練	読字・書字の訓練、文・統語の訓練の実際について具体例を含めて述べるができる。
29	実用的コミュニケーション訓練	実用的コミュニケーション訓練の実際について具体例を含めて述べるができる。
30	失語症の知識の総まとめ	失語症の知識・評価・訓練技法を身につける。

授業科目名	高次脳機能障害Ⅲ		担当者名	島田真須美			
			実務経験	言語聴覚士として施設等での勤務経験あり			
教科書	高次脳機能障害学 第3版 石合純夫 著 医歯薬出版株式会社 2023	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		1					
		時間数	言語聴覚科	3	通年	必修	演習
		30					
授業概要	高次脳機能障害の事例を通して、評価、診断およびリハビリテーションの方法を学ぶ。						
学習到達目標	高次脳機能障害の問題点を整理し、リハビリテーションプログラムを立案・実施することができる。						
評価方法	授業態度、期末試験から総合的に評価する。						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	高次脳機能障害の評価・診断・リハビリテーションに関する導入活動			高次脳機能障害の評価・診断・リハビリテーションの予備知識を確認する			
2							
3	失行と関連症状の評価・診断・リハビリテーション			失行と関連症状の評価・診断・リハビリテーションプログラムの立案ができる			
4							
5	行為・動作の障害の評価・診断・リハビリテーション			行為・動作の障害の評価・診断・リハビリテーションプログラムの立案ができる			
6							
7	失認と関連症状の評価・診断・リハビリテーション			失認と関連症状の評価・診断・リハビリテーションプログラムの立案ができる			
8							
9	空間性障害の評価・診断・リハビリテーション			空間性障害の評価・診断・リハビリテーションプログラムの立案ができる			
10							
11	脳梁離断症状(半球離断症候群)の評価・診断・リハビリテーション			脳梁離断症状の評価・診断・リハビリテーションプログラムの立案ができる			
12							
13	注意障害の評価・診断・リハビリテーション			注意障害の評価・診断・リハビリテーションプログラムの立案ができる			
14							
15	記憶障害の評価・診断・リハビリテーション			記憶障害の評価・診断・リハビリテーションプログラムの立案ができる			
16							
17	遂行機能障害の評価・診断・リハビリテーション			遂行機能障害の評価・診断・リハビリテーションプログラムの立案ができる			
18							
19	認知症の評価・診断・リハビリテーション①			認知症の評価・診断・リハビリテーションプログラムの立案ができる			
20							
21	認知症の評価・診断・リハビリテーション②			認知症のの評価・診断・リハビリテーションプログラムの立案ができる			
22							
23	外傷性脳損傷の評価・診断・リハビリテーション			外傷性脳損傷による高次脳機能障害の評価・診断・リハビリテーションプログラムの立案ができる			
24							
25	認知コミュニケーション障害の評価・診断・リハビリテーション①			認知コミュニケーション障害の評価・診断・リハビリテーションプログラムの立案ができる			
26							
27	認知コミュニケーション障害の評価・診断・リハビリテーション②			認知コミュニケーション障害の評価・診断・リハビリテーションプログラムの立案ができる			
28							
29	まとめ			全体を振り返り、高次脳機能障害の評価・診断・リハビリテーションプログラムの立案ができる			
30							

授業科目名	言語発達障害V (学習障害を含む)		担当者名	熊谷美緒			
			実務経験	言語聴覚士として療育施設等での勤務経験あり			
教科書	・標準言語聴覚障害学 言語発達障害学第3版/医学書院 ・言語聴覚士ドリルプラス言語発達障害/診断と治療者	単位数	学科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	3	通年	必修	講義
		30					
授業概要	前半では、各種検査法やアプローチ法の具体的な内容に触れる。 後半は、これまで言語発達障害Ⅰ～Ⅳで触れてきた内容の復習をおこなう。						
学習到達目標	①小児の評価に必要な検査の特徴を理解し、説明できる。 ②言語発達障害の病態、関連する主要な障害の種類と疾患、評価方法、指導・支援方法などについて説明できる。						
評価方法	試験及び課題提出等から、総合的に判断する。						
時数	授業内容			到達目標・学習課題など			
1	コミュニケーション検査①M-CHAT			左記検査法の概要を理解し、説明できる			
2	コミュニケーション検査②CARS2			左記検査法の概要を理解し、説明できる			
3	コミュニケーション検査③PEP-3			左記検査法の概要を理解し、説明できる			
4	コミュニケーション検査④FOSCOM			左記検査法の概要を理解し、説明できる			
5	コミュニケーション検査⑤心の理論検査			左記検査法の概要を理解し、説明できる			
6	コミュニケーション検査⑥その他			左記検査法の概要を理解し、説明できる			
7	働きかけの諸技法①SS法、語用論アプローチ			左記アプローチ方法の概要を理解し、説明できる。			
8							
9	働きかけの諸技法②AAC、マカトン			左記アプローチ方法の概要を理解し、説明できる。			
10							
11	働きかけの諸技法③SST			左記アプローチ方法の概要を理解し、説明できる。			
12							
13	評価から支援目標を考える			事例をもとに、評価から支援まで言語聴覚療法の一連の流れを検討する。			
14							
15	中間まとめ						
16	言語発達障害の歴史			左記の内容について理解し説明できる。			
17	言語発達障害の基礎①定義、前言語期及び語彙獲得期の特徴			左記の内容について理解し説明できる。			
18	言語発達障害の基礎②幼児期及び学齢期の特徴			左記の内容について理解し説明できる。			
19	言語発達障害の基礎③知的障害、自閉症スペクトラム障害			左記の内容について理解し説明できる。			
20	言語発達障害の基礎④特異的言語発達障害、学習障害			左記の内容について理解し説明できる。			
21	言語発達障害の基礎⑤ADHD、脳性麻痺・重複障害			左記の内容について理解し説明できる。			
22	言語発達障害の臨床①発達検査			左記の内容について理解し説明できる。			
23	言語発達障害の臨床②知能検査			左記の内容について理解し説明できる。			
24	言語発達障害の臨床③言語発達検査、その他の発達に関する検査			左記の内容について理解し説明できる。			
25	言語発達障害の臨床④言語発達段階に即した支援			左記の内容について理解し説明できる。			
26	言語発達障害の臨床⑤障害別の支援(1)			左記の内容について理解し説明できる。			
27	言語発達障害の臨床⑥障害別の支援(2)			左記の内容について理解し説明できる。			
28	言語発達障害の臨床⑦支援技法			左記の内容について理解し説明できる。			
29	言語発達障害の環境調整①障害の早期発見、特別支援教育			左記の内容について理解し説明できる。			
30	言語発達障害の環境調整②家族支援、地域支援			左記の内容について理解し説明できる。			

授業科目名	音声障害		担当者名	佐藤剛史			
			実務経験	言語聴覚士として病院等での勤務経験あり			
教科書	クリア言語聴覚療法 音声障害 石毛美代子編 建帛社 配布資料 (スライド)	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	3	通年	必修	講義
		30					
授業概要	講義と演習を通して、音声障害の診断、評価、治療(外科的治療、薬物療法、音声治療)について学習する。また気管カニューレや気管切開患者への対応および無喉頭音声について学ぶ。						
学習到達目標	発声の基礎となる呼吸及び喉頭の解剖と生理、発声メカニズムについて理解する。患者の病態から音声障害が生じている原因について理論的に説明を行える。治療法の選択、音声治療のアプローチ方法を考察できるようにする。						
評価方法	筆記試験・レポート						
時数	授 業 内 容		到達目標・学習課題など				
1	声の特性・喉頭の解剖1)		声の特性と喉頭の解剖を理解する				
2	声の特性・喉頭の解剖2)						
3	発声と呼吸の仕組み1)		発声に必要な呼吸の仕組み、喉頭・声帯・発声のメカニズムを理解する				
4	発声と呼吸の仕組み2)						
5	音声障害の評価と診断1)		喉頭所見の評価、音声評価、筋電図等のその他の検査法について理解する				
6	音声障害の評価と診断2)						
7	音声障害の評価と診断3)						
8	音声障害の評価と診断4)						
9	音声障害の原因となる疾患と音声障害の分類1)		音声障害の分類と原因となる疾患(器質的、機能的、運動障害)について理解する				
10	音声障害の原因となる疾患と音声障害の分類2)						
11	音声障害の原因となる疾患と音声障害の分類3)						
12	音声障害の原因となる疾患と音声障害の分類4)						
13	音声障害の治療 音声外科と薬物療法1)		音声障害に対する外科的治療と薬物療法を理解する				
14	音声障害の治療 音声外科と薬物療法2)						
15	音声治療の実際1)		音声治療の適応や終了基準、種類等、基礎的なことを理解する				
16	音声治療の実際2)						
17	音声治療-間接訓練1)		声の衛生指導について理解する				
18	音声治療-間接訓練2)						
19	音声治療-直接訓練1)		さまざまな音声治療手技の目的や内容、実際の方法について理解する。				
20	音声治療-直接訓練2)						
21	音声治療-直接訓練3)						
22	音声治療-直接訓練4)						
23	音声治療-直接訓練5)						
24	音声治療-直接訓練6)						
25	音声治療-直接訓練7)						
26	音声治療-直接訓練8)						
27	無喉頭音声・気管切開患者への対応1)		無喉頭音声の種類や特徴、気管切開患者への対応について理解する				
28	無喉頭音声・気管切開患者への対応2)						
29	病態から考える音声治療1)		症例を通して、評価、治療立案までを検討する				
30	病態から考える音声治療2)						

授業科目名	運動性構音障害Ⅲ		担当者名	佐々木貴行			
			実務経験	言語聴覚士として病院等での勤務経験あり			
教科書	「言語聴覚士のための運動障害性構音障害学」廣瀬肇他著 医歯薬出版 配布資料(プリント)	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	3	後期	必修	講義
		30					
授業概要	運動障害性構音障害Ⅱで学んだ内容をもとに評価・訓練の具体的な方法を深めていく。正常と異常を疾患や音声、発話明瞭度、発話自然度を通して判断し、治療方針を考察する力を高めていく。また、実習に必要な実践的な視点を学んでいく。						
学習到達目標	運動障害性構音障害をタイプ別に特徴を理解し、応用的な評価・訓練方法を習得し説明できる。評価方法(AMSDやSLTA-ST)の実践と病態に応じた検査結果について解釈し、治療方針を考案、実践できる。						
評価方法	出席、授業態度、レポート、筆記試験を総合評価						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	運動障害性構音障害Ⅱの復習			前年度の学習の振り返り			
2							
3	スクリーニングの基礎1			ディサースリアの評価に付随したスクリーニングを理解する			
4							
5	スクリーニングの基礎2			ディサースリアの評価に付随したスクリーニングを説明できる			
6							
7	調音音声学的な評価 1			音声学の視点からの記述を理解する			
8							
9	調音音声学的な評価 2			音声学の視点からの評価を説明できる			
10							
11	調音音声学的な評価 3			音声学の視点からの対応を考案できる			
12							
13	標準検査の結果を深く掘り下げる 1			柔軟なアセスメントができる			
14							
13	標準検査の結果を深く掘り下げる 2			アセスメントからプログラムを考案する			
14							
15	標準検査の結果を深く掘り下げる 3			訓練内容を病態に応じて検討できる			
16							
17	実際の治療とリハビリテーションについて			リハビリテーションの流れを理解する			
18							
19	ディサースリアに対する代償的手段			多様なコミュニケーション手段を理解する			
20							
19	機能訓練の手技について1			機能訓練の手技を理解する			
20							
21	機能訓練の手技について2			機能訓練の手技を実践できる			
22							
27	ディサースリアと嚥下障害について			ディサースリアと嚥下障害の関連を理解する			
28							
29	ディサースリアと試験問題について			国家試験の問題をとおして理解を深める			
30							

授業科目名	摂食嚥下障害Ⅲ		担当者名	萱場 文			
			実務経験	言語聴覚士として病院等での勤務経験あり			
教科書	摂食嚥下障害学 医学書院 配布資料	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	3	通年	必修	講義
		30					
授業概要	摂食・嚥下機能に関連する解剖やメカニズムなどの基礎的理論を正しく理解する。また、摂食・嚥下リハビリテーションに基礎知識を習得し、実際に機能訓練法、手術的治療など総合的に学習する。						
学習到達目標	摂食嚥下機能ⅠⅡの内容を基礎として摂食機能障害学全般の知識の獲得をめざす。						
評価方法	課題、試験の結果などで総合的に判断する。学習意欲を考慮することがある。						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	導入			摂食嚥下障害の概略(定義・仕組み・期)について学ぶ。			
2	摂食嚥下の評価(問診・スクリーニング検査)			問診、スクリーニング検査について学ぶ。			
3	嚥下造影			嚥下造影の見方について学ぶ。			
4	嚥下内視鏡			嚥下内視鏡の見方について学ぶ。			
5	成人の治療・訓練(間接訓練)			間接訓練の内容について学ぶ。			
6	成人の治療・訓練(直接訓練)			直接訓練の実際について学ぶ。			
7	訓練を組み立てる(VF画像)			症例から訓練を組み立てる(VF画像あり)。			
8							
9	訓練を組み立てる(VE画像)			症例から訓練を組み立てる(VE画像あり)。			
10							
11	摂食嚥下障害の発症メカニズム			嚥下器官の解剖整理 病態と症状について学ぶ。			
12							
13	摂食嚥下の神経・筋機構			摂食嚥下の神経・筋機構について学ぶ。			
14							
15	摂食嚥下障害 病態と症状①			摂食嚥下障害 病態と症状 について学ぶ。			
16							
17	摂食嚥下障害 病態と症状②			検査・評価(スクリーニング VF VE)について学ぶ。			
18							
19	検査・評価(スクリーニング VF VE)について			検査・評価(スクリーニング VF VE)について学ぶ。			
20							
21	検査・評価(総合)			様々な嚥下機能の検査・評価について学ぶ。			
22							
23	治療・訓練①			間接訓練・直接訓練の手法について学ぶ。			
24							
25	治療・訓練②			間接訓練・直接訓練の手法について学ぶ。			
26							
27	手術的治療			摂食嚥下障害に関わる手術的治療について学ぶ。			
28							
29	気管切開 代替栄養法			気管切開 代替栄養について学ぶ。			
30	まとめ			これまで学習したことを確認する。			

授業科目名	聴覚障害Ⅲ		担当者名	小坂井秀行			
			実務経験	言語聴覚士として施設等での勤務経験あり			
教科書	聴覚障害学(第3版)医学書院	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	3	後期	必修	講義
		30					
授業概要	聴覚障害があるために生きにくい世の中になっているならば、言語聴覚士はその原因をつきとめ、改善させる役割を担わなければならない。そこに対応していくためには、小児から高齢者に至るまでの障害像、意思疎通のための様々な方略、社会資源などに精通していなければならない。本講義では1, 2年生時に学んだ聴覚障害学のみならず聴覚障害を総合的に支援する言語聴覚士のあり方を学ぶ。						
学習到達目標	聴覚障害の病態、症状への評価・支援計画の立案から保険制度の適応など、聴覚障害への総合的なリハビリテーション支援方略を学び、現場での実践に生かせるようになること。						
評価方法	定期試験、授業態度等総合的に評価する。						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	小児難聴のハビリテーション1, 2年次の復習Ⅰ			小児難聴の聴覚評価、コミュニケーション発達評価、言語評価、発声発語評価まで説明できる。			
2							
3	小児難聴のハビリテーション1, 2年次の復習Ⅱ			ハビリテーションプログラムの立案、言発達段階における指導方法を説明できる。			
4							
5	特異的な聴覚障害Ⅰ			一側性難聴、中枢性難聴、ANSD、聴覚情報処理障害、機能性難聴を理解し、説明できる。			
6							
7	視覚聴覚二重障害の復習			支援の留意点について説明できる。難聴を伴う重複障害の検査・評価について説明できる。			
8							
9	情報保障と社会資源			情報保障の概念、人的・物的資源について説明できる。社会制度について説明できる。			
10							
11	グループワーク 症例1(小児聴覚障害例)			聴覚スクリーニング・各種検査～評価、支援プログラム立案までを考える。			
12							
13	グループワーク 症例2(小児聴覚障害例)			聴覚スクリーニング・各種検査～評価、支援プログラム立案までを考える。			
14							
15	グループワーク 症例3(成人・中途障害例)			聴覚スクリーニング・各種検査～評価、支援プログラム立案までを考える。			
16							
17	グループワーク 症例4(成人・中途障害例)			聴覚スクリーニング・各種検査～評価、支援プログラム立案までを考える。			
18							
19	グループワーク 症例5(高齢者障害例)			聴覚スクリーニング・各種検査～評価、支援プログラム立案までを考える。			
20							
21	グループワーク 症例6(認知症と加齢性難聴)			加齢による聴力低下と認知症との関係について説明できる。			
22							
23	手話通訳者とノートテイク等の社会資源と聴覚障害			社会的資源(ボランティア)の活用について理解する。			
24							
25	フレイルサイクルにおける聴覚機能の低下の影響			フレイル予防における言語聴覚士の役割を理解し、説明できる。			
26							
27	トータル・コミュニケーションの考え方			トータルコミュニケーションにおける言語聴覚士の支援のあり方を説明できる。			
28							
29	聴覚障害Ⅰ・Ⅱ・Ⅲのまとめ			聴覚障害に関する小テスト			
30							

授業科目名	補聴器・人工内耳		担当者名	米澤裕美・小坂井秀行			
			実務経験	言語聴覚士として病院等での勤務経験あり			
教科書	聴覚障害学(第3版)医学書院	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
	時間数	言語聴覚科	3	前期	必修	講義	
							30
授業概要	①聴覚補償機器としての補聴器の構造と機能を学び、調整法とその後の支援に対するSTの役割を学ぶ。 ②人工聴覚器の種類と構造、機能からプログラミングの概要を学ぶ。③補聴援助システムの種類と特徴を学ぶ。						
学習到達目標	・聴覚障害の程度に合わせて、補聴器の適応・調整の実際を理解し、説明できる。 ・人工内耳の適応、プログラミングの実際を学び、説明できる。						
評価方法	定期試験の結果、授業態度等で総合的に評価する。						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	補聴器の形状と特徴			補聴器の構造、種類、特徴について説明できる。			
2							
3	補聴器の調整機能			補聴器の調整方法について説明できる。			
4							
5	補聴器の特性測定			補聴器の特性を理解し、測定装置による測定結果から補聴器調整を行う。			
6							
7	リニア補聴器とノンリニア補聴器～デジタル補聴器			ノンリニア増幅とリニア増幅の違いを理解し、説明できる。			
8							
9	成人の補聴器適合の理論と実際			試聴から補聴器フィッティング装用指導までを説明できる。			
10							
11	小児の補聴器適合と装用指導			補聴器適応のための検査、家族への助言、試聴、支援の継続を順に説明できる。			
12							
13	補聴器のまとめ			小テスト			
14							
15	骨固定型補聴器			骨固定型補聴器の半植え込み型及び全植え込み型について適応・機能について説明できる。			
16							
17	人工中耳			人工中耳の原理と構造、機能について説明できる。			
18							
19	人工内耳①			人工内耳の適合の理論と実際			
20							
21	人工内耳②			人工内耳のマッピングとは？理解し、説明できる。			
22							
23	人工内耳③			小児期の人工内耳マッピングについて、成人期との違いを理解し、説明できる。			
24							
25	人工内耳④			両側人工内耳の留意点、音入れ～保護者へのアドバイスについて説明できる。			
26							
27	補聴援助システム			聴覚を活用した補聴援助システムについて理解し、説明できる。			
28							
29	補聴器・人工内耳のまとめ			小テストで知識の確認を行う。			
30							

授業科目名	臨床実習Ⅲ		担当者名	熊谷美緒、眞柳みゆき、萱場文、 島田真須美、小坂井秀行			
			実務経験	言語聴覚士、歯科医師として病院等での 勤務経験あり			
教科書	適宜紹介する	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		8					
		時間数	言語聴覚科	3	前期	必修	実習
		360					
授業概要	病院や福祉施設など実習施設において、言語聴覚士が臨床で実践する検査法を正しく用い、評価するための観察眼を養うことを目的とする。言語聴覚療法、摂食嚥下療法、小児発達支援などの実際に触れ、言語聴覚士のことば使い、態度、身のこなし、基本的スキルを習得する。実習前の校内での実習指導と実習後の個人面談での臨床実習指導者からの評価及び自己評価をもとに、今後の課題と目標を考察し、実習の総括とする。						
学習到達目標	言語聴覚士が行う検査を症例に応じて適切に選択、実施し、総合的な評価ができ、リハビリプランの立案から各種リハビリ施行、そして再評価までをできるようにする。						
評価方法	実習先指導者による評価50%、実習前後の学内評価(準備・報告書等)50%。						
時数	授 業 内 容						
360時間	<p>〈実習期間〉 実習期間: 令和8年7月6日～9月1日</p> <p>〈実習の目的〉 学生が臨床場面に参加しながら言語聴覚療法を経験し、評価・訓練を行うことで、技能および考察能力を向上させる。 医療チームの一員として言語聴覚士の仕事の実際を体験すること。</p> <p>〈実習の目標〉 (1)適切な検査法を選択し、評価できる。 (2)問題点を抽出し、リハビリテーションの目標を設定し、プランを立案することができる。 (3)プランに従ったリハビリテーションを施行し、結果に対する再評価を行うことができる。</p> <p>〈実習計画〉 (1)実習施設は言語聴覚士が業務に従事している医療機関、社会福祉施設とする。 (2)実習時間は指導する言語聴覚士の勤務時間に順じ、1日8時間とする。 (3)実習施設での言語聴覚士の臨床場面やカンファレンスなどを見学する。 (4)実習指導者の指導のもと、失語症検査あるいは構音検査などを適宜に実施する。 (5)評価とエビデンスに基づいた訓練プランを立案する。 (6)訓練の結果から再評価を行い、可能な範囲で問題点を修正し訓練プランを修正する。 (7)毎日の実習日誌と指導者からの課題を提出し、指導を受ける。 (8)実習期間終了後、実習報告書を提出する。</p>						

授業科目名	地域言語聴覚療法学		担当者名	小坂井秀行／津田沙和			
			実務経験	言語聴覚士として病院等での勤務経験あり			
教科書	・地域言語聴覚療法 編著 内山千鶴子 黒川容輔、黒羽真美 (建帛社)	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	3	通年	必修	講義
		30					
授業概要	地域社会における障害児・者や高齢者への支援、福祉制度や多職種連携などを学ぶ。言語聴覚士の支援の実例を通して地域言語聴覚療法について具体的にイメージできるよう実施する。						
学習到達目標	地域言語聴覚療法の基本的な概念を理解する。各種制度について整理できる。各ライフステージ事のかかわりの原則や支援方法について比較し説明できる。						
評価方法	出席率と授業態度。定期試験にて評価する。						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	地域リハビリテーションの概要			地域リハの歴史的・社会的背景を理解し、基本概念を理解し、説明できる。			
2							
3	地域言語聴覚療法における言語聴覚士の役割			ICFと地域における言語聴覚士の役割と地域包括ケアシステムを説明できる。			
4							
5	地域言語聴覚療法の対象者と関わり方			介護予防の視点を持ち、難病・障害さらに終末期まで包括的に考えることができる。			
6							
7	地域における連携の原則			地域における多職種連携の方法について理解し、説明できる。			
8							
9	地域言語聴覚療法にかかわる法制度			福祉制度の概要、制度における言語聴覚士の位置づけ、小児ケアまでを説明できる。			
10							
11	発達・教育関連制度の概要			教育関連における言語聴覚士の役割、発達障害者支援法について理解する。			
12							
13	医療保険制度と介護保険制度			各保険制度における言語聴覚士の仕事と役割を理解し、説明できる。			
14							
15	地域言語聴覚療法学におけるインフォーマル支援			インフォーマル支援について説明できる。			
16							
17	退院から在宅生活再建への支援			在宅生活支援の要点を理解し、説明できる。			
18							
19	復職・就労と社会参加			復職・就労における言語聴覚士の役割と関連職種について理解し、説明できる。			
20							
21	終末期のかかわり 地域支援体制づくりへの参画			終末期のかかわりかたについて理解する。地域ケア会議、意思疎通支援授業について理解し、説明できる。			
22							
23	妊娠から乳幼児期の制度・支援の原則・プロセス			言語聴覚士が知っておくべき制度や検査について理解し、説明できる。			
24							
25	幼児期の制度・支援の原則・プロセス			児童発達支援の流れと言語聴覚士のかかわり方について理解し、説明できる。			
26							
27	学童期の制度・支援の原則・プロセス			多職種連携について説明できる。言語聴覚士の支援について理解する。			
28							
29	青年期・成人期の制度・支援の原則・プロセス			就労までのプロセスについて理解し、説明できる。			
30							
30	授業の要点復習			授業の要点を理解する。			

授業科目名	解剖学実習		担当者名	眞柳みゆき			
			実務経験	歯科医師として病院等での勤務経験あり			
教科書	発生発語・摂食嚥下の解剖 ・生理学	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		1					
	言語聴覚士のための解剖 ・生理学	時間数	言語聴覚科	3	前期	必修	実習
		45					
授業概要	人体の構造・仕組みを学ぶ。言語聴覚士にとって重要な頭頸部については、特に理解を深める。また、解剖実習の根幹である献体制度を理解する。						
学習到達目標	人体の複雑な構造について、各組織がどのように結びついて機能しているかを理解する。解剖学的用語を覚える。						
評価方法	実習態度・レポート・期末試験の結果で評価する。						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	解剖学実習(観察・見学)についての説明			解剖学実習(観察・見学)について、その概要(御献体、白菊会等を含めて)を理解する			
2							
3							
4	骨学①			体幹・上肢・下肢を構成している骨を学ぶ			
5							
6							
7	骨学②			頭頸部を構成している骨、また、孔について学ぶ			
8							
9							
10	復習・小テスト			小テスト(筆記・口頭試問)			
11							
12							
13	頭頸部・脳・口腔の構造について			頭頸部の器官・骨・筋・神経・脈管について模型等を利用して学ぶ			
14							
15							
16							
17							
18							
19	実習前指導			実習時の服装・持ち物等について理解する			
20							
21							
22	解剖実習(観察実習)			御献体を用いて、実際に人体(頭頸部・脳を中心に)を観察する			
23							
24							
25	解剖実習後指導①			解剖学(観察)実習で学んだ知識の整理・報告書作成等をする			
26							
27							
28	解剖実習後指導②			小テスト(筆記・口頭試問)			
29							
30							

31		
32	神経系	神経系について
33		
34		
35	循環器系	各系の器官・骨・筋・神経・脈管について模型等を利用して学ぶ
36		
37		
38	呼吸器系	
39		
40		
41	消化器系・泌尿器系	
42		
43		
44	生殖器系・内分泌系	
45		

授業科目名	臨床神経学(画像読影)		担当者名	及川隆司			
			実務経験	医師として病院等での勤務経験あり			
教科書	コツさえわかればあなたも読める リハに役立つ脳画像 MEDICAL VIEW	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	3	通年	必修	講義
		30					
授業概要	CT・MRI画像の読影を中心に、画像の見方を説明していく。						
学習到達目標	STとして臨床でよく直面する疾患のCT・MRI画像を読むことができる。						
評価方法	試験での得点により成績評価する。						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	画像診断の基礎(CTと各種 MRI 画像について)			各種画像診断の種類、何がどう映るか理解する			
2							
3	脳画像の基礎知識① 経時的変化を読み取る			梗塞巣・出血巣を例に読み取る			
4							
5	脳画像の基礎知識② CT・MRI の断面・基準線を知る			矢状断・環状断・横断像を区別する 基準線を理解する			
6							
7	脳領域の機能解剖			脳領域の機能解剖を復習する			
8							
9	脳領域の機能解剖と脳画像上同定法①			脳領域の構造と画像上での見え方を知る 例 ブローカ野・ウェルニッケ野等 脳梁・帯状回・小脳等			
10							
11							
12	脳領域の機能解剖と脳画像上同定法②						
13	脳領域の機能解剖と脳画像上同定法③			MRAで血管の状態を読み取る			
14							
15	脳萎縮と認知症① アルツハイマー型・前頭側頭型認知症			画像による各種認知症の特徴と萎縮部位を読み取る			
16							
17							
18	脳萎縮と認知症② レビー小体型・脳血管性認知症 正常圧水頭症・多系統萎縮症						
19	虚血性脳血管障害①			脳梗塞の発声機序と病巣範囲の関係を含めて読み取る			
20							
21							
22	虚血性脳血管障害②						
23	虚血性脳血管障害③			テント下の脳梗塞について、血管の状態も含めて読み取る			
24							
25	出血性脳血管障害①			被殻出血・視床出血・小脳出血について			
26							
27	出血性脳血管障害②			皮質下出血・くも膜下出血とその合併症を読み取る			
28							
29	頭部外傷			分類してそれぞれの画像の特徴をおさえる			
30							

授業科目名	介護技術論		担当者名	尾形由美子、小坂井秀行			
			実務経験	看護師、言語聴覚士として 病院等での勤務経験あり			
教科書	講師の資料による	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		1					
		時間数	言語聴覚科	3	通年	必須	演習
		30					
授業概要	多職種連携における看護分野(バイタル・医療的ケア)を理解する。急変時の対応について理解する。介護保険法について理解し、各種介護サービスにおけるSTの役割と実践について学ぶ。各種介護技術について学ぶ。						
学習到達目標	医療行為と看護分野の理解を通して適切に対応できるようになる。介護保険法におけるSTの立ち位置と役割、介護現場でのSTに求められる手技を理解し、介護技術を含めて実践に生かせるようにする。						
評価方法	筆記試験と実技内容						
時数	授 業 内 容		到達目標・学習課題など				
1	バイタルサインとは		バイタルサインの種類と略語				
2			バイタルサインの異常の見方				
3			意識レベル・JCSとは				
4	バイタルサインの実際		体温・脈拍・血圧・呼吸数の測定と記録方法				
5			事例よりバイタルサインの必要性を学ぶ。				
6	医療的ケアとは		医療行為とは				
7			日常生活において必要な医療的ケアとは				
8			喀痰の性状と吸引に起こりうること				
9	医療的ケアの実際		口腔吸引の実際				
10			鼻腔吸引の実際				
11			気管カニューレ内部の吸引の実際				
12	救急蘇生		急変とは 急変を未然に防ぐには				
13			心肺蘇生ガイドライン カラー救命曲線				
14	救急蘇生の実際		シュミレーターとAEDを用いた心肺蘇生の実際				
15	まとめ		医療従事者としての役割				
16	介護保険法の意義と目的		介護保険法の役割と目的を学ぶ。				
17							
18	介護技術の理解と実践①		ベッドメイキング ベッド上での衣類交換など基本的な介助方法を学ぶ。				
19							
20	介護技術の理解と実践②		ベッド、椅子からの起居動作に応じた介助の仕方を理解し、模擬介助を行う。				
21							
22	介護技術の理解と実践③		ベッド上での体位交換、食事介助、口腔ケア、摂食嚥下障害へのアプローチ方法を学ぶ。				
23							
24	介護技術の理解と実践④		介護現場で使用する自助具、車椅子など各種福祉用具の説明と使用方法。				
25							
26	介護技術の理解と実践⑤		介護現場でのコミュニケーション機器の理解と使用方法を学ぶ。				
27							
28	介護技術の理解と実践⑥		要介護状態に応じた介護方法を理解し、意思疎通から軽介助までを演習する。				
29							
30	まとめ		小テスト				

授業科目名	口腔衛生論		担当者名	永沼由香			
			実務経験	歯科衛生士として医院等での勤務経験あり			
教科書	教科書使用なし	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		1					
		時間数	言語聴覚科	3	前期	講義	講義
		15					
授業概要	口腔衛生が摂食機能・嚥下機能に及ぼす影響を理解し、言語聴覚士として必要な口腔内観察の視点と手技を習得する。						
学習到達目標	1. 口腔衛生不良が、嚥下機能および摂食機能に与える影響を理解することができる。 2. 口腔内を観察し、訓練実施時のリスク管理につなげる視点を身につけることができる。						
評価方法	・定期試験および出席率で総合的に評価する						
時数	授 業 内 容		到達目標・学習課題など				
1	口腔の健康		口腔の健康がQOLに与える影響を理解することができる				
2	乳歯と永久歯		乳歯と永久歯の特徴や役割を理解することができる				
3	口腔の疾患について		代表的な口腔疾患を理解することができる				
4	食生活とう蝕誘発		食生活とう蝕発生の関係を理解することができる				
5	口腔の観察実習(RDテスト バフテスト)		カリエスリスク検査の目的と方法を実践的に理解することができる				
6	LION 歯みがき大会 視聴型参加		視聴型で企業主催の「歯みがき大会」に参加し、学齢期における口腔清掃法を習得する				
7	ブラッシング法		毛先と脇腹をつかうブラッシング法を理解することができる。				
8	口腔内観察実習		口腔内を観察し、自己の口腔清掃状況を評価することができる				
9	" (歯垢染色剤による染め出し)		"				
10	歯磨剤・洗口剤の種類と応用法		歯磨剤・洗口剤の種類と特徴を理解することができる				
11	高齢者・要介護者の口腔衛生		高齢者・要介護者における口腔衛生の意義を理解することができる				
12	義歯について		義歯装着者に対する口腔衛生管理のポイントを説明することができる				
13	要介護者の口腔衛生法(ベッド上)		ベッド上での口腔衛生の基本的な手技と安全配慮について理解することができる				
14	"		"				
15	まとめ		まとめ				